569-14
1200501516574

569
14

岩波文庫
1302—1303

妻・闘決

チエーホフ作
神西清譯

岩波書店

216

岩波文庫
1302—1303

妻・闘決

作 フホーエチ
譯 清西神

岩波書店

569-14

目次

決闘……五
妻……二〇一
譯註……二八三
解題……二八七

決

鬪

ボギモヴォ村、一八九一年

一

朝の八時といへば、士官や役人や避暑客連中が蒸暑かつた前夜の汗を落しに海にひと浸りして、やがてお茶か珈琲でも飲みに茶亭へ寄る時刻である。イヴァン・アンドレーイチ・ライェフスキイといふ二十八ほどの、痩せぎすな淡色髪の青年が、大藏省の制帽をかぶりスリッパをひつかけて一浴びして來てみると、もう濱には知合ひの連中が大分あつまつてゐた。そのなかに、日ごろから親しい軍醫のサモイレンコもゐた。

大きな頭を五分刈りにして、猪首で赭ら顔で、それに大きな鼻、もぢやもぢやした黒い眉毛、胡麻鹽の頬髯、ふくぶくと緊りのない肥りやう、軍人獨特の太い嗄れ聲――かう並べて見ると、このサモイレンコがこの町に來たての人の眼に、どら聲の成上り士官といつた不快な印象を與へるのは無理もない。だが二三日も附き合つて見ると、この顔がひどく善良な可愛い顔に見えてくる、美しくさへ見えてくる。見掛けはいかにも不細工で粗野だが、その實彼は穩かな、底の底まで善良で實意のある男であつた。町ぢうの誰彼なしに君僕の間柄である。誰彼なしに金を用立てる、療治をしてやる、婚禮の橋渡しをしてやる、喧嘩の仲裁をしてやる、ピクニックの音頭取りになつて、羊肉の串燒きをする、とても旨い鰌のスープをこしらへる。年がら年ぢう誰かしらの

面倒を見たり奔走してやつたりしてゐる。そしてしよつちう何かしら嬉しがつてゐる。衆目の指すところ彼は非の打ちどころのない人間で、あるとしても弱點は二つしかない。一つは妙に自分の親切に羞れて、酷薄粗暴の風を裝ふこと。もう一つは、まだ五等官のくせに、助手や看護卒から一つ上の『閣下』といふ敬稱を以て呼ばれたがること。

「ねえ、アレクサンドル・ダヴィードィチ、君はどう思ふかね」と、このサモイレンコと並んで肩のあたりの深さまで來た時、ライェフスキイが口を切つた、「假にだよ、好きで一緒になつた女があるとする。そこでまあその女と二年餘りも一緒に暮らした擧句に、よくある圖だが厭氣がさして、緣もゆかりもない女に見えて來たとする。まあかうした場合に君ならどうするね。」

「至極簡單だね。さあ、どこへなりと出ておいで。――それだけの話だよ。」

「言ふは易しさ。だがその女に出て行きどころがなかつたらどうする。その女に身寄りも、金も、働く腕もないとしたら……。」

「なあに、そんなら五百ルーブルで綺麗さつぱりと行くか、さもなきや月二十五ルーブルの仕送りで行くか、それで文句なしさ。簡單至極だ。」

「よし、ぢやその五百ルーブルがあるとする。乃至は月々二十五ルーブル仕送れるとする。だがその女が教育のある氣位の高い女だつた場合、君はよもや金を突きつけるやうな眞似はできま

い。やるとしても、どういふ具合にやるかね。」

サモイレンコが何か答へようとしたとき、大きな波が二人の頭上にかぶさつて、やがて岸に碎けたかと思ふと、小石の間をざわめきながら引いて行つた。二人は岸へ上がつて、着物を着はじめた。

「そりや、厭になつた女と一緒にゐるのは辛いものさ」と、サモイレンコが長靴の砂を振るひ出しながら言つた、「だがね、ヴァーニャ、人情といふことも忘れちやいけないね。假に僕がそんなことになつたとしたら、まあ厭になつた素振りも見せずに、死ぬまで添ひ遂げるね。」

そこで急に自分の言つたことが氣恥かしくなつたと見え、

「だが僕に言はせりや、そもそも女なんか一人もゐない方がいい。女なんか惡魔に攫はれろだ」と言ひ直した。

着物を着てしまふと、二人は茶亭へ行つた。この茶亭をサモイレンコはわが家同樣に心得て、茶碗などもちやんと自用のが備へつけてある。毎朝彼に出る盆には、珈琲が一杯、脊の高い切籠(きりこ)のコップにアイスウォーターが一杯、コニヤックが一杯ときまつてゐた。彼はまづコニヤックをぐつとやり、それから熱い珈琲を飲み、それからアイスウォーターを飲む。それがまた堪らなく旨いのであらう、そのあとではきまつてとろんとした眼つきになつて、兩手で頰髯を撫で、ぢつ

と海に見入りながら言ふのだつた。

「實に何ともいへぬ眺めだ。」

長い夏の夜を、益もない不愉快な考へ事のため、蒸暑さや夜の闇までが一しほに募る思ひがして、殆ど眠れずに明かしたライェフスキイは、氣が滅入つてならなかつた。水浴も珈琲も氣分を引立てては呉れなかつた。

「ところでまた先刻の話だがね」と彼は言つた、「君には何も隠し立てはしまい。親友としてすつかりぶちまけて聽いて貰ふつもりだ。僕とナヂェージダ・フョードロヴナとの關係は愚劣だ。……實に愚劣だ。つまらん私事を聽かせて濟まない。だが僕はどうしても言はずには居られないのだ。」

話の樣子を察したサモイレンコは、眼を落すと、指さきで卓子をコツコツいはせはじめた。

「僕はあの女と二年一緒に暮らして、今ぢや厭氣がさしちまつたんだ」とライェフスキイは續けた、「いや、本當はかうだ、初めつから愛なんかなかつたことが、やつと悟れたのさ。……この二年間の生活は欺瞞だつたのだ。」

話をするときの癖で、ライェフスキイは自分の薔薇色をした掌をぢつと見る、爪を嚙む、でなければカフスをいぢくる。今もそれをやりながら、

「そりや君に助けて貰へない事ぐらゐ、僕だつてよく知つてゐる。しかしね、僕たち不運な餘計者といふものは、かういふ話でもさせて貰はなけりややり切れないんだよ。つまり自分のした事を一々一般化して見ずには居られない。自分の愚劣な生活に對する説明や辯護を、何かの理論なり文學上の人物の型なりの中に求めずには居られない。例へば、われわれ士族階級は頽廢しつつありといつた具合にね。……現に昨夜も僕は、『ああ、トルストイの言ふことは本當だ。實もつて一言もない』と云つたことを夜どほし考へて、自ら慰めてゐたのさ。お蔭で氣が樂になつたつけ。いや君、何と言つたつて大文豪だね。」

毎日讀まう讀まうと思ひながら、まだトルストイを讀んだことのないサモイレンコは、當惑して言ふのだつた。

「さう、誰もかれも想像で書く作家のなかで、彼だけは自然をそのままに寫すね……。」

「ああ、ああ」とライェフスキイは吐息をして、「一體僕たちは、どこまで文明に毒されてゐるのだ！　僕は人妻に戀した。女も僕を戀した。……初めのうちは接吻だ、靜かな宵だ、誓ひだ、スペンサーだ、理想だ、社會の福祉だ……。何といふ繪空事だ。正直のところは手を取り合つて女の亭主から逃げ出したまでなのを、われわれ知識階級の生活的空虛から拔け出したのだなんて自分に嘘をついたのさ。僕たちの描いた未來の夢を聽かせようか——まづコーカサスへ行つて、

そこの土地と風習に馴れるまでは、とり敢へず官服を着て勤める。やがて自由の身になつて、そこばくの土地を買ひ入れ、額に汗して働く。葡萄を作る、畠を作る、それから……といふ譯だ。もしもこれが僕ぢやなくつて、君かそれともあの動物學者のフォン・コーレンだつたら、ナヂェージダ・フョードロヴナと仲よく三十年も一緒に暮らした擧句に、立派な葡萄畑や千町歩もある玉蜀黍の畑を子孫に遺しただらうよ。ところが僕は、そもそもの第一日から、ああ俺は破滅だと思つちまつたのさ。町にゐればゐるで堪らなく暑い、退屈だ、淋しい。畠へ出れば出るで、どこの藪蔭にも石の下にも百足だの蠍だの蛇だのがうぢやうぢやしてゐる。さて畠の向ふはといへば山と荒野だ。見たこともない人間たち、見たこともない自然、みじめ極まる生活程度——すべてかうしたことは、君、溫い毛皮外套にくるまつてナヂェージダ・フョードロヴナと手を組んで、ネフスキイ★の大通りをぶらつきながら、南の國を夢見るほど呑氣なことぢやない。ここでは生きるか死ぬかの戰が必要なのだ。ところで僕は一體どんな戰士かね。憫むべき神經衰弱患者だ、遊民だ。……そもそもの初日から僕は、折角考へてゐた勤勞生活とか葡萄畑とかいふことは、鐚一文の値打もないことを了解したのだ。さて戀愛の方はどうかといふと、スペンサーを讀み、あなたの爲なら世界の涯までもといふ女と一緒に暮らすのも、そんじよそこらのアンフィーサやアクーリナと一緒に暮らすのも、その索然味に於いて何等擇ぶところはないのさ。これは斷言する

よ。相も變らぬアイロンの匂ひ、白粉の匂ひ、色んな藥の匂ひ、來る朝も來る朝も例の捲髮紙（パピヨート）、相も變らぬ自己僞瞞……。」

「アイロンなしぢや主婦の務めはできまい」と、知合ひの婦人のことをあまりライェフスキイがづけづけ遣つつけるので、サモイレンコの方が赤くなりながら言つた、「ねえ、ヴァーニャ、君は今日はどうかしてるぞ。ナヂェージダ・イヴァーノヴナは教育のある立派な婦人だ。君はまた君で、非常な秀才だ。……なるほど正式に結婚をしてゐないには違ひないが」と、あたりの卓子を憚りながら、「然しそれは君たちの罪ぢやない。且つ……われわれは偏見を棄てて、現代の思潮の水準に立たなければならん。僕自身としては自由結婚の支持者だ、さうとも。……だがね、僕に言はせると、一たび一緒になつた以上は、死ぬまで添ひとげるべきだ。」

「愛がなくてもかい？」

「今言ふから聽いてゐたまへ」とサモイレンコは續けた、「八年ほど前のことだが、ここで囑託をしてゐた老人があつた。非常な秀才だつたが、それが常に語つて曰くさ、『夫婦生活に一番大切なものは忍耐だ』と。どうだね、ヴァーニャ。愛ぢやなくつて忍耐なんだ。愛は永續するものではない。君にしてもだ、既に二年間の愛の生活を終つて、今や明かに君の家庭生活は、謂はばまあ平衡を保つて行くには全忍耐力を擧げて發動せしめなければならぬ、さうした時期に入つた譯

さ。……」

「まあ君はその囑託の老人を信じるさ。僕にとつちや、そんな忠言は全くのたは言だね。君のいふその老人なら、僞善がやれたかも知れない、忍耐の修行が出來たかも知れない。隨つてまた愛してもゐない人間を、自分の修行に缺くべからざる物品と看做しえたかも知れない。だが僕はまだそこまでは墮落してゐないね。忍耐修行がしたくなつたら、僕なら啞鈴(ダムベル)か荒馬を買ふ。人間を使ふ氣はしないね。」

サモイレンコは氷を入れた白葡萄酒を命じた。それを一杯づつ飲んだとき、ライェフスキイがだしぬけに訊ねた。

「腦軟化症といふのはどんな病氣かね。」

「それは、さあ何と言つたらいいかな——つまり腦が軟くなる病氣さ。……まあ溶け出すんだね。」

「癒るかね。」

「癒る、手遲れでさへなければ。冷灌水浴、發泡膏。……それから何か內服藥と。」

「ふむ。……これでもう僕の現狀が分かつて吳れたらうね。僕はとてもあの女と一緒にはやつて行けない。それは僕の力に餘る。かうして君と話してゐるうちは、僕もこの通り哲學を並べて

笑つてもゐられるが、家へ歸つたら最後もう駄目だ。厭で厭で堪らないんだ。假に、どうしてもう一と月あの女と一緒にゐろと言ふ人があつたら、僕はいつそこの額へ一發やつてしまふね。それでゐて、あの女と別れる譯にも行かない。身寄りのない女だし、働く腕もないし、金と來たら僕にも彼女(あれ)にも一文だつてない。……一體あれにどこへ行けといふのだ、誰に賴れといふんだ。考へたつて出てくるものか。……ええ、君、一體どうすればいいんだい。」

「ううむ」サモイレンコは返答に窮して唸つた、「あの人の方では君を愛してるのか。」

「ああ、愛してる。あの年ごろ、またああいつた氣性の女として、男が必要な程度にはね。僕と別れるのは、白粉や捲髮紙(パピヨート)と別れると同じ位に辛いだらうよ。彼女にとつて僕は、閨房に缺くべからざる構成分子なのだ。」

サモイレンコはすつかり度を失つて、

「ヴァーニャ、本當に君は今日はどうかしてゐる。——睡眠不足なんだらう。」

「いかにも睡眠不足だ。……それどころか、からだ具合が全體に惡い。頭の中はがらん洞だ。壓さへつけられるやうな感じで、どうも氣力がない。……この分ぢや逃げ出さなきやなるまい。」

「何處へかね。」

「彼方(あつち)へだ…北へだ。松林のあるところ、蕈(きのこ)の生えるところ、人間の住むところ、思想のある

ところへさ。……ああ今、どこかモスクヴァ縣かトゥーラ縣かで、小川でぽちやぽちややる、冷たくつて顫へ上がるね、それから一番びりつこの學生でも何でもいい、そいつを相手に三時間ほど歩き廻る、喋る、大いに喋りまくる——それが出來たら、命の半分ぐらゐは投げ出しても惜しくはないね。……ああ、乾草の匂ひ。憶えてるかい？　それから夕暮庭を歩いてゐると、家の中から漏れてくるピアノの音。遠くで汽車の通る音がする。……」

ライェフスキイは嬉しくなつて笑ひ出した。その眼には涙さへ浮かんでゐる。それを見せまいと、彼は燐寸をとる風をして、隣の卓子へと坐つたなりで身を伸ばした。

「僕はこれでもう十八年ロシヤを見ない」とサモイレンコが言つた、「どんなだつたか、すつかり忘れちまつた。僕に言はせれば、このコーカサスほど結構な所はないね。」

「ヴェレシチャーギン★の繪にこんなのがある。深い深い井戸の底で、死刑囚たちが悲歎に暮れてゐるところだ。君のいふ結構なコーカサスは、僕には丁度この井戸のやうに見えるのだ。ペテルブルグに煙突掃除たらんか、はた又この地に王侯たらんかと云ふことになつたら、僕は煙突掃除になるね。」

そのまま、ライェフスキイは考へ込んでしまつた。その前屈みの體つき、ぢつと一點に凝らした眸、蒼白い汗ばんだ顔、落ち窩んだ蟀谷、嚙み耗らした爪、スリッパの踵の方が垂れ落ちて、

靴下の不細工な繕ひの跡を見せてゐるあたりまで、サモイレンコはつくづくと眺めて、いかにも氣の毒な氣がした。ライェフスキイの有樣が寄邊ない孤兒を聯想させたのだらう、彼はふと、

「君のお母さんは生きてるかね。」

と訊いてみた。

「ああ。だが義絶も同然だ。母は僕たちの關係を許して呉れないんだ。」

サモイレンコはこの友達が好きだつた。ライェフスキイは善良愛すべき男だ、大學生だ、共に飲み、共に笑ひ、共に語るに足る好漢だ、と思つてゐる。ただ、彼に分かる限りのライェフスキイは、すこぶる氣に入らぬ特徴を具へてゐる。時を選ばずに大酒を飲む、カルタを打つ、勤めをおろそかにする、分を越えた生活をする、話をするとき屢々下品な言ひ廻しを使ふ、スリッパのままで街を歩く、人の前でナヂェージダ・フョードロヴナと喧嘩をする——かうしたことがサモイレンコの氣に入らない。その代り、ライェフスキイが曾て大學の文科にゐたこと、今でも分厚な雜誌を二つも取つてゐること、滅多な人には分からぬやうな難しい話をよくすること、教育のある婦人と一緒にゐること——かうした反面は、サモイレンコにはさつぱり分からぬながらも氣に入つてゐた。ライェフスキイは自分より一段上の人物だ、と思つて尊敬してゐた。

「實はもう一つ問題があるんだ」と、ライェフスキイは頭を振りながら言つた、「だがこれは此

處だけの話だよ。ナヂェージダにはまだ言はずにあるんだから、あれの前で喋つて貰つちや困るよ。……をととひ、あれの亭主が腦軟化症で死んだといふ手紙が來たんだ。」

「それはそれは」と、サモイレンコは吐息をついた、「で君は、なぜあの人に言はないんだ。」

「その手紙をあれに見せることは、つまり教會へ行つて正式に結婚式を擧げることを意味するからね。それよりもまづ、僕たちの關係をはつきりさせなければならん。もう二人はこれ以上一緒にやつては行けんといふ得心があれに入つたら、手紙を見せてやるつもりだ。さうなりや危險もないからね。」

「なあ、ヴァーニャ」と言ひかけて、急にサモイレンコは、何か大事な賴みごとがあるのだが斷わられはしまいかと氣遣ふやうな、悲しげな歎願するやうな顏附になつた、「なあ君、結婚しちまへよ。」

「何故だ。」

「あの立派な婦人に對する君の義務を果たすのさ。あの人の夫は死んだ。つまりこれで、攝理の指し示す所が分かる筈だ。」

「妙な奴だな。それが出來んと言つてるぢやないか。愛のない結婚をするのは、信仰なくして禮拜するのと同じく、人間として恥づべき卑劣な行爲だ。」

「でも君には義務がある！」

「なぜ義務がある？」とライェフスキイは詰め寄つた。

「君はあの人を夫の手から奪つたぢやないか。それは責任を引受けたといふことだ。」

「だから僕は愛してゐないと、ロシヤ語ではつきり言つてゐるのが聞こえないのか。」

「よし、愛せないなら尊敬したまへ、崇めたまへ。……」

「尊敬したまへ、崇めたまへか……」ライェフスキイは口眞似をして、「それぢや彼女(あれ)が尼院長みたいだな。……女と一緒にゐて、崇拜と尊敬だけでやつて行けると思ふんなら、君は憫笑すべき心理學者、また生理學者だ。女にまづ要るものは寢臺だ。」

「ヴァーニャ、ヴァーニャ」とまたサモイレンコはへどもどする。

「君は大きな子供だ、理論家だ、僕は若い老人だ、實際家だ。どうしたつて合ひつこはないさ。もうやめよう。おい、ムスターファ！」とライェフスキイは大聲でボオイを呼んで、「勘定。」

「いいよ、いいよ……」軍醫は喫驚してライェフスキイの腕をつかんだ、「これは僕が拂ふ。僕が註文したんだから」とムスターファに向つて、「俺につけといて呉れ。」

二人はそこを出ると、默つて海岸通りを歩いて行つた。やがて遊歩路へ出る角で立ちどまつて、別れの握手をした。

「なあ君、君も悪くなつたものだ」とサモイレンコは歎息した、「運命は君に贈るに、若く美しい教育ある婦人を以てした。それを君は要らないといふ。僕なら、よたよた婆さんを授かつてもいい、ただ親切で、優しくして呉れさへすれば大いに滿悅するね。わが葡萄畑のほとりに共に住んで……」

そこで急に氣を變へて、

「いやなに、その婆さんにサモヴァルでも立てて貰ふさ。」

ライェフスキイと別れたサモイレンコは遊歩路を歩いて行つた。でつぷりした堂々たる體軀を雪白の軍服に包んで、きれいに磨き上げた長靴を穿き、結びリボンの附いたヴラヂーミル勳章の輝く胸をぐつと張つて、嚴めしい顏附で遊歩路を濶歩するとき、彼は大いに自ら滿足を感ずるとともに、世間の人の眼にもさぞ自分が愉快に映るだらうと思ふのだつた。顏をまつすぐ前方に向けて、彼はあたりに眼を配つて行きながら、この遊歩路の出來榮えは申分がないと思ひ、まだ若い絲杉やユーカリや、體液不調だと見えて醜い棕櫚やを實に美しいと思ひ、今にだんだん大きな樹蔭を作るやうになるだらうと思ひ、チェルケース人★は正直で客好きな種族だなどと思ふのだつた。そして『このコーカサスがライェフスキイの氣に入らんとは可笑しい、どうも可笑しい』と考へた。銃をかついだ兵隊が五人、向ふから來て敬禮して通る。遊歩路の右側の歩道を、役人

の妻君が息子の中學生を連れて通る。

「お早う、マリヤ・コンスタンチーノヴナ」と、サモイレンコはにこにこして聲を掛ける、「水浴でしたか、ハ、ハ、ハ。……ニコヂーム・アレクサンドルィチに宜しく。」

そして、獨りでにこにこしながら歩いて行く。やがて向ふから軍醫助手がやつて來るのを見ると、急に眉をしかめて呼びとめて訊く。

「患者が來てをるか。」

「參つてをりません、閣下。」

「なに。」

「參つてをりません、閣下。」

「よし、行け。……」

威風堂々と體を搖すりながら、彼はレモナーデの賣店(スタンド)へ足を向ける。一見グルジヤ女★とも見まがふ滿々たる胸をした猶太婆さんが、臺の向ふに坐つてゐる。その婆さんに、彼は三軍を叱咤するやうな聲で言ふ。

「君、ソーダ水を一杯たのむ！」

二

ライェフスキイがナヂェージダ・フョードロヴナに嫌悪を感ずるのは、何よりもまづ、彼女の言ふこと爲すこと悉く嘘乃至は嘘らしく見えてならぬからである。また、今までに讀んだ女性ならびに戀愛についての反對論の悉くが、これ以上は望めぬほどぴつたりと、彼とナヂェージダ及びその夫の場合に當て嵌つて見えるからである。家に歸つて見ると、彼女はもう髪をととのへ身仕舞ひを濟まして窓際に坐り、むづかしい顔をして珈琲を飲みながら、厚い雜誌の頁をめくつてゐた。それを見ると、彼は心に思ふのだ——珈琲を飲むのに、何もそんなむづかしい顔をすることはないぢやないか。誰に見せて喜んで貰はうといふ目的も必要もないこの土地で、何もそんな時間を掛けて流行の髪に結ふことはないぢやないか。雜誌までが、彼には嘘に見えてくる。髪を結つたり身仕舞ひをしたりするのは、美人に見られたいからだ。雜誌を讀むのは利口に見られたいからだ。

「今日、海水浴に行つてもよくつて」と彼女が訊いた。

「どうしてさ？　お前が行かうと行くまいと、まさかそのため地震が起こりやしまいし。……」

「だつて私、先生にまた叱られるといけないと思つて。」

「ぢや先生に訊いたらいいさ。僕は醫者ぢやない。」

今度は、彼女の露はな白い頸筋と後頸を這ふ捲毛の束とが、堪らなくライェフスキイの氣に障るのだつた。夫への愛の冷めたアンナ・カレーニナにとつて、何より厭でならなかつたのは夫の耳だつたといふ話を思ひ出して、彼は『本當だ、あれは實に本當だ』と思つた。

氣分も悪いし、頭が空つぽになつたやうな感じなので、彼は書齋に入つて長椅子に横になり、蠅よけにハンカチを顔にかけた。一つことの周りを堂々めぐりするだらだらともの憂い想念が、雨もよひの秋の夕暮を行く荷馬車の行列のやうに、彼の腦裡を繫がつて通る。彼は、睡いやうな重たい氣分に落ちて行つた。ナヂェージダにもその夫にも自分は悪いことをした、彼女の夫が死んだのも自分のせゐだ、自分の生活を臺なしにしたのも自分の罪だ、高い思想の世界、知識の世界、勤勞の世界に對しても、自分は濟まぬことをした、とそんな氣がした。そしてさう云ふ絶妙な世界が存在し得るのは、オペラがあり芝居があり新聞があり、ありとあらゆる智的勞働があるあの北方だけで、餓ゑたトルコ人や怠惰なアブハジヤ土人★のうろついてゐるこの海邊には、とても存在しえぬやうな氣がした。彼處にゐてこそ、正直な人間にも、賢い人間にも、高尚な人間にも、純潔な人間にもなれるので、此處にゐてはとても駄目なのだ。理想もなく確乎とした生活方針もないわれとわが身を彼は責めるのだつた。尤もそれが何であるかは、今では朧ろげながら

分かつてゐたけれど。……二年前ナヂェージダを戀した時には、彼女と手を取りあつてコーカサスへ行きさへすれば、それで俗惡空虛な生活から救はれるものと考へてゐた。同樣に今では、ナヂェージダと手を切つてペテルブルグへ行きさへすれば、それで一切が購へると確信してゐるのだ。

「逃げるんだ」と彼は呟いた、起き直つて爪を嚙みながら。「逃げるんだ。」

自分が汽船に乘り込むところ、やがて朝食の卓に向ふところ、冷たい麥酒を飲むところ、甲板に出て婦人たちと話をはじめるところ、それからセヴァストーポルで汽車に乘つて北へ向ふところ——彼の想像は次から次へと展がつた。ようこそ、自由よ！　停車場が一つまた一つとひらめき過ぎ、空氣は次第に冷々と身にしむ。そら白樺、そら樅。そらクールスク、そらモスクヴァ。……停車場の食堂には野菜スープがある、羊肉のオートミールがある、鱈魚料理がある、麥酒がある。一口にいへばもう野蠻なアジアぢやない、ロシヤだ、本當のロシヤだ。乘客たちの話は、商賣のこと、新しい聲樂家のこと、露佛協商のことだ。どこを見ても、文化的な、教養ある、潑溂颯爽とした生活が感じられる。……急げ、急げ。さあ、やつとネフスキイ廣小路だ、ボリシャーヤ・モルスカーヤ通りだ、ああ、ここは學生時代の古巣コヴェンスキイ横町だ。懷しい灰色の空、そぼ降る雨、濡れてゐる辻馬車の馭者。……

「イヴァン・アンドレーイチ」と誰か隣室で呼ぶ、「をられますか？」

「ゐますよ」とライェフスキイは答へる、「何ですか。」

「書類です。」

ライェフスキイは大儀さうに起ち上がつた。少し眩暈がする。欠伸をしながら、スリッパをぺたつかせて隣の部屋へ行く。往來に立つて、開けはなした窓ごしに覗いてゐるのは年若な同僚の一人で、窓の張出しに役所の書類を擴げてゐる。

「今すぐ。」優しくライェフスキイは言つて、インキ壺を取りに行く。やがて窓際に歸つて來ると、眼も通さずに署名をして、「暑いねえ。」

「ええ。今日はお出になりますか。」

「さあね。……少し加減が惡いんでね。シェシコーフスキイに、食後にお寄りするつて言つといて呉れ給へ。」

同僚が歸ると、ライェフスキイはまた書齋の長椅子に寢ころんで、考へはじめた。——

『とにかく、あれやこれやを考へて方針を立てなきやならん。發つ前に先づ借金の片を附けることだ。借金は二千ルーブルからあるところへ持つて來て、俺は一文無しだ。……勿論、これは大した問題ぢやない。何とかして今一部だけ拂つて置けば、あとはペテルブルグからでも送れる。

何といつても問題はナヂェージダだ。……先づ第一に二人の關係をはつきりさせることだ。……さう。』

やがて、サモイレンコのところへ相談に行つて見たら、と考へて見る。

『行つて見てもいいさ。だが恐らく何にもなるまい。また俺は、閨房論だの婦人論だの、正しいの正しくないのと、見當外れの議論をはじめるにきまつてゐる。一刻も早く自分の命を救はなければならない此の際、この呪はれた束縛で今にも息が窒まりさうで、自殺も同然の此の際、正しいも正しくないもあるものか。……もういい加減に分かつてもいい頃だ、この俺のやうな生活を續けて行くことが、どんなに卑劣だか、殘酷だかが。それに比べれば、他のことは取るに足らぬ些事だ。逃げ出さう!』と起き直つて呟いた、『逃げ出さう!』

荒れ寂びた海邊、堪へがたい炎暑、それに何時見ても默々と同じ姿をして永遠に孤獨な、淡紫に煙りわたる山々の單調さ——かうした總てが彼を憂鬱にするのだつた。それは彼を眠り込ませて、その間に彼の大事なものを盜んだやうに思はれた。一體自分は、非常に聰明で有能で、とても正しい人間かも知れないのだ。この海や連山に八方から取り圍まれてさへゐなければ、自分は地方自治體の錚々の士に、政治家に、雄辯家に、政論家に、功績者になれたかも知れぬのだ。誰がそれを否定できよう。さうだとすれば、例へば音樂家とか畫家とかいふ天分の豐かな有爲の人

物が、囚はれの境涯を脱れたいばかりに牢を破つたり、看守を瞞したりしたとて、正しい正しくないの問題ぢやあるまい。かうした人物の立場から見れば、總てが正しいのだ。

二時になるとライェフスキイはナヂェージダと晝食の卓に向ひ合つた。料理女がトマトの入つた米のスープを出したとき、ライェフスキイが言つた。

「毎日毎日同じだね。なぜ野菜スープをしないの。」

「キャベツがないんですもの。」

「ふむ、妙だね。サモイレンコのところでもキャベツ・スープをしてゐる。マリヤ・コンスタンチーノヴナのところでも野菜スープが出る。この甘つたるいどろどろした奴を食はされるのは、何故か知らんがこの僕一人だ。こんなこつちや駄目だね、奥さん。」

どこの夫婦も大抵はさうであるが、以前はこの二人も、食事のとき氣紛れな口喧嘩をせずに濟んだことは一度もなかつた。しかし彼女に厭氣が射してからといふもの、ライェフスキイは努めてナヂェージダに逆らはぬやうにして、口の利きやうも物柔らかに丁寧になつた。いつもにこにこして、『奥さん』と呼ぶのだつた。

「このスープは甘草汁みたいだね」と彼はにこにこしながら言つた。愛想よく見えるやうにと努力してゐたのだが、やはり我慢しきれなくなつて、「一體この家には、家のことを見る人間がゐ

ないんだ。……君が病氣か、それとも讀書で忙しいんなら、僕が臺所をやらうぢやないか。」

これが以前なら、彼女は「ええ、やつて頂戴」とか又は、「ぢや私に料理女になれと仰言るのね」とか言ひ返したにちがひない。だが今では、おづおづと男の方を見て、顏を赤らめるだけだつた。

「で、今日は氣分はどうだい」と彼は優しくたづねた。

「今日はいい方ですの。ただちよつと元氣がないだけ。」

「大事にするんだね、奥さん。僕は心配でならないんだ。」

ナヂェージダはどこか悪いのだつた。サモイレンコは間歇熱だと言つてキニーネを與れた。ウスチーモヴィチといふもう一人の醫者は、晝間は家にゐて夜になると兩手を後ろに組んで、蘆のステッキをぴんと背中に突立てて靜かに海邊を歩き廻つては咳をするといふ、人嫌ひの脊の高い痩せた男だつたが、これは婦人病だと言つて溫濕布をすすめた。以前まだ愛のあつた頃は、彼女が病氣だと聞くと可哀さうにもなり心配にもなつたが、今では病氣までが嘘のやうに思はれた。熱發作の終つた後のナヂェージダの睡たげな黄色い顏、懶げな眸と欠伸、それから發作の最中に格子縞の毛布をかけて、女といふよりは男の子に似てゐる容子、むんむんと厭な臭ひのする女の部屋——總てかうしたことが、彼に言はせると幻滅の因であり、愛や結婚を否定する素因なので

あつた。

二皿目には菠稜草（ほうれんさう）と固く茹でた玉子が出た。ナヂェージダは病人だから、牛乳をかけたジェリーだつた。彼女が心配さうな顏をして先づ匙で觸つて見てから、やがて牛乳を啜りながら懶げに食べはじめたとき、こくんと喉の鳴る音がするたびに、彼は嫌惡のあまり髮の根が痒くなるほどだつた。こんな感情は、相手が犬の場合でも失禮極まるものだとは知つてゐたが、彼は自分を咎める氣はせず、却つてかうした感情を起こさせるナヂェージダが無性に腹立たしかつた。世の中の男が情婦殺しをする氣持が分かるやうな氣がした。勿論自分はそんなことはしまい。しかし、もし自分がいま陪審官になつたら、情婦殺しを無罪にするに違ひない。

「有難（メルシ）うよ、奥さん。」食事が終ると彼はかう言つて、ナヂェージダの額に接吻した。

それから書齋に入つて、ものの五分ほど、横目で長靴を睨みながら隅から隅へ往つたり來たりしてゐたが、やがて長椅子に腰を下ろして呟いた。

「逃げるんだ、逃げるんだ。きつぱり片をつけて逃げるんだ。」

彼は長椅子に横になつた。再び、ナヂェージダの夫の死は自分の罪かも知れぬと思つた。

「惚れた、厭氣が射した、それだけのことで人間を責めるのは愚だ。」寢ころんだままで長靴を穿かうと兩足を持ち上げながら、彼は自分に言ひ聽かせた、「愛憎は人のよく制する所に非らず

さ。あれの亭主が死んだについては、俺も間接の原因の一つなのかも知れんが、俺が彼奴の女房に惚れ、彼奴の女房が俺に惚れたといつて、一體それがこの俺の罪か。」

彼は起き上ると制帽を探し出して、同僚のシェシコーフスキイの所へ出掛けた。この家には毎日のやうに役人連が集まつて、ヴィント★をしたり冷やし麥酒を飲んだりするのである。

「俺の優柔不斷な所はハムレットそつくりだ」と途々ライェフスキイは考へた、「シェークスピヤの觀察は實に正しい。ああ、實に正しい！」

三

退屈を紛らすためと、この町には旅館がないので新たに赴任して來た人や獨身者は食事が出來ずにひどく困るのを見兼ねて、軍醫サモイレンコは自宅で一種の食堂みたいなものをやつてゐた。その頃、彼のところに食事に來てゐたのは二人だけで、一人は、黑海の夏をめがけて水母（くらげ）の發生學の研究に來てゐる若い動物學者のフォン・コーレン、もう一人は、補祭の老人が療養に出掛けてゐる間の代理にこの町へ派遣されて來た、神學校を出たばかりのポビェドフといふ補祭である。二人とも晝飯と晩飯で月に十二ルーブルづつ出してゐたが、サモイレンコはこの二人に、きつかり二時に食事に來るといふ固い約束をさせてゐた。

先に來るのはいつもフォン・コーレンである。默つて客間の椅子に腰を下ろすと、卓上のアルバムを手にとる。そして、だぶだぶのズボンにシルクハットをかぶつた見知らぬ紳士や、箍骨（わぼね）で張つたスカートに頭巾帽をかぶつた貴婦人の色の褪めた寫眞を、注意ぶかく一枚一枚點檢する。サモイレンコも殆ど名前は覺えてゐない。名前を忘れた人のことは、「實に賢い立派な人物だつたが」と言つて溜息をするのだつた。アルバムの點檢が濟むと、フォン・コーレンは飾棚からピストルをとつて、左の眼を細くして長いことヴォロンツォフ公★を狙つてゐる。さもなくば鏡の前に立つて、自分の淺黑い顏や大きな額や、ニグロのやうに攣れた黑い髪の毛や、波斯絨毯みたいな大きな花模樣のある鼠色更紗のワイシャツや、チョッキ代りの幅のひろい革帶やを點檢する。この自己觀照は、アルバムの檢査や高價な象嵌のあるピストルよりも寧ろ嬉しさうである。實際彼は、自分の顏附や、きれいに刈り込んだ小さな顎鬚や、健康と頑丈な體格の立派な證據である廣い肩幅を見るのが、ひどく樂しいのである。上はワイシャツの色に合はせて選んだネクタイから、下は黃色い短靴に至るまで、彼は悉く自分の伊達好みな服裝に滿足なのである。

彼がアルバムを點檢したり鏡の前に立つたりしてゐる時、臺所とそれに續く板の間では、上着もチョッキも脫ぎ棄てて胸をはだけたサモイレンコが、のぼせ上がつて汗だくの態で、サラダや何だかのソースや、冷スープにする肉や胡瓜や玉葱やをこしらへながら、調理臺の周りを駈け廻

つて、手傳ひの從卒を凄い劍幕で睨みつけたり、手當り次第ナイフやスプーンを振り上げたりしてゐる。

「酢をよこせ」と命令が下る、「それは酢ぢやない、オレーフ油だ」と地團駄を踏んで呶鳴る、

「どこへ行くんだ、間抜め！」

「バタを取りに、閣下」と、おろおろした從卒が壓しつぶされたやうなテノールを出す。

「さつさとしろ。バタなら戸棚だ。それからダーリヤに、胡瓜漬の壺へ蒔蘿を入れさせとけ。蒔蘿だぞ。こら、クリームに蓋をせんか。蠅がたかるぢやないか、頓馬！」

彼の叱咤に家鳴震動せんばかりである。二時十分前か十五分前になると、補祭がやつて來る。これは髪を長くした二十二程の瘦せぎすの青年で、顎鬚はないが、見えるか見えぬぐらゐの口髭がある。客間にはいると先づ聖像に十字を切つて、にこやかにフォン・コーレンに手を伸べる。

「やあ」と動物學者は冷やかな調子で、「どこへ行つてましたね。」

「波止場で沙魚を釣つてゐました。」

「まづ、そんなとこでせう。……お見受けするところ、あなたは一向お仕事をなさらんやうですが。」

「なあに、仕事は熊ぢやないから、森の中へ逃げて行きはしませんさ」と、補祭は祭服の下衣

のとても深いポケットに兩手を突つ込んだまま、笑ひながら言ふ。

「君も暢氣な人だな」と動物學者が歎息した。

それからまた十五分二十分と經つが、食事の報らせは一向ない。相變らず從卒が板の間から臺所へ臺所から板の間へ、どたどたと長靴で駈けずり廻る音と、サモイレンコの叱咤が聞こえるばかりである。——

「テーブルへ載せろといふに！　こら、何處へ持つて行く！　先にそれを洗ふんだ。」

腹の減つてたまらぬ補祭とフォン・コーレンはもう我慢がならず、大向ふの客よろしくといつた調子で、踵で床を鳴らしはじめる。やつと扉が開いて、へとへとになつた從卒が、「飯が出來たであります！」と披露する。二人が食堂へ入ると、臺所の溫氣でうだつて緋の衣みたいな顏色をしたサモイレンコが、ぷりぷりしながら立つてゐる。ぎよろりと二人を睨めつけ、恐々といつた顏附でスープ鉢の蓋を取つて、二人の皿に分けてやる。二人がさも旨さうに食べだす樣子に、さては氣に入つたかと安心が行くのであらう、ほつと息をついて深々とした肘掛椅子に腰を下ろす。すると顏附までがぐつたりして、とろんとした眼附になる。……ゆつくりと自分の杯にヴォトカを注いで、かう言ふ。——

「若き世代（ヤンガー・ジエネレーション）の健康を祝す！」

その朝ライェフスキイと話をしてから晝飯になるまで、サモイレンコはひどく上機嫌ではあつたものの、胸の奥に何かしら重い感じがとれなかつた。ライェフスキイが可哀さうで、できることなら助けてやりたいと思つてゐた。スープにかかる前にヴォトカを一杯飲むと、彼は溜息をついて言つた。

「今朝ヴァーニャ・ライェフスキイに逢つたつけ。可哀さうにあの男も苦勞してゐるよ。物質生活にも惠まれてゐないが、そんなことより精神的に參つてゐる。氣の毒なことだ。」

「僕は一向氣の毒だとは思はんね」とフォン・コーレンが言つた、「もし彼奴が溺れかかつてゐたら、僕はステッキでもつと突つ込んでやるね。さあ、溺れちまへ、溺れ死んぢまへつてね。」

「嘘つけ。君にそれが出來るもんか。」

「とは情ないな」と動物學者は肩をすくめて、「僕は善事にかけちや君に劣らんつもりだ。」

「人間を溺れさせるのが、善事とは驚いたな」と、補祭が笑ひ出した。

「ライェフスキイをかね。さうとも。」

「この冷スープには何か足らんやうだ……」と、サモイレンコは話題を變へようとした。

「ライェフスキイは斷然有害な人物だ。社會にとつてコレラ菌みたいに危險極まる奴だ」と、フォン・コーレンは語を續けた、「奴を溺死させるのは立派な社會奉仕だ。」

「隣人のことをそんな風に言ふのは、君にとつて名譽ぢやないぞ。一體何がさう憎らしいんだね。」

「つまらんことを言ひ給ふな。ドクトル。細菌を憎んだつて仕方がない。細菌を輕蔑したつて始まらん。況や、出會した奴ならどこの馬の骨でも一切合財隣人と看做すに至つては、有難い仕合せながら、思慮がなさ過ぎるといふものだ。人に對する態度に公正を缺くといふものだ。一口に言へば、僕は御免を蒙る。僕は君のライェフスキイ氏を、人でなしだと思つてゐる。この考へを敢て匿さず、正々堂々と彼を人でなし扱ひにしてゐる。ところが君は彼を隣人と看做す。よし御隨意にキスなり何なりとし給へ。君が隣人と看做すといふことは、とりも直さず彼を僕乃至この補祭君並みに扱ふといふことだ。すなはち何扱ひにもしないといふことだ。つまり君は誰に對しても一樣に無關心なのだ。」

「人でなし呼ばはりするなんて」とサモイレンコはさも厭はしげに眉を顰めて呟いた、「そりや君、何ぼ何でも酷すぎるぞ。」

「人はその行爲で判斷する他はない」とフォン・コーレンはなほ續ける、「ねえ補祭君、一つ君考へて呉れ給へ。……僕は君に聽いて貰はう。わがライェフスキイ氏の行狀は、君の眼前に支那の卷物みたいに歴然と繰り展げられてゐる。從つて君はその初めから終りまで讀むことが出來る

筈だ。彼がここに來て二年のあひだに一體何をしたか、ひとつ指を折つて數へて見よう。まづ第一に、彼はこの町の人間にヴィント遊びの味を覺えさせた。二年前まではこの遊びはこの町では知られてゐなかつた。今ぢやどうだ、朝から夜中までみんなこれに夢中だ。婦人や未成年者までがやつてゐる。第二に、彼はこの土地の人間に麥酒を飲むことを敎へた。これまた彼が來るまでは無かつたことだ。土地の人間がヴォトカの見別け方を覺えたのも一に彼のお蔭だ。今ぢやみんな目隱しをされてもコシェリョフ吟造とスミルノフ二十一番とを易々と利きわける始末だ。第三に、以前は人の女房と同棲することは人眼を避けてやつたものだ。これは泥棒が物を盗むのに人眼を避けて、決して大つぴらにはやらぬと同じ心理だ。人々は姦通といふものを、衆人環視裡では行ふべからざるものと心得てゐた。ライェフスキイはこの點でも先驅者の役目を勤めた。彼は公然と人の女房と一緒になつてゐる。第四に……」

フォン・コーレンはすばやく冷スープを掻き込んで、皿を從卒に渡した。

「僕はライェフスキイと知り合つたその月の中に、彼の人物が分かつてしまつた」と彼は補祭を相手に續けた、「僕は彼と同時にこの町へ來た。一體ああいふ種類の人間は、友情とか親密とか仲間とかいふものが非常に好きだ。それはつまり、ヴィントの相手、酒の相手、茶の相手がなくては濟まんからだ。且つお喋りだから、自然聽き手も入用な譯だ。さて僕と彼は友達になつた。

といふのはつまり、毎日彼がふらふらやつて來て僕の仕事の邪魔をし、訊きもせぬのに自分の妾のことを洗ひざらひ喋つたといふ意味だ。僕は直ぐと、彼の口を衝いて出る途轍もない嘘の連續に啞然とさせられた。ただもう胸が惡くなつた。僕は親友として、何故さう深酒をするのか、なぜ身分不相應な暮らしをして借金ばかりするのか、なぜ遊んでばかりゐて本を讀まぬのか、何故さう敎養がなく無知なのか——などと一通りの苦言は呈して見た。それに對して彼は苦笑ひをし溜息をついて、かう答へるのを常とした。——『僕は薄命兒だ、餘計者だ。』乃至『君はわれわれ農奴制の出殼に何を求めようといふのか。』あるひはまた、『われわれは頽廢しつつあるのだ』といつた調子だ。さもなけりや、オネーギンだとか、ペチョーリンだとか、バイロンのカインだとか、バザーロフだとかに就いて、囈語を並べだす。そして言ふのだ。——『これこそ靈肉ともにわれわれの祖先だ。』つまり君、役所の書類が封も開けずに何週間も放り出してあつたり、御自身はもとより他人まで酒飲みにさせたからといつて、何も彼が惡いんぢやない。惡いのはオネーギンだ、ペチョーリンだ、薄命兒だの餘計者だのを發明したトゥルゲーネフだ、と言ふんだね。その言語道斷の不品行やふしだらにしても、その原因は彼自身の裡にはなく、どこか彼の外、まあ空中にでもあると言ふわけなのだね。それに、どうも性のわるい男でね、不品行で嘘つきで唾棄すべきは何も彼だけなのぢやない、われわれなのだ。……『われわれ八十年代の人間』、『われ

われ沈滯し且つ神經質な、農奴制の汚らはしき後裔』、『われわれ文明によつて蹇へにされた者ら』なのだ。……一言にして言へば、僕たちは次のことを了解せねばならんのだ。――ライェフスキイの如き偉大な人間は、その沒落に於いても亦偉大であること。彼の不品行、ふしだら、猥雜は、必然によつて聖化された自然科學的現象なのであり、その依つて來たるところの原因は世界的であり、不可抗力に屬すること。かくの如くライェフスキイは時代、思潮、遺傳等々の呪はれたる犧牲であるから、須らく彼に燈明を上げなければならぬこと等々。役人連や女連はこれを聽いて『おお』とか『ああ』とか感歎の聲を漏らしてゐたが、僕は長いあひだ、そもそもこれは何者だらうかと了解に苦しんでゐた。シニックか、それとも達者な巾着切りか。何しろ彼のやうな、一見インテリらしく、少しは教育もあり、自分の生まれのよさを喋々する手合と來たら、際限ない複雜な性格を裝ふことが上手なものだからね。」

「よさんか！」とサモイレンコは憤然として、「僕の面前で、高潔の士を悪しざまに言ふことは許さんぞ。」

ノ「まあ待ち給へ、アレクサンドル・ダヴィードィチ」とフォン・コーレンは冷やかに、「もう直ぐ結論にするよ。ライェフスキイなるものは、極めて簡單なオルガニズムである。彼の精神の骨骼は次の如し。――朝、スリッパと海水浴と珈琲。それから晝飯まで、スリッパと運動とお喋り。

二時、スリッパと晝飯と酒。五時、海水浴とお茶と酒。それからヴィントと嘘つぱち。十時、夜食と酒。十二時過ぎ、睡眠とをんな。卵が殼の中にあるやうに、彼の存在はこの狹小なプログラムを一歩も出ない。彼が歩かうと坐らうと、怒らうと書かうと喜ばうと、その一切は酒と骨牌とスリッパと女に歸するのだ。なかでも女は、彼の生活に運命的、壓倒的な役割を演じてゐる。彼自身の物語る所によると、十三歳にして既に彼は戀をした。大學の一年のとき、さる婦人と同棲したが彼はこの婦人からよき感化を受けたのみならず、その音樂的教養もこの婦人に負うてゐる。大學の二年のとき、彼はさる家から娼婦を請け出して、自分と同等にまで引き上げてやつた。つまり妾にした。この女は半年ほど一緒にゐただけでまた元の古巣へ舞ひ戻つてしまつたが、この女に逃げられたことは餘程彼の心の傷手になつたさうだ。ああ、かくて彼は悶々の極學業を放拋して、二年間家に爲すこともなく過ごさねばならなかつた。だがこれが彼に幸ひしたといふのは、家で彼はある未亡人と慇懃を結ぶことになり、この未亡人が彼に法科をやめて文科に移れと勸めたのだ。彼はその勸めに從つた。大學を出ると、彼は今のあの……何て言つたつけね、あの人妻に熱烈な戀をして、理想とやらを追うてこのコーカサスへ駈落ちをする破目になつた。今日明日のうちにはあの女に厭氣がさして、またペテルブルグへ舞ひ戻るだらうよ。同じく理想を追うてね。」

「どうしてそれが分かる？」とサモイレンコは憎さげに動物學者を睨め据ゑて呟いた、「それよりもまあ食へ。」

鰡の煮附けとポーランド・ソースが出た。サモイレンコは二人の皿に一尾づつ分けて、自分でソースを掛けてやつた。二分ほどは沈默のうちに過ぎた。

「誰の生活を見たつて、女は大切な役割を演じてゐますよ」と補祭が言ふ、「こればかりはどうにもならない。」

「それはさうさ。だがそれも程度があらうぜ。われわれにあつては、女は母だ、姉妹だ、妻だ、友達だ。ところがライェフスキイにあつてはどうだ、女はこれらの一切であると同時に、また單に情婦でもある。女――いや女と同棲することが、彼の生活の幸福であり目的なのだ。彼の快活も憂鬱も退屈も幻滅も、みんな女が因だ。生活が厭になつた――それも女のせゐだ。新しい生活の曙光が射した、理想が見出された――そこにも女がゐる。……小説でも繪でも、女が描いてなければ面白くない。彼の意見によると、われわれの時代がつまらなく、四十年代や六十年代に比べて劣つてゐるのは、唯々われわれが戀愛の法悦や情熱に吾を忘れて打ち込む術を知らぬからだ、さうだ。かういふ好色漢の腦髄には、きつと肉腫といつた風の特殊な贅肉があつて、それが腦髄を壓迫し、心理全體を支配してゐるに違ひない。ライェフスキイがどこか人中にゐるところを觀

察して見給へ、すぐ眼につくことだ。何か一般的な問題、例へば細胞とか本能とかの話が出てゐるうちは、彼は隅に引つ込んで默つてゐる。ろくろく聽いてもゐない。その樣子と來たら、いかにも懶い、當てが外れたといつた風で、何もかもつまらん、下らん、月並だといはんばかりの顏をしてゐる。ところが、談ひとたび雌雄のことに及ぶと、例へば蜘蛛の雌は受胎を終ると雄を食つてしまふといふやうな話がはじまると、彼の眼はたちまち好奇心に燃えて來る、顏が晴々して來る、一口に言へば生き返つたやうになる。あの男の考へることは、どんな上品なことでも高尚なことでも平凡なことでも、落ち着く先は一つだ。彼と街を歩いて見給へ。例へば向ふから驢馬が來たとする。すると、『ねえ君、驢馬の雌に駱駝をかけて見たらどうなるかしら』と來るんだ。それからあの男の見る夢と來たら！　君に夢の話はしなかつたかね。何とも素晴らしいものさ。月と結婚するところとか、警察へ呼び出されて、ギターと同棲を命ぜられるところとか、そんな夢を見るんだ。……」

補祭は噴き出した。サモイレンコは笑ひたいのを我慢して、眉をしかめ怒つたやうな澁面を作つたが、到頭これも笑ひ出した。

「みんな出鱈目だ」と彼は涙を拭きながら、「よくもさう出鱈目が言へるね。」

四

補祭はとても笑上戸で、つまらぬことを一々、横腹の痛くなるまで笑ひ轉ける。彼が人中へ出るのが好きなのは、人々に夫々滑稽な一面があつて、それに滑稽な綽名をつけられる、それだけが目的だとも見える。サモイレンコには囊蜘蛛といふ綽名をつけた。從卒には雄鴨といふ名をつけた。何時かフォン・コーレンが、ライェフスキイとナヂェージダに『猿の夫婦』の尊稱を奉つた時には、有頂天になつて喜んだ。彼は貪るやうに相手の顏に見入る。瞬きもしないで相手の言葉に聽き入る。その眼がだんだん笑ひで一杯になり、今に思ふ存分笑ひ轉げられるぞと、期待で顏が緊張して來る樣子がありありと見られる。

「奴は腐敗漢だ、墮落漢だ」と動物學者は續けた。補祭は、可笑しい言葉は出て來ないかとぢつとその顏に見入る。「あんな下らん奴にはさう滅多にはお目にかかれん。肉體的にも彼は無氣力で懦弱で老人臭い。その智力に至つては、ただ食ひ飲み羽蒲團に眠り、抱への馭者を情夫にしてゐる商人女と何等擇ぶ所はない。」

補祭はまた笑ひ出した。

「まあ笑ひ給ふな、補祭君」とフォン・コーレンは言つた、「結局は馬鹿げた話さ。だが僕だつて、奴の下らなさ加減に注意してをられるほどの閑人ぢやない」と、彼は補祭の笑ひ歇むのを待つて言葉を續けた、「あの男が害毒を流す危險人物でさへなかつたら、僕は一顧も與へずに素通りしただらうよ。奴の害毒はまづ第一に、女にもてることにある。その結果、後裔を輩出せしめる懼れがある。すなはち、奴自身と同樣に懦弱且つ墮落したライェフスキイを、一ダアスもこの世に送り出す危險性がある。第二に、奴は高度の傳染性を持つてゐる。ヴィントや麥酒のことはさつき言つた通りだ。もう二年もすれば、彼はコーカサスの全海岸を征服し盡すに違ひない。君も知つての通り、民衆殊にその中間階級なるものは、インテリ臭だの、大學教育だの、上品な物腰だの、文學めいた言ひ廻しだのに、ころりと參るものだ。たとへ彼がどんな怪しからん振舞ひをしようと、立派なことだ、ああ爲なけりやならんと皆がさう思ふ。なぜなら、彼はインテリで、自由主義で、大學を出た男だからだ。かてて加へて彼は薄命兒だ、餘計者だ、神經衰弱だ、時代の犧牲だ。といふことは、つまり彼は何をしても許されるといふ意味に他ならない。彼は愛すべき男だ、誠實な男だ、人間の弱點に對して心から寛大だ。素直で溫順しい、傲慢でない、彼とならら酒も飲めるし、猥談も人の蔭口も遠慮なくできる。……一體宗教上でも道德上でも神人同形說に傾きがちな民衆は、自分と同じ弱點を持つてゐる偶像が大好きなのだね。ねえ君、これで奴の病毒の傳染區域がいかに廣いかが分かるだらう。そのうへ彼は中々の役者だ、巧みな僞善者だ、

何もかもよく辨へたものさ。例へば奴の舌先の手品を見て見給へ。文明に對する彼の態度でもい い。文明のブの字も嗅いだことがない癖に、『ああ、僕たちはどこまで文明に毒されてゐるのだ！ ああ僕は實に野蠻人が羨ましい。文明の何かを知らぬ自然兒が羨ましい』などと言ふ。してみると奴は曾ての昔、全身全靈を擧げて文明に捧げたことがあると見える。文明に仕へ、文明を奥の奥まで理解したにも拘らず、文明は彼を倦ませ、幻滅させ、裏切り去つたものと見える。すなはち彼はファウストだ、第二のトルストイだ。……ショペンハウエルやスペンサーに至つてはまるで小僧つ兒扱ひで、親爺然と肩でもぽんと叩いて、『おいどうだい、スペンサー』といつた調子だ。勿論スペンサーなんか一行だつて讀んぢやゐないんだが、自分の女の話をして、『とにかくスペンサーを讀んだ女だからね』などと何氣ない輕い皮肉を言ふ時にや、全く可愛くなるよ。ところがみんな大人しく聽いてゐる。あの山師にはスペンサーのことをそんな風に言ふ資格はおろか、その靴の裏に接吻する資格だつてないことを、誰一人分からうとはしないんだ。文明や權威の土臺をほじくり返す、他人の祭壇の下をほじくり返す、泥をはねかす、おどけた横眼を使つて見せる。それもただ、自分の懦弱さや精神（モノル）の貧窮を押し匿し表面（うはべ）を繕ひたいばかりにね。こんな眞似の出來るのは、自惚れあがつた卑劣な醜怪な動物だけだ。」

「ねえコーリャ、君は一體あの男をどうしようと言ふのかね」とサモイレンコは動物學者をぢつと見ながら言つた。その顏に憎惡の色は消えて、今度は濟まなさうな顏をしてゐる。――「あの男は何も人と變つた所はないぢやないか。そりや缺點はある。しかしちやんと現代思想の水準に立つて、役所に勤め、國家に貢獻してゐる。十年ほど前この町に老人の囑託がゐたが、それがまた非常な秀才でね、よくかう言ひ言ひしたものだよ……」

「ああ澤山、澤山」と動物學者は遮つて、「君は奴が役所に出てゐると言ふね。だがその勤め振りはどうだ！ 彼がこの町に現はれた結果、果たして秩序がよくなつたかね。果たして役人たちが几帳面に鄭寧になつたかね。事實は之に反し、その大學出のインテリたる權威を以て、彼等の放埒を是認したにとどまる。奴が几帳面に勤めるのは月給日の二十日だけだ。あとは家でスリッパをぺたぺた云はせながら、俺がコーカサスに居てやるだけでも、ロシヤ政府は有難いと思へといふやうな顏をしてゐる。いや駄目だ、アレクサンドル・ダヴィードィチ、奴の肩なんか持ち給ふな。君は徹頭徹尾、實意のない男だよ。君がもし本當にあの男が好きで、敢て隣人と認めるのなら、まづ最初に彼の缺點に無關心ではをられぬ筈だ。彼に對して寛大ではをられぬ筈だ。それどころか、彼のためにも、どうにかして無害な人間にしてやりたいと考へるところだ。」

「といふと？」

「無害な人間にするのさ。もう矯正の見込みはない人間だから、無害にしちまふ方法はただ一

つ……」

フォン・コーレンは指で自分の頸筋に線を引いて見せて、

「さもなけりや土左衞門にでもするか」と言ひ添へた、「人類の福祉のため、また彼等自らの利益のためにも、ああした連中は絶滅さるべきだ。斷じてさうだ。」

「君は何てことをいふ？」サモイレンコは腰を浮かせて、動物學者の冷靜な顏を呆れたやうに眺めながら言つた。——「補祭君、この男は何を言つてるんだらう。君、氣は確かだらうね。」

「僕は必ずしも死刑を主張しはしない」とフォン・コーレンは言つた、「死刑が有害だと云ふなら、何か別の遣方を考へるさ。ライェフスキイを殺しちやいかんとなれば、いつそ隔離しちまふか。番號でも附けて、土木工事★に追ひ使ふか。……」

「全く何てことを言ふ」サモイレンコは身ぶるひをした。「あ、胡椒、胡椒」と、挽肉を詰物にした蕃南瓜を、胡椒を掛けずに補祭が食ひだしたのを見て、彼は情ない聲を出して、「あの聰明極まる男のことを、君は何てことを言ふ！　吾人の親友、矜りある知識人を君は土方にするといふのか！」

「生じつか矜りがあつて反抗でもしたら、それこそ足枷だ。」

サモイレンコはもう一言も口が利けない。指をぴくぴくやつてゐるだけである。その啞然とした

たいかにも滑稽な顏附を見て、補祭は笑ひ出した。

「もうこの話はやめにしよう」と動物學者が言つた、「ただね、アレクサンドル・ダヴィードィチ、この事だけは忘れずにゐ給へ。——原始時代の人類は生存競爭や自然陶汰のお蔭で、ライェフスキイの徒の跳梁を免れてゐた。今や我々の文化は著しくこの生存競爭及び陶汰作用を弱め、我々は自ら、虛弱者、不適者の絶滅に心を勞さねばならぬことになつた。さもないと、他日ライェフスキイの徒が繁殖を遂げた曉には、文明は亡び人類は遂に退化するだらうからね。もしさうなつたら、それは我々の罪だ。」

「人間を溺れ死なせたり、首を絞めたりしなけりやならんのなら」とサモイレンコは言ひ返した、「そんな文明が何になる、そんな人類が何になる。ええ、何になる！　僕は君に言ひたいことがある。なるほど君は大學者だ、非常な秀才だ、祖國の誇りだ。だが惜しむらくは君は獨逸人に毒された。さうとも、獨逸人、獨逸人。」

サモイレンコは醫學を學んだデルプト★を去つて以來、獨逸人にはたまにしか逢はず、獨逸の本などは手にしたこともなかつた。しかし、彼の意見によれば、政治上及び學問上の一切の邪說は悉く獨逸人が因なのである。一體どうしてこんな意見になつたのかは自分でも知らなかつたが、とにかく彼はこの見解を持して讓らなかつた。

「さうとも、獨逸人」と彼はもう一ぺん繰り返して、「さあ、お茶を飲みに行かう。」

三人は起ち上がつて帽子をかぶると、柵をめぐらした小庭の方へ出て行つた。そこには梨や栗や淡色の楓などが蔭を作つてゐる。三人は樹蔭に腰をおろした。動物學者と補祭は小卓の前のベンチに陣取り、サモイレンコは廣い斜めの凭れのある籐椅子に身を沈めた。從卒が茶とジャムとシロップを一本持つて來た。

その日は非常に暑く、日蔭でも三十度はあつた。大氣は死んだやうにそよりともせず、長い蜘蛛の網が栗の梢から地上に力なく垂れ下がつたまま、ぢつと搖れずにゐた。

補祭はいつも小卓の足もとに轉がしてあるギターを取り上げて、調子を合はせてから細い聲で、

居酒屋のほとり、神學生の群たたずむ、

と靜かに歌ひはじめた。が暑いのですぐやめ、額の汗を拭いて、燃えるやうな青空を振り仰いだ。サモイレンコは居眠りをはじめた。暑さと靜けさと、いつか五體に行きわたつた快い食後の睡氣に誘はれて、ぐつたりと醉ひ心地なのだ。彼の兩手はだらりと下がつてしまつた。眼は細くなり頭は胸に垂れ落ちた。そして、ほろりとしたやうな面持でフォン・コーレンと補祭の方を眺めて、もぐもぐと呟きはじめた。

「若き世代（ヤンガー・ジエネレーション）……學界の明星と教會の光明か……そうら、裾を引きずつたハレルヤどのが、するすると大司教に御昇進、まあさ、御手に接吻せにやなるまい……それもよしよし……どうぞまあ……」

間もなく鼾が聞こえだした。フォン・コーレンと補祭は茶を飲み乾して、街（おもて）へ出て行つた。

「君はまた波止場で沙魚（はぜ）釣りですかね」と動物學者が訊いた。

「いや、暑いからやめです。」

「僕の家へ來給へよ。そして小包をこしらへるなり、清書をするなりして見ないか。序でに君の仕事のことも一緒に考へて見よう。補祭君、働かなくちゃいかんよ。そんなことぢや駄目だ。」

「あなたの言はれることは一々尤もです」と補祭は言つた、「だが僕の怠惰は、僕の今の生活の事情を思へば無理もないらしい。どつち附かずの狀態が著しく人間を因循にすることは、あなたも御存じでせうな。僕はここへ一時派遣されて來たのか、それとも永久になのか、神樣だけが御存じでさ。僕はここでしがない暮らしをしてゐる。女房は親父の所で、なすこともなく退屈してゐる。實を言ふと、この暑さで腦味噌が少々ふやけた形ですよ。」

「そんな馬鹿なことはない」と動物學者は打消して、「暑さにはすぐ慣れる。女房のゐないのにもすぐ慣れる。怠け癖をつけちゃいかん。いつも緊張してゐなくちゃ駄目だ。」

五

朝、ナヂェージダ・フョードロヴナは海水浴に出掛けた。料理女のオリガが、水差しと銅の金盥とタオルと海綿を持つて、後からついて行く。沖の錨地に、汚れた白煙突をした見慣れぬ汽船が二艘碇泊してゐる。外國の貨物船らしい。白服に白靴の男たちが波止場を歩き廻つて、フランス語で何か聲高に喚いてゐる。汽船からそれに叫び返す。町の小さな教會でカアンカアンと鐘が鳴つてゐる。

「さう、今日は日曜だつけ」と思ふとナヂェージダは嬉しかつた。

彼女は非常に氣分がいいのだ。浮々した休日らしい氣持なのだ。男物の生地の粗い繭紬(けんちう)で作つた、仕立おろしの寛やかな服を着て、大きな麥藁帽子をかぶつてゐる。麥藁帽子の廣い緣が兩耳のところでぐつと折れ曲がつてゐるところは、丁度顏が人形箱から覗いてでもゐるやうな恰好で、實に愛くるしく見えるにちがひないと思へた。また彼女は思ふのだつた。一體この町で、若くつて美しくつて教育のある女といつたら、この私一人しかゐないのだ、また優美で趣味があつてしかも經濟的な身裝(みなり)の出來る女も、自分一人しかゐないのだ。この着物にしてもたつた二十二ルーブルしか掛けてないのだが、とてもよく見えるぢやないか。魅力のある女といつたら、町ぢう探

しても私一人しかゐない。ところが男は大勢だ。だからみんな、自然とライェフスキイのことを羨んでゐるにちがひない。

近頃ライェフスキイの態度が冷たくなつて、取つて附けたやうな鄭重さを見せたり、時には無慈悲で粗暴な態度さへ見せるやうになつたことが、彼女には寧ろ嬉しかつた。彼のヒステリックな言動や、蔑(さげす)むやうな冷やかな、奇怪とも何とも不可解な視線を投げつけられたら、以前の彼女なら泣きもしたらう、怨みもしたらう、出て行きますとか飢ゑ死に死んぢまふとか脅し文句も並べたらう。ところが今では、そんな扱ひを受けてもただ顏を赤らめて、濟まなさうな眼附で彼を見るだけで、心では彼がちやほやして呉れないのが却つて有難いのだつた。いつそ惡態でも愛想盡かしでも思ひきり吐いて呉れたなら、さぞさばさばしたいい氣持になれるに異ひない。といふ譯は、彼女は彼に對して、何から何まで濟まないことだらけだと感じてゐたからである。彼に濟まないことの第一は、彼がペテルブルグを棄てて遙々このコーカサスまでやつて來た當の目的である勤勞生活の夢想に、自分が共鳴できなかつたことである。近ごろ男の機嫌の惡いのは、てつきりそのせゐだと信じ込んでゐる。コーカサスへ來る旅の道中で、彼女が心に描いてゐたものは何だつたらうか。——着けばもうその日のうちに、海べりの閑靜なわが家が見附かる。樹々が蔭をつくり、小鳥が啼き交はし、小流れのせせらぎもする樂しいそこの小庭に、草花も植ゑよう、

野菜も作らう、家鴨や鷄も飼はう、近所の人を招いたり、貧しいお百姓の療治をしてやつたり、本を頒けてやつたりもしよう……。ところが來てみると、コーカサスといふ所は禿山と森林と巨きな谿谷ばかりで、氣長に計畫を立て、精出して經營しなければならぬ場所だつた。近所の人がお客に來るどころか、大へんな暑さで、追剝さへ出兼ねない有樣だ。ライェフスキイも別に急いで土地を手に入れようとする氣配もない。これは彼女にとつて有難いことだつた。まるで二人の間には、二度と勤勞生活のことは口にしまいといふ默契が出來てゐるやうだつた。男が默つてゐるのは、つまり自分の方から言ひ出さないのを怒つてゐるのだと、彼女は思ふのだつた。

第二に、彼女は男には默つて、アチミアーノフの店から細々したものを、この二年のあひだに彼是三百ルーブルも買ひ込んでしまつた。やれ布地、やれ絹地、やれ日傘と僅かなものが積もり積もつて、いつの間にかこんなに借りが出來たのである。

「今日こそは言つてしまはう……」と彼女は決心するのだつたが、いやライェフスキイの此頃の機嫌の惡さでは、借金の話なんか持ち出さぬ方が無事だと、すぐに思ひ返した。

第三に氣が咎めるのは、ライェフスキイの留守のときに、もう二度も警察署長のキリーリンを家に上げたことである。一度は朝で、ライェフスキイが海水浴へ出掛けたあとだつた。もう一度は夜中で、彼はカルタをしに行つて留守だつた。これを思ひ出すとナヂェージダは耳のつけ根まで紅くなつて、料理女の方をちらと見た。まるで自分の想念を盜み聽かれはしまいかと怖れるかのやうに。……晝間の長さ、たまらないその暑さ、退屈さ。宵の美しさ、惱ましさ。夜中の蒸暑さ。そして朝から晩まで、ひたすら時間を持て餘して暮らすこの生活。自分こそこの町で一番の若い美しい女だ、ぐづぐづしてゐてはこの若さも空しく過ぎてしまふ、と片時も耳許を離れない內心の囁き。そしてまた、なるほど潔白で思想的な男かも知れないが、單調で、二六時ちうスリッパをぺたぺた云はせ、爪を嚙み、我儘ばかり言つてうんざりさせるライェフスキイ自身。——これらの要素が相寄つて、次第次第に彼女をある慾望の俘にしてしまつたのであつた。もう今では、夜も晝も彼女の想念には一つことしかない。自分の息づかひにも、眸にも、聲の調子にも、歩み振りにも、彼女は自らの慾望の息吹きをしか感じない。潮騷も戀せよとささやく、宵闇も戀せよとささやく、山々もまた戀せよとささやく。……で、キリーリンが言ひ寄つた頃には、彼女はもう抗ふ力も氣持もなくて、そのまま身を任せてしまつたのであつた。……

いま、外國の汽船や白服の男たちを見てゐると、何故かしら大廣間の光景が心に浮かんだ。フランス語の話聲に入れ交つて、彼女の耳のなかでワルツの響きがしはじめ、故知らぬよろこびに胸がときめくのだつた。ダンスがしたくなつた。フランス語で話がして見たくなつた。

自分の不貞は別に大したことではないのだ、と考へると嬉しかつた。心で不貞をした覺えはな

いのだ。自分は相變らずライェフスキイを愛してゐる。論より證據、自分はまだ彼に嫉妬も感じるし、彼が家にゐないと淋しくしよんぼりしてゐるではないか。ところがキリーリンは一向つまらぬ男だつた。美男子ぢやあるけれど粗野な男だつた。もう彼との關係は切れてゐるし、これからだつて赤の他人だ。過去は過去、何も他人の知つたことぢやない。萬一ライェフスキイの耳に入つたところで、まさか本當にしはしまい。

海岸には婦人用の海水小屋が一つあるきりで、男は野天で水浴をするのだつた。ナヂェージダが小屋に入つて行くと、例のマリヤ・コンスタンチーノヴナといふ中婆さんの官吏夫人と、その娘でカーチャといふ十五の女學生とがゐた。二人はベンチに腰かけて、着物を脱いでゐるところだつた。マリヤ・コンスタンチーノヴナといふのは人の好い、すぐ夢中になる、よく氣のつく婦人で、一言一言長く伸ばして、いかにも感極まつたやうな物の言ひ方をする。三十二の歳まで家庭教師をして、それから官吏ビチューゴフに嫁いだ。これはわづかに禿げ殘つた毛を念入りに兩の小鬢に撫でつけた、實におとなしい小男である。彼女はいまだにこの亭主に惚れてゐて、燒餅もやくし、『愛』といふ言葉を口にするたびに顔を赤くし、私とても幸福ですわと逢ふ人ごとに吹聽する。

「まあ、あなた！」彼女はナヂェージダの顏を見ると、附合仲間に名高い『巴旦杏表情』といふのを早速やつて、飛び立つやうな聲を出した、「あなたがお出でになるなんて、本當に嬉しい。さ、御一緒に這入りませう。素敵ですわ。」

オリガは手早く自分の着物と肌着を脱いでしまつて、主人の脱衣にとりかかつた。

「今日は昨日ほどお暑くございませんのね、さうお思ひなさらなくつて？」とナヂェージダは、下女が裸身を不遠慮にすりつけて來るのに身を縮めながら言つた、「昨日の蒸暑さには本當に死にさうでしたわ。」

「ほんとにねえ、あなた。あたくしももう今にも息がつまりさうでございましたわ。まるで嘘みたいですけど、あたくし三度も海水を致しましたのですのよ。……三度もでございますわ、あなた。仕舞ひにはさすがのニコヂームも心配いたしましてね。」

『よくもまあかう不縹緻が揃つたもんだ』とナヂェージダは、オリガと官吏夫人を見比べながら心に思ふ。それからカーチャを見て、『娘の方はまづ十人並みだ』と思ふ。「本當にお宅のニコヂーム・アレクサンドルィチは何て思ひやりのある方でせう」と今度は聲に出して、「私すつかり首つたけになりましてよ。」

「ほほほ」とマリヤ・コンスタンチーノヴナは無理に笑つて、「まあ、素敵ですわ！」

着物から解き放たれると、ナヂェージダはそのまま飛び立ちたい慾望を感じた。實際、兩手を

羽搏いたらきつと大空へ舞ひ上がれる、とそんな氣がした。裸になつた彼女は、自分の眞白な肌を、オリガが厭惡の眸でじろじろ見てゐるのに氣がついた。オリガは若い兵隊の女房で、正式の夫婦生活をしてゐる。だから自分は女主人より立派な女、一段上の女と考へてゐる。またナヂェージダは、マリヤ・コンスタンチーノヴナにしてもカーチャにしても、やはり自分を尊敬の眼で見ては呉れず、寧ろ氣味惡がつてゐることに氣づいてゐた。それに氣づくと忌々しかつた。で、彼等の眼に映る自分の姿を引立てようと思つて、

「あたくしどもペテルブルグでは、今時分はもう避暑地が大賑はひでございましてよ。宅にもあたくしにもそりや大勢友達がをりましてねえ。一度會ひに歸らなければと思ひますの。」

「御主人様はたしか技師でいらつしやいましたのね」とこはごはマリヤが訊く。

「あたくしライェフスキイのことを申してをりますの。あれには本當に大勢お友達があります の。けれどねえ、困つたことにあれの母親が氣位の高い貴族主義で、分からず屋で……」

しまひまで言はずに、ナヂェージダは勢よく水へ飛び込んだ。マリヤ・コンスタンチーノヴナとカーチャもそれにつづく。

「本當にこの世間には色んな偏見がございますのね」とナヂェージダは言葉をついだ、「見掛けほど住みよい處ではございませんわ。」

家庭教師をして貴族的な家庭を渡り歩いたこともあり、一通りは酸いも甘いもかみ分けたマリヤ・コンスタンチーノヴナは、それに合槌を打つて、

「ほんとにさうでございますよ。まるで嘘みたいな話ですけど、ガラトィンスキイのお屋敷では、晝餐はもとより、朝御飯のときまで第一公式で出なければいけませんの。だものですからあたくし、女優さんみたいに、お手當のほかにお化粧料まで頂いとりましたのですのよ。」

ナヂェージダを洗つた水からわが娘を守らうとでもするやうに、彼女は二人の間に立ち塞がつてゐた。海に向つて開け放してある扉口から、誰だか百歩ほどの沖合を泳いでゐるのが見える。

「ママ、あれうちのコースチャだわ」とカーチャが言ふ。

「あら、まあ」マリヤ・コンスタンチーノヴナはびつくりして牝鷄みたいな聲を出す、「まあ、コースチャ！」と呼び立てる、「歸つといで、コースチャ、歸つといで！」

十四になるコースチャは、母親と姉に勇氣を見せるつもりか、くるりと潜つてまた沖の方へ泳ぎだした。が、すぐ疲れたと見え、大急ぎで引き返して來た。その眞劍な緊張した顏を見ると、どうやら自信はないらしい。

「ほんとに男の子には泣かされますわねえ。」ほつとしてマリヤ・コンスタンチーノヴナが言つた「今にも首の骨を折りはしまいかと、はらはら致しますんですのよ。ねえあなた、子の母に

なりますのは、樂しみもございますけど、それなりに隨分辛いものですわ。氣の休まる暇もございませんものね。」

ナヂェージダは麥藁帽子をかぶると、小屋から外海へ泳ぎ出した。ものの五分間ほど泳いだところで仰向きに寢た。水平線まで廣々と海が見える。汽船、岸にゐる人々、町も手にとるやうだ。それに炎暑や透明な柔しい波が一緒になつて、彼女をそそり立て、その耳に『生活しなければ、生活しなければ』と囁くのだつた。……すぐ傍を、力づよく波と空氣を切りながら、ヨットが一隻矢のやうに走り過ぎた。舵を取つてゐる男が、ぢつと彼女を見て行つた。そして彼女は、人に見られるのが快かつた。……

水から上がると婦人達は着物を着て、一緒に歩き出した。

「わたくし一日置きに熱が出ますの。それでゐて、ちつとも痩せませんのよ」とナヂェージダは海水で鹽辛くなつた唇を舌先で清める一方、顏見知りの人々の挨拶に笑顏で應へながら言つた、「昔から肥つてはをりましたけど、近頃また肥つて來たやうな氣がしますの。」

「それはあなた、さういふ質でらつしやるからですわ。肥らない質の人間ですと、まああたくしみたやうに、何を頂いても一向利目がありませんのよ。あらあなた、お帽子がぐしよ濡れよ。」

「かまひませんわ。すぐ乾きましてよ。」

ふたたびナヂェージダは、白服の男たちがフランス語で喋りながら海岸通りを歩いてゐるのを眼にする。するとふたたび故しらぬよろこびで胸が波立ちはじめ、どこかの大廣間の有樣がおぼろに浮かび出る。いつか自分が踊つたことのある廣間のやうでもある。あるひはいつかの夢で見たのかも知れない。すると胸の奥の方で、自分はつまらぬ、平凡な、やくざな、取るに足らぬ女だ、と幽かに洞ろな聲で囁くものがある。……

マリヤ・コンスタンチーノヴナは自分の家の門口で立ち止まると、寄つて一休みして行くやうにすすめた。

「お寄り遊ばせな、ねえ、あなた」と手を合はさんばかりの聲だつたが、と同時にナヂェージダをちらと窺つたその眸には、迷惑さうな色と、まさか寄つて行きはしまいといふ安心の色とがあつた。

「ぢや寄せて頂きますわ」とナヂェージダは遠慮をせずに、「あたくし、お宅に伺ふのがそりや樂しみなんですの。」

さう言ひながら彼女は上がつて來た。マリヤ・コンスタンチーノヴナは彼女に椅子をすすめ、珈琲と乳入りパンを出し、それから昔の教へ子達の寫眞を見せる。ガラトィンスキイ家の令嬢で、今ではみんな緣づいてゐる。また、カーチャとコースチャの通信簿を出して見せる。成績は非常

にいいのだが、それを尙更よく見せるため溜息をついて、本當に今どきの中學はむづかしくてと零す。……さまざまに客をもてなしてはゐるが、その一方ではナヂェージダを上げたことを後悔してゐる。彼女と同席したため、コースチャやカーチャが悪い感化を受けはしまいかと氣を揉んだり、でもニコヂームが留守でよかつたと胸を撫で下ろしたりしてゐる。男といふものはみんな、えて『こんな』女が好きなものだから、ニコヂームだつてナヂェージダから悪い感化を受けまいものでもないと思ふのだ。

客と話してゐるあひだぢう、今晩催されるピクニックのことがマリヤ・コンスタンチーノヴナの頭を離れない。このことは猿の夫婦――つまりライェフスキイとナヂェージダには默つてゐるやうに、フォン・コーレンから吳々も賴まれてゐたのである。だが彼女はつい口をすべらしてしまふ。そして眞赤になつて、どぎまぎしながら、

「あなたもお出で遊ばせな。」

六

町から南へ二里ばかり、黑河と黃河と呼ばれる二つの小川の合するところにある居酒屋の邊で馬車をとめて、魚のスープでも煮ようといふのが、その日のプランであつた。五時を廻るとすぐ

出發した。先頭の四輪馬車（シャヅバン）にはサモイレンコとライェフスキイが乘り込み、次の半幌馬車（コリヤースカ）は三頭立てで、マリヤ・コンスタンチーノヴナとナヂェージダと、それからカーチャとコースチャが乘つてゐる。食糧の籠と食器類はこの車に積み込んである。次の馬車には署長のキリーリンと、アチミアーノフといふ青年が乘つてゐる。これはナヂェージダが三百ルーブルの借りをこしらへた例の商人アチミアーノフの息子だ。この二人と向ひあはせの席には、ニコヂーム・アレクサンドルィチが、ちよこんと胡床（あぐら）をかいて身體を縮めて坐つてゐる。これは小鬢の髮を撫でつけた、几帳面な小男である。一番後の車にはフォン・コーレンと補祭が乘つてゐる。補祭の脚の間には魚を入れた籃が立ててある。

「み、右！」と、土人の荷馬車や、驢馬に乘つたアブハジヤ人に出くはすたびに、サモイレンコがあらん限りの聲で呶鳴る。

「もう二年すると僕は資金も人手も揃ふんだ。そしたら僕は探險旅行に出掛ける」とフォン・コーレンが補祭にいふ、「浦鹽から海岸づたひにベーリング海峽に出て、それからエニセイの河口まで行くんだ。地圖を作る、地方の動植物を研究する。地質學や、人類學・人種誌學的な研究を精細にやる。君も來たいなら一緒に來ちやどうかね。」

「そりや駄目です」と補祭が言ふ。

「なぜ駄目さ。」

「僕は足手まとひのある人間ですよ。」

「なあに妻君は出して呉れるさ。妻君の生活は僕らが保障しようぢやないか。君が妻君を說きつけて、公益のため尼さんにならせることが出來たら一番いいな。さうなりや君も出家できるし、修道僧になつて探險に出掛けられる譯だ。その氣なら僕も一つ骨を折るぜ。」

補祭は默つてゐる。

「君は專門の神學の方は明るいのかね」と動物學者が訊く。

「あんまり明るくもないんです。」

「ふむ。……僕も神學の方は一向御無沙汰だから、それにかけちや何の助言も出來ないがね。ぢや君の要る本の目錄を作つて呉れないか。この冬ペテルブルグから送つて上げよう。行脚僧の旅行記なんかも一通り眼を通す必要があるね。ああいふ連中の中には、立派な人種誌學者や東洋語の大家がゐるからね。で、彼等の遺り口に親しむと、ずつと仕事がやりよくなる。そこでと、差當つては本がないからといつて時間を無駄にしちやいけない。僕のところへ來て、コンパスの使ひ方を覺えたり、一通り氣象學をやつて置くんだね。これはみんな必要なことだ。」

「そりやまあさうだが……」と補祭は呟いて、それから笑ひだした、「實は中央アジヤの方に口

を賴んであるんですよ。司祭長をしてゐる伯父も盡力して呉れるさうだし。あなたと一緒に出掛けるとなると、みんなに無駄骨を折らせることになりますね。」

「何だつて君は躊躇するんだらう。君がいつまでも、世間並みの補祭でゐて、休日だけ勤めてそのあとはぶらぶらしてゐるやうだと、十年經つたつて元の杢阿彌だぜ。そりや口髭と顎鬚ぐらゐは殖えるかも知れん。ところが君が探險から歸つたとなると、その十年間に君は見違へるやうな人間になる。とにかく一つの仕事を果たしたといふ自覺が、君を富ませるのだ。」

婦人連の馬車から、恐怖と歡喜のきいきい聲が起こつた。馬車の列はいま、まるで垂直な岩壁の中腹に切り開いた道にかかつてゐる。高い壁に取りつけた吊棚の上を走つてゐるやうなもので、今にも馬車が谷底へ轉がり落ちはしまいかとはらはらさせる。右手には海がひらけてゐる。左手はでこぼこした褐色の壁で、黑い斑點や紅い岩脈のうへを樹の根が這ひ廻つてゐる。頭上にはよく茂つた針葉樹が枝を垂れ、怖いもの見たさの及び腰で下を覗いてゐる。少しするとまた金切聲と笑聲が起こつた。押しかぶさるやうな巨岩の下をくぐるのである。

「一體何しに君たちのお伴をしてゐるのか、僕には譯が分からん」とライェフスキイが言ふ、「實に愚劣で俗惡だ。僕は北へ行かなくちやならんのだ。自分を救ふために北へ逃げ出さなくちやならんのだ。だのにこんな馬鹿げたピクニックのお伴なんかしてゐる。」

「それよりもまあ見ろよ。何てすばらしい見晴らしだ！」サモイレンコは、馬車が左に折れて黄河の谿が眼前に展けるとともに、黄色く濁つた川筋がきらきらと光り狂ふのを見て言つた。

「サーシャ、僕にはちつとも感服できんね」とライェフスキイは答へる、「自然を嘆賞してやまないのは、われとわが想像力の貧しさを語るものだ。僕の空想に描かれるものに比べると、こんな小河や岩ぼこは塵芥だ、それ以外の何ものでもない。」

馬車はもう小河に沿うて走つてゐる。見上げるばかりの切り立つた岩壁は兩方から次第に近づき、谿がせばまつて、行手は峽になつてゐる。馬車の行く道ばたの岩山は、自然の手が巨大な岩塊を疊み上げたもので、巨岩が凄まじい力で互ひに押しあひへし合ひしてゐる有様は、見やるごとにサモイレンコが思はず唸り出さずには居られぬ底のものだつた。夕暗の迫つた美しい山の所所に細い裂目や峽ができてゐて、そこからはしめつぽい風や神祕の氣が吹きつけて來た。峽をとほして、ほかの山々が見える。褐色のや薔薇色のや、薄紫のや靄のかかつたのや、あるひはまたきららかな落日を浴びたのが。馬車が峽の前を行くときは、どこか高いところから落ちる水があると見え、滴の音が時をり聞こえる。

「ああ、呪ふべき山々よ」とライェフスキイは嘆息した、「僕はもう厭々したよ。」

黒河の流れが黄河に落ちて、インクのやうに黑々とした水が黄色い水を濁して鬪つてゐるとこ

ろ、そこの道のはづれに韃靼人ケルバライの營む居酒屋があつた。屋根の上にロシヤの國旗を立て、看板には白墨で『樂々亭』と書いてある。傍の柴垣をめぐらした小さい庭に、卓子やベンチが置いてある。見すぼらしい茨の繁みに、こんもりと美しい絲杉が一本だけ聳えてゐる。

小柄で捷こさうな韃靼人のケルバライは、青シャツに白い前掛けをして道に立つてゐたが、兩手を腹に當て低いお辭儀をして、馬車の一行を迎へた。そしてにこにこしながら白いきれいな齒を見せた。

「やあ、ケルバライカ！」とサモイレンコが呼びかけた、「俺たちはもう少し先へ行く。貴樣はあとからサモヴァルと椅子を持つて來い。直ぐだぞ。」

ケルバライはいが栗頭を縱に振つて何やら呟いたが、その聲は最後の馬車の人にしか分からなかつた。「岩魚がございます、閣下。」

「持つて來い、持つて來い」とフォン・コーレンがそれに答へた。

居酒屋を過ぎて五百歩ほどのところで馬車は停つた。サモイレンコは、腰を下ろすに丁度いい石の散らばつてゐる小さな草場を見つけた。暴風に吹き倒された樹が一本、長い鬚のある根をむき出し、かさかさに枯れた黄色い刺を見せて横たはつてゐる。丸太を組んだ危なつかしい橋がそこの流れに渡してあり、丁度その向ひ岸に、四本の低い杙を脚にした納屋がある。これは玉蜀黍

を乾す小屋で、どうやらお伽噺に出て來る鶏足の百姓小舍に似てゐる。戸口には小さな梯子がかかつてゐる。

一同の受けた第一印象は、いくらじたばたしても此處からは脱け出せまいといふ感じだつた。どこを向いても重疊たる山々がのしかかつてゐる。そして居酒屋と黒々とした絲杉の方角から、夜の影は見る見る押し寄せて來る。そのため、それでなくても狹い曲りくねつた黒河の谿はいよいよ狹く思はれ、四方の山々は益々高く見える。ごうごうと川が鳴る。しきりなしに蟬が鳴く。

「まあ好いこと！」とマリヤ・コンスタンチーノヴナが、うつとりして深い息を吸ひ込みながら言つた、「ねえお前達、御覽よ。何ていいんだらう。何て靜かなんだらうね。」

「さう、實にいい」とライェフスキイも合槌を打つた。この景色は彼の氣に入つた。それに、空を仰ぎ、やがて居酒屋の煙突から立ち昇る青い煙を眺めたとき、彼はふつと悲しくなつたのである。「さう、實にいい」と彼はもう一度繰り返した。

「イヴァン・アンドレーイチ、この景色を描寫して下さいな」とマリヤ・コンスタンチーノヴナが潤み聲を出した。

「なぜですか」とライェフスキイは訊き返した、「如何なる描寫も印象には及びません。印象を通じて萬人が自然から受けるこの豐かな色彩と音響を、作家といふものは醜怪な何やら譯の分か

らんものにでつち上げてしまふのです。」

「さうかしら？」水際の一番大きな石を選んで、それに坐らうと攀ぢ登りながら、フォン・コーレンが冷やかに訊いた。「さうかしら」とライェフスキイをぢつと見据ゑながら、もう一ど繰り返す。「ぢや『ロメオとジュリエット』は？　ぢや例へばプーシキンの『ウクライナの夜』★は？自然は宜しくその足下に拜跪すべきだ。」

「そりやまあさうだ……」ライェフスキイは同意した。彼は考へたり議論したりするのが面倒臭いのだ。「しかし」と暫くして言ふ、「底を割つて見れば、ロメオとジュリエットとは一體何ものだらう。美しい詩的な神聖な戀なんて言つたつて、腐れを匿さうがための薔薇の花に過ぎないぢやないか。ロメオだつてやつぱり、みんなとちつとも變らぬ動物に過ぎんのだ。」

「何の話をしても君はすぐ問題を……」とフォン・コーレンはちらとカーチャの方を見て、言ひさした。

「何に持つて行くと言ふんだね」とライェフスキイは尋ねる。

「例へば人が『葡萄の房は實にきれいだね』と言ふとする。すると君は、『うん、だが人にしやぶられて、胃の腑のなかで消化される所はみられたものぢやないぜ』と言ふんだ。何もそんなことを言ふ必要はないぢやないか。陳腐だし、それに……まあ言つてみれば妙な癖だと思ふな。」

ライェフスキイは、自分がフォン・コーレンに嫌はれてゐるのを知つてゐた。したがつて彼が怖かつたし、彼がゐるとみんなまでが窮屈がつてゐるやうに思はれ、また自分の背後に誰かが立つてゐるやうな氣がした。彼は何にも答へずにそこを離れた。出掛けて來たことが悔まれた。

「諸君、焚火の粗朶を集めに行進！」とサモイレンコが號令をかけた。

みんな思ひ思ひに散つて行つて、あとにはキリーリンとアチミアーノフとニコヂーム・アレクサンドルィチだけが殘つた。ケルバライが椅子を擔いで來て、地面に毛氈を敷き、數本の酒瓶をそこへ置いた。

署長のキリーリンは脊の高い堂々たる男で、どんないい天氣でも夏服の上に大外套を着てゐる。傲然としたその態度、尊大なその歩きぶり、嗄れ氣味の幅のある聲——どう見ても田舍の若手の警察署長である。物悲しげな寢呆け顏をしてゐるところは、たつた今無理矢理に起こされたと言はんばかりだ。

「おいこら、貴樣の持つて來たのは、こりや一體何だ」と彼は一語一語をおもむろに切りながら、ケルバライに喰つてかかつた、「俺はクヴァレーリを持つて來いと言つたのだぞ。それを貴樣の持つて來たのは何だ。この韃靼の豚野郎め。ああん、こりや何かよ。」

「僕たちの持つて來た酒が澤山あるぢやないですか、エゴール・アレクセーイチ」と、ニコヂ

ーム・アレクサンドルィチがおづおづと慇懃な調子でいふ。

「一向に構はん。僕は僕で自分の酒が欲しいのだ。僕もこのピクニックに加はつた以上、立派に自分の分前を出す權利があるものと考へる。かん・がへる。こら、クヴァレーリを十本持つて來い。」

「何だつてまたそんなに澤山」とニコヂーム・アレクサンドルィチは呆れた。キリーリンに金の無いことを知つてゐるのだ。

「二十本だ！　いや三十本だ！」とキリーリンが喚く。

「いいですよ、放つて置きなさい」とアチミアーノフがニコヂームに耳打ちする、「僕が拂ひますから。」

ナヂェージダ・フョードロヴナは浮き浮きして、思ひきりはしやいで見たかつた。跳ねたい、くつくと笑ひたい、大聲が出したい、からかつて見たい、甘えて見たい、そんな氣分だつた。青い三色菫（パンジイ）を散らした更紗の安服に赤い沓をはいて、例の大きな麥藁帽子をかぶつてゐるところは、自分ながら無邪氣で可愛らしくて、身輕でふはふはして、まるで蝶々のやうだと思つた。彼女はぐらぐらする橋を駈足で渡りかけたところで、ちよつと足をとめて下の水を覗いた。すると目が廻りだしたので悲鳴を上げ、笑ひさざめきながら向ふ岸の乾小屋の方へ駈けて行つた。男の連中

がみんな、ケルバライまで、自分の後姿に見とれてゐるやうな氣がした。見る見る押し寄せて來る夕闇に、樹立が山に溶け込み、馬が馬車に溶け込んで、居酒屋の窓に燈がちらちらしだす頃、彼女は岩と茨の叢の間をうねる小徑づたひに岡の頂邊に出て、石のうへに腰をおろした。下を見るともう焚火が燃えてゐる。焚火のそばを兩袖をたくし上げた補祭が歩いてゐ、その眞黑な細長い影が半徑のやうに火のまはりを廻つてゐる。粗朶をくべたり、長い棒の先につけた匙で鍋を掻きまはしたりしてゐるのだ。サモイレンコはといへば赤銅色の顏をして、自分の家の臺所でと同樣に火のまはりをせかせかしながら、例によつて叱咤してゐる。

「鹽は何處にある、諸君。忘れて來たんぢやないか。何だつて諸君は地主樣然と坐り込んでるんだ、我輩一人に働かしといて。」

倒れた木にライェフスキイとニコヂーム・アレクサンドルィチが並んで腰かけて、物思はしげにぢつと火を見てゐる。マリヤ・コンスタンチーノヴナはカーチャとコースチャに手傳はせて、籠から茶碗や皿を出してゐる。フォン・コーレンは岸のすぐ水際に立つて、腕組みをし片足を石にかけて、何やら考へ込んでゐる。焚火の赤い斑が影と入り亂れて、黑い人影のまはりの地を這ひ、岡や樹立や橋や乾小屋に顫へてゐる。その反對側には、水に穿たれて穴ぼこだらけの嶮しい岩岸がすつかり照らし出されて、ちらちらと川面に映り、矢のやうな奔流に千々に碎けてゐる。

補祭は魚をとりに出掛けた。ケルバライが川べりで腸を拔いて洗つてゐるのだ。が途中で立ちどまつて、ぐるりを眺めた。

『ああ、いい眺めだ』と彼は思ふ。『人影、岩、焚火、夕闇、不恰好な一本の樹——それだけしかない。だが何ていい眺めだ。』

岸向ふの乾小屋のそばに、幾人かの見慣れぬ人影があらはれた。火光がちらつくし焚火の煙もその方角へ靡いてゐるので、一度に一人一人の見別けはつかないが、もぢやもぢやした帽子だの白い頰髯だの、青いシャツだの肩から膝へ掛けた襤褸だの、腹へ横がひにぶら下げた短劍だの、まるで炭で描いたやうにくつきり濃い黑眉毛をした若い淺黑い顏だの、そんなものがちらちらと見えた。なかの五人ほどは車座になつて地べたに坐り、殘りの五人は乾小屋へはいつて行つた。一人は焚火の方へ脊を向けて戸口に立ちはだかり、腕を脊に組んで何やら喋りだした。丁度そのときサモイレンコが粗朶をくべ足したので焚火がぱつと燃え上がり、火花が散つて小屋を明るく照らし出したが、すると戸のなかに一心に聽き耳を立ててゐると見える暢氣さうな顏が二つ浮きあがり、そとの車座の連中もてんでに顏をねぢ向けてその男の話を聽きはじめたところを見ると、それは餘程面白い話と見える。しばらくすると車座の連中が何やら靜かな聲で歌ひだした。のんびりした節廻しのきれいな歌で、大精進のとき教會でうたふ歌に似てゐる。……それを聽きなが

ら補祭は、十年たつて探險旅行から歸つて來た自分のことを空想してゐた。自分は若い修道司祭だ、傳道者だ。立派な經歷のある有名な著述家だ。やがて掌院になり、つづいて監督になる。大本山で彌撒を司る。法冠に威儀を正し聖母像を胸に下げて、しづしづと說教壇にあらはれる。それから三枝燭臺と二枝燭臺を手にとつて會衆を祝福して、聲高に誦する——『主よ、願はくは御眸を天より垂れ給へ、爾が右手もて植ゑ給へるこの葡萄園を見守らせ給へ、訪ひ給へ。』すると童子の群が天使のやうな聲で唱和する、『聖なる主よ。』……

「補祭君、魚はどうした？」サモイレンコの聲だ。

焚火の傍に戻つて來た補祭は、今度は七月の暑い日に十字架行列が埃つぽい道を行く有樣を心に描いた。先頭には百姓たちが教會の旗を擔いで行く。女房や娘が聖像を捧げて行く。合唱隊の子供達と、頰を結へ髮に藁を插した番僧がそれに續く。その次が自分つまり補祭の番だ。つづいて紫帽をいただき十字架を捧げた役僧。そのあとには百姓や女房や子供やの群集が土埃を立てて ついて來る。役僧の妻君と自分の妻君が頭布をかぶつて群集にまじつてゐる。合唱隊が歌ふ、子供達が喚く、鶉が啼く、雲雀が聲を張りあげる。……行列がとまる。會衆に聖水を振りかけるのだ。……また動き出す。やがて跪まづいて雨乞ひをする。それから食事をする、話をする。……

『これもいいな』と補祭は思つた。

七

キリーリンとアチミアーノフは、小徑づたひに岡へ登つた。アチミアーノフは遲れて立ちどまつてしまつたが、キリーリンはナヂェージダのゐる所まで來た。

「今晩は」と彼は擧手の禮をしながら言つた。

「今晩は。」

「さうでした！」キリーリンは空を見上げ、考へながら言つた。

「何がさうでしたの？」ナヂェージダはちよつと間を置いて、アチミアーノフが自分達二人を見守つてゐるのに氣がつきながら、かう訊き返した。

「その、つまり何ですな」と署長はゆつくり言葉を切りながら、「吾々の戀は、謂はば花を開かずして凋んでしまつたのですな。あれはどう解釋せよと仰言るのでせうか。あれはあなたの、まあ一種のお戯れなのでしたか。それともこの私を、どう扱つても別條ない野呂間とでもお考へですかな。」

「あれは間違ひでした。どうぞ私に構はないで下さい！」とナヂェージダは鋭く言ひ放つた。この美しい惜しいやうな宵に、怯え切つた面持でその男を見つめながら、また、當惑げにわれと

わが心に問ひかけながら。――『まあ私、こんな男が好きになつて一時でも親しくしたなんて、本當にあつたことなのかしら？』

「ほほう」とキリーリンは、立つたまま暫く默つて考へてゐたが、やがて、「よござんす、御機嫌の直るまで待ちませう。ただ此の際はつきりお斷りして置きますが、私は紳士です。この點については何人と雖も疑ひをさし插むことを許しません。私を愚弄することは斷じてなりません。さよなら。」

彼は擧手の禮をすると、傍の叢を分けて行つてしまつた。暫くするとはつきりしない足どりで、アチミアーノフが近づいて來た。

「いい晩ですなあ、今夜は」と言つたが、ちよつとアルメニア訛りがある。

彼は相當の好男子で、流行に合つた服裝をし、育ちのよい青年らしく態度もさつぱりしてゐる。だがナヂェージダは彼の親父に三百ルーブル借りがあるので、從つてこの青年も蟲が好かない。それにこのピクニックに小商人まで招ばれて來たことが快くなかつたし、こんなに氣持のせいせいしてゐる晩を選りに選つて、彼が身近かにやつて來たことも氣に障るのだつた。

「ピクニックはまづ成功ですね」と、ちよつと間を置いて彼が言つた。

「ええ」と彼女は合槌をうつたが、そこで例の借りのことを急に思ひ出してでもしたやうに、さ

りげなく附け加へた、「さうさう、お店へいらしたらね、二三日うちに主人が、あの三百……だつたかしら、とにかくお拂ひに上がりますからつて、さう仰言つて頂戴ね。」

「僕の顏さへ見りや借り借りつて、それさへやめて下さるなら、僕もう三百御用立てしてもいいんですがね。實に散文的だ。」

ナヂェージダは笑ひ出した。もし自分が浮氣のできる女だつたら、そしてその氣になりさへしたら、一分間であの借金が消えてしまふんだがと、そんな可笑しい考へが浮かんだのである。まあ假に、このきれいな顏をした坊つちやんをのぼせ上がらせて見たとしたら。本當にさぞ滑稽で馬鹿げた無茶苦茶なことになるだらう。さう思ふと急に、夢中にならせて搾れるだけ搾つて、その擧句にぽいと拋り出して、その結末がどうつくか見てやりたくなつた。

「僕、失禮ですがあなたに忠告があるんです。」おづおづとアチミアーノフが切り出した、「あのキリーリンに氣をつけて頂きたいのです。彼奴は到るところであなたを種に怪しからんことを言ひ觸らしてゐるんです。」

「馬鹿がどんなことを言ひ觸らして歩かうと、私の知つたことぢやありませんわ」とナヂェージダは冷やかに言つたが、急に不安な氣がしだして、この美青年を弄んでやらうといふ可笑しい考へも、一瞬にして魅力を失つてしまつた。

「さあ下りなくちや」と彼女は言つた「呼んでますわ。」

下ではもう魚のスープが出來てゐた。それを銘々の皿に分けて、ピクニックでなければ見られない例の神妙な顔をして食べてゐた。このスープは實にうまい、ついぞ家ではこんな旨いものが出た例しはない、とみんながさう思ふのだつた。どこでもピクニックはさうしたものだが、ナプキンだの紙包みだの、風でごそごそ這ひ廻る不用の油紙だのの堆のなかで、みんなてんでに見當がつかなくなつて、どこに誰のコップがあるのやら、どこに誰のパンがあるのやらも分からず、葡萄酒を毛氈に零す、自分の膝に零す、鹽を撒きちらす、おまけにぐるり一面は眞暗で、焚火もいつの間にか衰へかけてゐるのだが、誰ひとり立つて粗朶をくべに行くだけの元氣もない。みんな葡萄酒を飲んだが、コースチャとカーチャにはコップに半分づつだつた。ナヂェージダは一杯では足らず二杯目を乾して、醉が出てキリーリンのことなど忘れてしまつた。

「豪勢なピクニックだ、それに實に何とも言へん晩だ」とほろ醉ひ機嫌のライェフスキイが言ふ、「だが僕は、それにも拘らず敢てよき冬を擇るね。『呼氣は霜をむすんで、海狸の襟に銀と かがやく』★か。」

「蓼喰ふ蟲も何とやらさ」とフォン・コーレンが一言を加へる。

ライェフスキイは氣づまりを感じた。背中からは焚火の火氣が壓してくる、胸と顏へはフォン・

コーレンの憎惡が押して來る。この頭の進んでしつかりした人間に憎まれることは、恐らくそれに充分の根據があると思はれるだけに、彼を參らせ弱氣にするのだつた。とてもその憎惡に對抗する勇氣はないので、彼は相手の意を迎へるやうに、

「僕は自然の熱愛者なんだが、自然科學をやらなかつたことが殘念でならない。僕は君が羨ましい。」

「まあ、私なんか殘念でも羨ましくもないわ」とナヂェージダが言つた、「それ所か、甲蟲だのお天道蟲だのに一所懸命になつてる人の氣が知れないわ。食ふや食はずの人間もゐるのに。」

ライェフスキイも同意見だ。彼は自然科學のことは一向辨へがない。だから、蟻の觸角だの油蟲の足だのに沒頭してゐる連中の、權威たつぷりの語調や深刻らしい學者面には、何としても我慢がならなかつた。さうした連中が、觸角や足や、また原形質とかいふもの（何となく彼にはそれが牡蠣みたいなものに想像された）を基にして、人類の起原や生態までを包括してゐる問題を解かうとかかるのを見ると、腹が立つてならなかつた。しかしナヂェージダの言つたことにも、例の嘘つぱちが見えすいてゐたので、ただ彼女をやりこめるために彼は言ふのだつた。

「天道蟲が問題なんぢやないよ。問題は推論にあるんだ。」

八

大分更けて十時を廻つてから、一同は歸りの馬車に乘りはじめた。もうみんな乘つてしまつて、足りないのはナヂェージダとアチミアーノフだけだつた。二人は川向ふで、きやつきやつ笑ひながら追駈つこをしてゐる。

「諸君、早くして呉れ給へ」とサモイレンコが二人に叫ぶ。

「だから婦人に酒を飲ませるといふ法はないのさ」とフォン・コーレンが小聲に言つた。

ライェフスキイは、ピクニックとフォン・コーレンの敵意と自分のさまざまな想念とでへとへとになつてゐたが、とにかく彼女を呼びに行つた。すると、すつかり陽氣に浮き立つてしまつて、羽毛(はね)のやうに身輕な氣持になつてゐた彼女は、息をはずませて笑ひながら、彼の兩手をつかまへ、胸に頭を押しつけて來たので、彼は一歩退くと聲を荒らげて、

「何だ、そのざまは。まるで……娼婦ぢやないか。」

と言つたが、これはあんまり烈し過ぎたと、却つて女が可哀相になつた。男の怒氣を含んだ疲れた顏に、自分に對する憎惡や憐憫や腹立たしさを讀みとつた彼女は、張り切つた氣持も忽ち失せるのだつた。度が過ぎた、羽目を外しすぎたと氣づくと、彼女は悲しくなつて、ああ私はやつ

ぱりどたどたした肥つちよでがさつな醉拂ひ女だと思ひながら、最初に眼についた空馬車にアチミアーノフと一緒に乘り込んだ。ライェフスキイはキリーリンと、動物學者はサモイレンコと、補祭は婦人達とそれぞれ同乘して、馬車は動き出した。

「どうだい、あの猿の夫婦は……」とフォン・コーレンは眼をつぶつてマントにくるまりながら始めた、「ええ君、あの女は食ふや食はずの人間がゐる以上、甲蟲や瓢蟲(てんとうむし)には構つちやをれんさうだ。猿どもがわれわれ科學者に對する態度はいつもあれだ。十世紀のあひだ笞と拳骨で脅やかされ通した惡賢い奴隷の種族だ。暴力の前でこそ顫へ上がつて感動して尾を振りもするが、一旦あの猿を頸根つこの抑へ手のない自由の天地へ放して見給へ、早速ふんぞり返つて勝手な熱を吹きだすのさ。あの猿が展覽會や博物館や芝居でどんなことを言ふか聞いて見給へ。でなきや科學を論ずるところを聞いて見給へ。ふんぞり返る、後脚で立つて見せる、惡罵を飛ばす、難癖をつける……この難癖が附き物なんだ、奴隷根性といふ奴さ。よく聽いて呉れよ、一體この世の中では、騙兒(かたり)仲間よりは寧ろ自由職業者の方が惡聲を蒙る度數が多いね。それは社會の四分の三が奴隷ども――つまりああいつた猿の手合から成り立つてるからなのだよ。奴隷が君に手を伸べて、働いて呉れてどうも有難うと本心から禮をいふ、そんなことがあつて堪るものか。」

「だからどうしようつて言ふんだ、僕には分からんな」と欠伸をしながらサモイレンコが言ふ、

「可哀さうにあの婦人は、ごく單純な氣持から、君を相手に利口な口が利いて見たかつただけの話だ。それを君は、仰々しい結論まで引つ張り出す。君はあの亭主に何か癪に障ることがあるので、あの婦人まで道づれにしちまつたんだらう。どうして、あれは立派な婦人だよ。」

「ああ、もう澤山。あれは普通一般のお妾さ、身持が悪くて俗惡なね。ねえ、アレクサンドル・ダヴィードィチ、夫と別れたただの百姓女が、仕事もせずにのらくらして、ケラケラ笑つて日を送つてゐるのを見たら、君は『野良に出ろ』つて言ふだらう。だのに何だつて今の場合は、本音を吐くのをびくびくするのだ。つまる所ナヂェージダ・フョードロヴナが水夫の妾ぢやなくて役人の妾だからかい？」

「この俺にあの人をどうしろといふんだ」とサモイレンコは到頭癇癪を起こして、「打てとでもいふのか。」

「惡德を甘やかすなと言ふのさ。われわれはいつも蔭で惡德を非難してゐる。だがこれは、腹の中で舌を出してるやうなものだ。僕は動物學者、卽ち社會學者だ、これはどつちも同じことだ。君は醫者だ。社會はわれわれを信頼してゐる。われわれは、あのナヂェージダ・イヴァーノヴナの如き婦人の存在が現在の社會及び次世代に及ぼす怖るべき害毒を、社會に向つて指摘する義務があるのだ。」

「フョードロヴナだよ」サモイレンコは直してやつて、「そこで社會にどうしろといふのだ。」

「社會？　それは社會の勝手さ。僕に言はせれば、最も確實直截な途は——强制だ。軍隊（マス・ミリタリ）の手であの女を亭主の手許へ送還する。もし亭主が引き取らんと言つたら、徒刑場へ送るか、感化院へでも叩き込むんだ。」

「ふうむ」とサモイレンコは溜息をついた。少し間を置いてから、彼は小聲でたづねた、「二三日まへ、君はライェフスキイのやうな人間は絶滅せにやならんと言つたつけな。……では訊くが、それを——まあ國家なり社會なりが、彼の絶滅を君に委任したとしたら、君は……決行できるかね。」

「ああ、僕の手は顫へまいよ。」

九

歸つて來ると、ライェフスキイとナヂェージダは、眞暗で蒸暑い退屈なわが家へはいつて行つた。二人とも默つてゐた。ライェフスキイは蠟燭をつける。ナヂェージダは椅子に腰を下ろして、マントも帽子もとらずに、悲しげな濟まなさうな眼で男を見上げた。

彼には、女が彼の言譯を待つてゐることが分かつてゐたが、今さら言譯などは退屈で無駄で面

倒なだけだつたし、さつき思はずカッとして荒い言葉を使つた自分を省みると、氣分が重くてならなかつた。そのときポケットの中でふと手紙が指に觸つた。今日こそは讀んでやらうと思ひながら、一日延ばしにして來た手紙である。今これを讀んでやつたら、女の注意が外れるだらう、と彼は思つた。

『もういい加減にきつぱり片をつける時だ』と彼は思ふ、『見せちまはう。どうせなるやうにしきやならないんだ。』

彼は手紙を引つ張り出して、女に渡した。

「讀んで御覽。君に關係したことだ。」

さう言ひ棄てたまま彼は書齋へ行つて、暗闇のなかで枕もせずに寢椅子にころがつた。ナヂェージダは讀んでしまふと、天井が下つて來、壁がすうつと迫つて來るやうな氣持がした。にはかに狹苦しく、暗く、怖ろしくなつた。彼女はあはただしく三度十字を切つて、唱へるのだつた。

「安息を與へたまへ。……主よ、安息を與へたまへ。……」

それから泣きだした。

「ヴァーニャ！」と彼女は呼んだ、「イヴァン・アンドレーイチ！」

返事がない。彼女はライェフスキイがもう這入つて來て椅子の背後に立つてゐるのだと思ひ、

子供のやうにしやくり上げながら、

「あの人の死んだこと、なぜもつと早く言つて下さらなかつたのよ。そしたら私、ピクニックにも行きやしないし、あんな馬鹿騒ぎもしなかつたのに。……みんなに厭らしいことまで言はれたのよ。ああ取返しがつかない、取返しがつかない。私を救つてよ、ヴァーニャ、救つて頂戴。……私、氣がちがつたわ。私もう駄目だわ。……」

ライェフスキイには女の泣きじやくるのが聞こえた。ひどく蒸暑く、心臟がはげしく打つてゐた。やりきれない氣持で彼は起きあがつて、暫く部屋の眞中につつ立つてゐたが、暗がりの中で卓子のそばの肘掛椅子をさぐり當てると、それに腰をおろした。

『これぢや牢屋だ』と彼は思ふ、『逃げ出さう……もう我慢がならん。』

カルタをしに行くにはもう遲いし、この町にはレストランもない。彼はまたごろりと横になつて、泣聲の聞こえぬやうに指を耳に突つこんだが、ふとそのときサモイレンコの所なら今からでも行けると考へついた。ナヂェージダの傍を通らずに濟ますため、窓から庭へ飛びおり、柵を乘り越えて往來へ出た。暗かつた。汽船が一艘いましがた着いたところだ。燈の樣子で見ると大きな客船らしい。……ごろごろと錨鎖の音がする。岸からその船をめがけて走つて行く一點の赤い燈がある。稅關のランチだ。

『みんなキャビンでいい氣持に眠つてゐる』とライェフスキイは考へ、他人の安眠を羨ましく思つた。

サモイレンコの家の窓は開け放してあつた。ライェフスキイは一つ二つ覗いて見たが、部屋の中は眞暗でしんとしてゐた。

「アレクサンドル・ダヴィードィチ、もう寢たかい？」と彼は呼んだ、「アレクサンドル・ダヴィードィチ！」

咳拂ひと、びつくりするやうな誰何の聲がした。

「誰か？　どこの何奴か？」

「僕だよ、アレクサンドル・ダヴィードィチ。遲くなつて濟まない。」

暫くすると部屋の扉が開いた。手燭の柔らかな光がさして、白い寢間着に白い夜帽をかぶつたサモイレンコが、ぬつと姿を現はした。

「どうしたんだ」と、まだ醒めきらぬ深い息づかひで、ぼりぼり搔きながら訊く、「まあちよつと待て、いま表を開ける。」

「いいよ、窓からはいるから……」

ライェフスキイは窓から這ひ込むと、サモイレンコに近よつてその手を摑んだ。

「アレクサンドル・ダヴィードィチ」と彼は顫へ聲で、「僕を救けて呉れ。後生だ、拜む。僕の言ふことを分かつて呉れ。僕はもうやり切れないんだ。この境涯があと二日も續いたら、僕は犬でも、犬でも絞るやうに、自分のこの首を縊つてしまふ。」

「まあ待て。……一體そりや何の話なんだ？」

「蠟燭をつけてくれないか。」

「おお、お」と蠟燭をともしながらサモイレンコは溜息をついて、「おやおや、君もう一時過ぎだぞ。」

「まあ勘辨して呉れ。僕は家にぢつとしてゐられないんだ」と、それでも灯の光とサモイレンコのゐるお蔭でずつと氣持が樂になつて、ライェフスキイが言つた、「アレクサンドル・ダヴィードィチ、君は僕の唯一の一番の親友だ。……頼みに思ふのは君だけだ。いやでも應でも、後生だから僕を救ひ出して呉れ。僕はもうどうあつてもこの町には居られないんだ。金を貸して呉れ。」

「やれやれ、何といふことだ」とサモイレンコはぼりぼりやりながら歎息した、「うとうとつとしかけたと思ふと汽笛だ。汽船がはいつたなと思つてゐると、今度は君だ。……澤山要るのかい？」

「どうしても三百は要るんだ。彼女に百は殘しといてやらなきやならんし、僕の道中に二百は

要る。……今までにもう四百ほど借りがあつたね。みんなあとで送るよ、きつと。……」

サモイレンコは兩方の頰髯を片手に握つて、脚を踏み擴げたまま考へ込んでしまつた。

「さう……」と思案しながら唸つた、「三百か。……ふむ。手許にはそんなにはないが。こりや誰かに借りなきやなるまい。」

「お願ひだ、借りて呉れ給へな」——相手の顏色で、こりや貸して呉れるつもりだ、きつと貸して呉れると見て取つたライェフスキイが言つた、「借りて呉れ給へ。僕はきつと返す。ペテルブルグに着き次第すぐ送るよ。そりやもう大丈夫だ。ところでサーシャ」と急に元氣になつて、「葡萄酒をやらうぢやないか。」

「うん。……酒もよからう。」

二人は食堂へはいつて行つた。

「ところでナヂェージダ・フョードロヴナはどうするんだ?」とサモイレンコは、罎を三本と桃を盛つた皿とを、卓子に載せながら訊いた、「あの人がおとなしく殘つてゐるかなあ。」

「それは僕が引き受ける、萬事引き受ける……」とライェフスキイは、歡びの思ひがけぬ高潮を感じながら、「後から金を送つて、あれを呼び寄せる。……そこできつぱりと二人の關係を片づけるんだ。君の健康のために、友よ。」

「待て待て」とサモイレンコが言つた、「先にこれを飲んで見て呉れ。……それは僕の葡萄園の奴だ。この罎はナヴァリージェの葡萄園のだし、こつちはアハトゥロフのだ。……三つとも飲つて見て、ひとつ忌憚のない所を聽かして呉れ。……僕のはちよいと酸味があるやうなんだが。え、どうだね?」

「うん。君のお蔭で安心したよ、アレクサンドル・ダヴィードィチ。ありがたう……生き返つたやうな氣持だよ。」

「酸つぱいだらう?」

「そんなこと、僕に分かるもんか。とにかく君は實に素晴らしい、得がたい人物だ。」

彼の蒼白い興奮した善良さうな顏を見てゐると、サモイレンコは、奴等は絶滅してしまふべきだといふフォン・コーレンの言葉を思ひだした。すると彼にはライェフスキイが、誰にでも造作なくいぢめたり息の根をとめたりすることの出來る、護り手のないかよわな幼兒のやうに思へて來た。

「向ふへ歸つたらお母さんと仲直りをし給へよ」と彼は言つた、「今のままぢやいかんよ。」

「うん、うん、必らずする。」

しばらく言葉が途絶えた。一本目が空になると、サモイレンコが言つた。

「フォン・コーレンとも仲直りをするがいいな。君たちは二人とも實に立派な秀拔な人間だ。それが狼みたいに睨み合つてるなんて。」

「さうだ、あの男は實に立派な秀拔な人間だ」と、今はもう誰でも彼でも褒め上げて宥してしまひたい氣分で、ライェフスキイは合槌をうつた、「あの男は素晴らしい人物だ。そりやさうだが、彼と仲好くやつて行くことは僕には出來ない。とても駄目さ。性格がちがひ過ぎるんだ。僕は無氣力で弱氣で隷屬的な人間だ。そりや時によつては僕も彼へ手を差し伸べるかも知れない。だが彼の方ぢや顏をそむけるに極まつてゐる、冷笑を浮かべてね。」

ライェフスキイは葡萄酒を一口やつて、隅から隅へ一往復し、それから部屋の眞中に立ちどまると言葉をつづけた。

「僕にはフォン・コーレンといふ人間がよく分かる。あれは鞏固で强烈な專制的な性格の持主だ。君も聞いたらうが、あの男はしよつちう探險旅行の話をしてゐる。あれは決して空言ぢやないんだ。彼には沙漠が、月夜が要るのだ。あたりを見廻すと、天幕の中にも野天のもとにも、强行軍に疲れ果て、或ひは飢ゑ或ひは病んだコサックや案内者や、人夫や醫者や僧侶が眠りこけてゐる。そのなかで眼を醒ましてゐるのは彼一人だ。まるでスタンレイのやうに折疊椅子に腰掛けて、俺は沙漠の王者だ、こいつ達の主人だと感じる、彼はさういふ人間だ。彼は行く、彼は行く、

何處かを指して行く。部下は呻き、ばたばたと仆れるが、彼はやはり進んで行く。やがては彼も遂に仆れる。だが仆れてのちもなほ彼は沙漠の暴君、沙漠の王者なのだ。何故といつて、彼の墳墓の十字架は三四十哩さきからも隊商の眼にうつり、沙漠に君臨してゐるからだ。彼が軍籍に身を置かなかつたことを僕は切に惜しむ。彼はきつと卓越した天才的な司令官になつたに相違ないと思ふ。その率ゐる騎兵隊を河中に溺らせて、屍の橋を架け得た人に相違ない。實戰に必要なのは、築城術や戰術よりは寧ろかかる剛勇なのだ。さうさ、僕は實によくあの人間が分かるんだ。ねえ君、一體なんだつて彼はこんな所でぶらぶらしてるんだらう。ここに何の用があるんだらう。」

「海洋の動物を研究してゐるんだよ。」

「いいや、それは違ふ、斷じて違ふ」とライェフスキイは歎息して、「船中で一緒になつた或る學者から聞いたことだが、黑海には動物が極めて乏しいさうだ。海底に硫化水素が過剩なため、有機體の生活は不可能だといふ話だ。だから眞面目な動物學者はみんなナポリやヴィルフランシュ★の生物學實驗所で勉强してゐる。所がフォン・コーレンと來たら、獨立獨行の頑固者だ。彼が黑海でやつてゐるのは、ここでは誰もやつてゐないからなのだ。彼が大學と絶緣し、先輩や同僚に交はらうとしないのは、彼が何よりも先づ專制君主であり、動物學者といふのは二の次だからさ。まあ見てゐ給へ、今に大したものになるぜ。あの男はもう今から夢想してゐる——探險

旅行から歸つて來たら、わが國の大學といふ大學から陰謀と凡庸とを叩き出して、學者連中を手も足も出なくしてやらうとね。專制國が強いのは何も戰爭に限つたことではない、科學の方でも同じことなのだ……。あの男が今年でもう二た夏この臭氣芬々たる町に暮らしてゐるのは、都で第二人者たらんよりは田舍で第一人者たる方がいいからさ。ここにゐれば彼は王者だ、鷲だ。鐵の鞭を振り廻して、己れの權威の下に住民どもを壓し伏せてゐる。みんなの上に監視の眼を光らせて、他人のことに一々干渉する。彼は一切を要求する。だからみんな彼を怖れ憚かつてゐる。あの男が僕を憎むのは、僕が奴の足の下から脫け出しかけてゐるからなのさ。僕を絕滅しちまへ、さもなきや土方にしちまへつて、あの男は言やしなかつたかね？」

「言つたよ」とサモイレンコは笑ひ出した。

ライェフスキイも笑ひ出して、葡萄酒をぐつとやつた。

「彼の理想を聞いて見てもやつぱり專制的なんだ」と彼は桃を齧り、笑ひながら言ふ、「普通の人間なら、公益の爲めに働くといふ場合、自分の隣人——僕だとか君だとか、まあ言つてみれば人間を目指すだらうぢやないか。ところがフォン・コーレンにとつては、人間なんて犬つころや蟲けらも同然、彼の生活の目的物たるには小さ過ぎるんだ。彼が働いたり、探險に出掛けたり、そこで頸根つこを折つたりするのは、隣人愛のためぢやなくて、人類だの次世代だの人間の理想

種だのといふ抽象概念のためなんだ。彼は人間の種の改良に努力してゐるんだから、さうした彼の眼から見ればわれわれなんぞ、たかだか奴隷か、砲火の餌食、乃至駄獸にしきや見えんのだ。或る者は絕滅するもよい、徒刑に處するもよい、また或る者は鐵則で縛るもよい、アラクチェーエフ★がやつたやうに太鼓の音で起床し就床させるもよい、われわれの貞潔と美德を保持するために宦官を置くもよい、今日の狹小な保守的道德の埒を越える者は、片つ端から銃殺するもよい——すべてこれ人間の種の改良のためなんだから。……だが、人間の種とは一體何だ。幻さ、蜃氣樓さ。……世の專制者にして幻想家でなかつた例しはない。ねえ君、僕は實によく彼が分かるんだ。僕は彼を買つてゐる。彼の價値を否定しはしない。彼のやうな人達によつてこそ世界は支へられてるんだからね。萬一吾々に一任しようものならそれこそ大變、僕等は僕等のお目出たさと親切氣とでもつて、恰も蠅がこの畫に對してしたと同じことを、この世界に對して爲出かすだらうよ。さうだとも。」

ライェフスキイはサモイレンコの横に腰を下ろして、心からの熱情を籠めて言葉をつづけた。

「僕は空虛な一文の値打もない敗殘者に過ぎない。僕の今呼吸してゐる空氣、この酒、戀愛、一言にして言へば生活——それを僕は今の今まで、虛僞と安逸と怯懦とでもつて購つて來たんだ。今の今まで僕は、他人を欺き自己を欺き、そしてそのため苦しみ惱んで來たんだが、勿論こんな

苦惱なんて安價な下劣なものに過ぎん。あのフォン・コーレンの憎惡の前に、僕は意氣地なくも兩手をつく。何故なら僕は時々自分が憎らしくなり、吾ながら見下げ果てた奴だと思ふからだ。」

ライェフスキイはまた興奮して隅から隅へ一往復し、言葉をつづけた。

「僕は自分の缺點をはつきり識り且つ認めえたことが嬉しい。これは僕が甦生して別人になる途に力を借してくれるのだ。ああ君、僕がどんなに身悶えして自己更新を渴望してゐるか、それが分かつて呉れたらなあ。僕は君に誓ふ、きつと眞人間になつて見せる！　なつて見せる！　酒の勢かそれとも眞實さうなのか、それは知らないが、とにかく今夜君の所で過ごしたやうなこんな明るい淸らかな時を過ごしたことは、全く久し振りのやうな氣がする。」

「君、もう寢る時刻だよ……」とサモイレンコが言つた。

「さう、さう。……惡かつた。ぢや、もう失敬しよう。」

ライェフスキイは家具や窓の下をのぞいて制帽を搜しはじめた。

「有難う……」と溜息まじりに呟いて、「本當に有難う。……親切と優しい言葉は慈善より嬉しいものだ。君のお蔭で生き返つたよ。」

帽子が見附かると、彼は突つ立つたまま間の惡るさうな眼附でサモイレンコを見た。

「アレクサンドル・ダヴィードヴィチ」と彼は哀願するやうな聲で言つた。

「何だい。」

「お願ひだ、泊めて呉れ給へな。」

「ああいいとも。……何で惡い？」

ライェフスキイは長椅子に横になつてからも、長いこと軍醫を相手に喋つてゐた。

一〇

ピクニックの日から三日ほどすると、マリヤ・コンスタンチーノヴナが不意にナヂェージダを訪ねて來た。そして挨拶もせず帽子もとらずに、いきなり彼女の兩手をとつて自分の胸に押しつけると、ひどく興奮の體で、

「あなた、あたくしもう動顚してしまつてどきどき云つてをりますのよ。昨日主人のニコヂームが、あの私達の大好きな親切な軍醫さんから、且那樣がお亡くなり遊ばしたとか伺つて參りましたの。まあ、あなた、このお話本當でございますの？」

「ええ、本當ですわ。あの人は亡くなりましたの」とナヂェージダは答へた。

「本當にまあ、何といふことでございませうね。けどねえ、あなた、惡いことにはきつとまた善いこともあるものですわ。且那樣はきつと、そりや御立派な聖人のやうな方でいらしたに違ひ

ありませんわ。さういふ方は、この世よりも天國の方で御用がおありなのですわ。」

マリヤ・コンスタンチーノヴナの顏は、まるで皮膚の下で小さな針が無數に跳ね出しでもしたやうに、その線といふ線、點といふ點が顫へはじめた。そこで甘つたるい例の巴旦杏笑ひをやり、夢中になつて息をはずませながら、

「ぢやこれで、あなたも自由のからだにおなり遊ばしたのですわ。もうこれからは何の氣兼ねもなしに大手を振つてお歩けになれますわ。これからは神樣も世間の人も、あなたとイヴァン・アンドレーイチのことを祝福しますわ。本當に素敵ですこと。あたくしもう嬉しくつて、何と申し上げていいやら分かりませんのよ。あたくしねえ奥樣、仲人を勤めさせて頂きますわ。……あたくしも主人のニコヂームもお二人がそりや大好きでしたのよ。それに免じて、お二人の正式な淸らかな御緣組みを祝福させて下さいましな。式はいつお擧げになるおつもり？」

「さあ私、まるで考へてをりませんの」と手を引きながらナヂェージダが言つた。

「まあそんなことがあるものですか。お考へになつたわ。きつとお考へになつたに極まつてゐますわ。」

「本當に考へてをりませんの」とナヂェージダは笑ひ出した、「式なんか何故致さなくちやなりませんの？　そんな必要ございませんわ。今まで通りやつて參りますわ。」

「まあまあ、何ていふことを仰言いますの？」とマリヤ・コンスタンチーノヴナはぞつとしたやうに、「本當にまあ、何を仰言いますの？」

「式を致したつて、別によくなりは致しませんわ。却つて惡くなる位なもので、二人とも自由でなくなりますもの。」

「奥樣、本當にあなたはまあ！」とマリヤ・コンスタンチーノヴナは後退りをして、兩手を打ち合はせて叫んだ、「どうかしてらつしやるのですわ。ね、しつかり遊ばせな、氣をお鎭め遊ばせな。」

「でも、どう氣を鎭めろと仰言いますの。私まだ一度だつて生活といふことを致したことがございませんのよ。それを氣を鎭めろだなんて。」

ナヂェージダには、自分が本當にまだ生活といふものをした覺えのないことが思ひ出された。寄宿女學校を出ると愛してもゐない男に嫁ぎ、やがて、ライェフスキイと一緒になり、それからといふものは明けても暮れてもこの退屈な沙漠のやうな岸邊で、何物かを待ち佗びながら暮らして來た。これが生活といへようか。

『やつぱり結婚するのが本當らしいわ』と彼女はふと思つたが、キリーリンやアチミアーノフのことを思ひ出すと、顏を赤らめて言つた。

「いいえ、駄目ですわ。たとへイヴァン・アンドレーイチが膝をついて賴んだとしても、やつぱり私、斷りますわ。」

マリヤ・コンスタンテーノヴナは悲しげな眞面目な顏をしてぢつと一點を見つめたまま、一分ほど默々と長椅子に掛けてゐたが、立ちあがると冷めたい聲で、

「さやうなら、奧樣。とんだお騷がせを致しましたわ。これはまことに申し辛いことですけど、御懇意を願ひますのも今日限りと思召して下さいまし。あたくしイヴァン・アンドレーイチは御尊敬申し上げてをりますので、本當に殘念でございますけど、もう宅へはお二人ともいらしては頂けませんわ。」

眞面目くさつてかう言つてしまふと、却つて自分で自分の眞面目くさつた調子に壓倒されてしまつた。彼女の顏はまた顫へはじめ、柔しい巴旦杏表情になつて、度を失つておどおどしてゐるナヂェージダの方へ兩手を差し伸べ、哀願するやうな聲で、

「ねえ、せめて一分だけでも、あなたのお母樣か、でなければ姉さんにならせて下さいましな。あたくしお母さんのやうに、何もかも申してしまひますわ。」

ナヂェージダは胸の底に、まるで母親が生き返つて來て自分の前に立つたやうな溫かさと嬉しさと、自分への憐憫とを感じた。いきなりマリヤ・コンスタンチーノヴナにすがりつくと、顏を

相手の肩に埋めた。二人とも泣き出した。二人は長椅子に腰を下ろして、そのまま暫く咽び泣いてゐた。お互ひの顏も見ずに、一言も口を利く力もなしに。

「あたくし、もう本當にお母樣になつたつもりで」とマリヤ・コンスタンチーノヴナが口を切つた、「齒に衣を着せずに、本當のことをづけづけ申してしまひますわ。」

「どうぞ、どうぞ仰言つて。」

「あたくしを信じて下さいましね。この土地の女のなかで、あなたとお附き合ひしたのはこのあたくしだけといふことは、思ひ出して下さいますわね。實を申すと、お初にお目に掛かつた日から、これは困つた方だと思ひましたけど、皆さんのやうにあなたを白眼で見ることがあたくしには出來ませんでしたの。あの大好きなイヴァン・アンドレーイチがまるでわが息子のやうに思はれて、お氣の毒でなりませんでしたの。まだ世の中を御存じない纖弱な若い方が、お母樣とも別れて他國に來てらつしやる——それを思つてあたくし隨分苦しみましたの。……主人はあの方とお附き合ひしてはならんと申しましたのですけれど、あたくし無理に賴み込んで到頭說き伏せましたのよ。で、イヴァン・アンドレーイチを宅にお迎へすることになりましたが、そりや無論あなたも御一緒にでしたわ。さもないとあの方氣を惡くなさいますものね。あたくしには息子も娘もございませう。……子供の柔らかな無垢な心、それは御存じでいらつしやいますわね。……

萬一あの小さいのの一人でもが汚れに染みでもしたらと、あたくしあなた方お二人をお迎へはしたものの、子供のことでびくびくしてばかりをりましたのよ。あなたもお母さんにおなりになれば、このあたくしの苦勞がお分かりですわ。あたくしがあなたを、お氣を悪くなさらないでね、淑女扱ひに致すと云つてみなさん呆れておしまひになつて、當てこすりを仰言るのですのよ。蔭口だの邪推だのは無論のことですわ。……あたくし心の底ではあなたを責めてをりました。ですけど、あなたが不仕合はせでみじめで向ふ見ずな方なので、あたくしお氣の毒で、一人でくよくよしてをりましたの。」

「でも何故、何故ですの」とナヂェージダは總身を顫はせながら訊いた、「私が何の悪いことを致しまして？」

「あなたは怖ろしい罪の女ですわ。祭壇の前で御主人に立てた誓ひをあなたはお破りになつたのですもの。もしあなたに出會ひさへしなければ、身分の釣合つた良い家庭のお嬢さんを正式にお貰ひになつて、今頃は世間並みのしやんとした暮らしをしていらつしやる筈の立派な青年を、あなたは誘惑なすつたんですもの。あなたはあの方の青春を臺無しになすつたのよ。いいえ、何も仰言らないで、何も仰言らないで！　あたくしども女の犯した罪は男のせゐだなんて、あたくし信じませんわ。いつも女が悪いのですわ。男と申すものは家庭の中のことにかけては考へ無しのもので、情ではなく頭で生きてゐるものですから、さう何もかも分かるものぢやございません。けれど女には何もかも分かるのですわ。家庭の中のことはみんな女次第ですわ。すつかり女に任されてゐますから、從つてまた女に要求されることも多いのですわ。ねえ、だからもしこの方面のことで女が男よりも馬鹿か無能でしたら、どうして神様が女に育兒の大任をお任せになりませう。それからまた、あなたは恥といふものをすつかり忘れて、悪の小徑にお踏み込みになつたのよ。これが他の女だつたら人眼を避けて家に閉ぢ籠もつて、人眼にかかるのは、お寺で、喪服を着て蒼ざめた顔をしてさめざめと泣いてゐる時だけでせう。さうなれば皆さんも心から同情して、『主よ、この罪の天使はふたたび御許に還らうとしてをります……』と言ふに違ひありませんわ。ところがあなたは愼しみといふことをすつかり忘れて、大つぴらにしたい放題はなさるし、まるで罪が御自慢みたいな顔をして、ふざけたり笑つたりしてらつしやる。さういふあなたを見てゐると、あたくし恐くなつて身顫ひが出ましたのよ。あなたが宅にいらしてらつしやる時なんぞ、今にも天から雷様が落ちて來て私どもの家を潰してしまひはしまいかと、びくびくしてをりましたのよ。いいえ、何にも仰言らないで、仰言らないで」と、ナヂェージダの何か言ひたさうにするのを見てマリヤ・コンスタンチーノヴナは叫んで、「どうぞ信じて下さいましね。あたくし嘘は申しませんわ。あなたの心のお眼をまやかさうなんて考へてもをりませんわ。ですから聽いて

らして頂戴。……神様は大罪人には印しをお附けになるさうですが、あなたにもやつぱり印しが附いてをりましたのよ。お覺えがなくつて？　あなたのお召物は、いつもいつもぞつとするやうなのばかりでしたわ。」

自分の衣裳の好みについては日頃自信の強いナヂェージダは、この言葉を聞くと泣くのをやめて、さも怪訝さうに相手を見た。

「ええ、ぞつと致しますとも」とマリヤ・コンスタンチーノヴナはつづけた、「あなたのお召物の粋で派手な好みを見れば、誰にだつてあなたのお身持が知れますわ。あなたを見ては皆さんくすくす笑つたり肩を竦めたりなさるのですもの、あたくし本當に辛うございましてよ。……こんなこと申し上げては何ですけど、あなたには清楚さといふものがおありなさらないのね。いつか海水小屋でお目にかかつた時だつて、あたくし思はずひやりと致しましたのよ。上衣はまだしもですけど、スリップやシュミーズはまあどうでせう！……本當にあたくし顏が赤くなりますわ。イヴァン・アンドレーイチだつてお可哀さうに、ネクタイ一つちやんと結んで上げる方がないのね。あの方のワイシャツや靴を拜見すると、家に誰も構つて上げ手のないことがよく分かりましてよ。それに、ねえあなた、あの方しよつちうお腹を空かしてらつしやるわ。本當に家に誰もサモヴァルや珈琲の世話をする方がなけりや、月給の半分を茶亭で飲んでおしまひになるやうに

なるのも無理はありませんわ。それにお宅の中の御様子はまあどうでせう、ぞつと致しますわ。この町ぢうどちら様に伺つても蠅のゐた例しはございませんのに、お宅ぢやもう大變、皿も小皿も眞黑ですわ。それから窓やテーブルの上を御覽なさいまし、あの埃、蠅の死骸、コップの陳列。……あんなにコップを並べて何になさるお心算？　お宅では今まで食卓をお片附けにならないのね。それから、お宅の寢室と申したら、一足はいつたら最後顏から火が出ますわ。下着は投げ散らかし、壁には常々御使用遊ばす色んなゴム細工が吊下つてゐる、何だかの容器は出しつ放し。……ねえ、夫の眼には何にも觸れさせてはならないのでございますよ。妻たるものは夫の前では天使のやうに清らかでなくちやなりませんのよ。あたくしは毎朝、夜が白みだすと起き出して、それから冷たい水で顏を洗つて、主人のニコヂームに寢ぼけ顏を見せないやうに致しますの。」

「そんなことみんな小つぽけなことばかりですわ」とナヂェージダは大聲に咽び泣きながら、「私が仕合はせでありさへすればねえ。でも私こんなに不幸なんですもの。」

「さうよ、さうよ、あなたは本當に不仕合はせな方よ」とマリヤ・コンスタンチーノヴナは泣き出しさうになるのをやつと堪へながら溜息をついた、「それに、行末にはもつと怖ろしい苦患が待つてをりますのよ。一人ぼつちの老年、病氣、それから怖ろしい裁きの庭でなさる返事。……ああ怖い、怖いことだわ。今なら運命の方から救ひの手を差し伸べてゐて呉れるのに、あなたは

無分別にもそれを押し返さうとしてらつしやるんですわ。ね、結婚なさいまし、一日も早く結婚なさいまし。」

「ええ、本當にね、それが本當ですわ」とナヂェージダは言つた、「けど、それが出來ないの。」

「どうしてですの？」

「出來ないの。ああ、その譯をあなたが御存じでしたらねえ。」

ナヂェージダは思ひ切つてキリーリンのことを話してしまはうかと思つた。それからまた昨夜美青年のアチミアーノフと波止場で行き逢つて、例の三百ルーブルの借金から脫れる氣狂ひじみた滑稽な考へが浮かんでとても可笑しかつたこと、それから自分はもう取返しのつかない倫落の女だ賣女だと思ひながら夜更けの道を歸つて來たことも、話してしまはうかと思つた。自分でも何故あんな事になつたのか分からなかつた。で今こそマリヤ・コンスタンチーノヴナの前で、きつとあの借金は返しますと誓ひたかつたが、こみ上げて來る獻欵と羞恥とで口が利けなかつた。

「私、ここを發ちますわ」と彼女は言つた、「イヴァン・アンドレーイチには殘つて貰つて、私は發ちますわ。」

「どこへいらつしやるの？」

「ロシヤへ行きますわ。」

「でもどうしてお暮らしになるお心算？　だつて何にもおありにならないぢやないの。」

「飜譯をしますわ。さもなきや……さもなけりや小さな圖書館でもやりますわ。……」

「そんな夢のやうなことを、あなた。小さな圖書館だつてお金が要りましてよ。でもあたくしもうお暇しますわ。どうぞね氣を落ち着けて、よく考へて見て頂戴。明日になつたら晴れ晴れしたお顏で宅へいらして下さいましね。素敵ですわよ、きつと。ぢやさやうなら、天使さん。さ、接吻させて頂戴。」

マリヤ・コンスタンチーノヴナはナヂェージダの額に接吻して、彼女に十字を切つてやると靜かに部屋を出て行つた。いつの間にか暗くなつてゐて、オリガが臺所で燈をつけた。ナヂェージダはまだ泣きながら寢室へ行つて、ベッドに横になつた。はげしい熱が出て來た。横になつたまま彼女は着物を脫いで、脫いだ着物を足の方へ揉みくしやにすると、毛布をかぶつて丸くなつた。水が欲しかつたが、持つて來て呉れる人はなかつた。

「返しますとも」と彼女は獨り言をいつた。夢現の境で、自分が誰か病氣の女の傍に坐つてゐると、だんだんその病人が自分になつて來るのが見えた。「返しますとも。私がお金のためにあんな眞似をしたなんて、飛んでもないことだわ。……私ここを發つて、ペテルブルグからあの人にお金を送るわ。はじめは百……それから殘りの百……。」

夜が更けるとライェフスキイが歸つて來た。……

「はじめは百よ……」とナヂェージダは彼に言つた、「それからまた百……。」

「キニーネでも嚥んだらいい」と彼は言つて、心の中で考へた。――『明日は水曜で船が出るが、俺は發てない。すると土曜までここにゐなけりやならんな。』

ナヂェージダはベッドに膝で立つと、

「私いま何も言はなかつて？」と、微笑を浮かべ、蠟燭が眩しいので眼を細めながら訊いた。

「いいや、何も。明日の朝になつたらお醫者さんを呼ばなきやなるまい。もうお寢み。」

彼は枕を抱へて扉の方へ行つた。ナヂェージダを後に殘してここを發つてしまはうと決心が極まつてからといふもの、彼女のことが可哀相にもなり濟まない氣持もするのだつた。彼女の前に出ると、殺してしまはうと決めた病氣の馬か老いぼれた馬の前に出たやうに、何となく氣が咎めた。扉のところで立ちどまつて、彼女の方を振り返つた。

「ピクニックの時は思はずカッとして、亂暴な口を利いて濟まなかつた。御免ね。」

さう言つて彼は書齋へはいり横になつたが、なかなか寢つかれなかつた。

翌る日の朝、ちやうど祭日なので禮裝をして肩章（エポレット）をつけ勳章をぶら下げたサモイレンコが、ナヂェージダの脈を見、舌を見て、寢室を出て來ると、闘の外にライェフスキイが待つてゐて心配

さうに訊いた。

「どうだつたね。どんなだつたね。」

その顏には、恐怖と、極度の不安と、希望の色が見えてゐた。

「安心し給へ。大したことはない」とサモイレンコは答へた、「ただの熱だ。」

「そのことぢやないよ」とライェフスキイは苛立たしげに眉を寄せて、「金は出來たかい？」

「あああれか、本當に濟まんが」とサモイレンコは、扉の方を振り返つてどぎまぎしながら囁いた、「本當に濟まんが、誰の所にも遊び金がないんでな。あすこで五ルーブル、ここで十ルーブルといふ具合に集めて見たが、みんなで百十ルーブルにしかならん。今日もつと他の所を掛合つて見る。もうちよつと我慢して呉れ。」

「だがぎりぎり結着のところ土曜までだぜ」とライェフスキイは焦り焦りしながら身を顫はせて囁いた、「後生だから土曜までに賴むよ。土曜にもし發てなかつたら、僕はもう一文だつて……一文だつて要らん。第一醫者のところに金がないなんて、僕にはさつぱり分からんな。」

「うむ、それがどうもね、仕方がないんだ」とサモイレンコは語調を強めて早口に囁いたが、咽喉でひゆうつと變な聲がした、「みんなに借りられちまつたんだ。七千からの貸しになつてゐる。そして僕も借金だらけなんだ。これが僕の罪かい？」

「ぢや土曜日には大丈夫だね？　さうだね？」

「とにかくやつて見るよ。」

「頼むよ、君。金曜の午前中には僕の手にはいるやうにね。」

サモイレンコは椅子に掛けると、キニーネ溶液、臭剝、大黄浸、ゲンチヤナ丁幾、蒸溜水を合劑にして、苦味を消すため橙皮舍利別を加へる云々と處方をして、歸つて行つた。

一一

「まるで僕を捕縛しにでもやつて來たみたいだな。」——禮裝ではいつて來たサモイレンコを見て、フォン・コーレンが言つた。

「なに前を通りかかつたから、ちよつと寄つて動物學に敬意を表さうと思つてね、」さう言ひながらサモイレンコは、動物學者があり合はせの板を打つつけて製つた大きな卓子の傍に腰を下ろした。「やあ今日は、神父君」と窓際でせつせと何か寫し物をしてゐる補祭に會釋して、「ちよつと一服して、晝飯の仕度に駈けて歸るよ。もう時間だからな。……邪魔ぢやなかつたかい。」

「いいや少しも」と、細かい字を一杯に書き込んだ紙を卓子の上に並べながら動物學者が答へた、「寫し物をしてゐるところだ。」

「成る程。……ああ、いやはや……」とサモイレンコは歎息した。そして、かさかさに乾いた毒蟲の死骸の載つてゐる埃だらけの本を卓子の上でそつと引き寄せて見て、「しかしだね、ここに一匹の綠色の甲蟲が、何か用足しに出掛けるとするね。その途中でいきなりこんな目に逢ふ。こいつの恐怖が思ひやられるなあ。」

「うん、僕もさう思ふね。」

「この蟲には敵を防ぐ毒があるのかね？」

「あるさ。それで防いだり、相手を攻めたりする。」

「ふむ、成る程、成る程。……そこでつまり、自然界には何一つとして役に立たぬものはない、意味のないものはない」とサモイレンコは溜息をして、「ただ一つ僕には分からんことがある。君はすばらしい秀才だ、ひとつ教へて呉れないか。よくこんな獸がゐるね。大きさは鼠ぐらゐで、見たところはなかなか綺麗な奴だが、根性が君ひどく下劣で不道德なのだ。例へばまあ其奴が森の中へ行くとするね。小鳥が眼にはいる、すぐさま捕まへて喰つてしまふ。少し先へ行くと草の蔭に巣があつて卵がはいつてゐる。もう腹が一杯で喰ひたくはないんだが、でもやつぱり卵の一つは嚙み潰して、殘りを巣から蹴散らかしてしまふ。やがて蛙に出逢ふと、いい相手とばかりおもちやにする。蛙をいぢめ殺して仕舞ふと、自分の軀をぺろぺろ舐めながらまた先へ行く。今度

は甲蟲に出逢ふ、それも足で一潰しだ。……こんな調子で途にあるものは手當り次第ぶち毀し滅ぼすんだ。……他の獸の窩へ這ひ込む、蟻塚をやたらに荒らす、蝸牛を殼ごと嚙みくだく。……鼠に出逢へば組打ちをはじめる。蛇や仔鼠を見れば絞め殺さずには居られない。一日ぢうそんなことをしてゐる。ところで君、こんな獸が何で必要なのかね。何のために創造られたのかね。」

「君が何といふ獸のことを言つてるのか僕は知らないが」とフォン・コーレンは言つた、「多分食蟲動物の一種なんだらう。で、それがどうだと云ふんだね。小鳥は不注意だつたから奴の手に落ちたまでだ。卵のはいつてゐる巣が奴にやられたのは、不器用な鳥で巣のかけ方が拙くつて、隱し了せなかつたからだ。蛙はきつと保護色に缺陷があつたに違ひない、さもなけりや見附からずに濟んだ筈だ。以下すべて同斷だよ。君の言ふその獸に滅ぼされるのは、弱いもの、不器用なもの、不注意なもの、つまり何かの缺陷の持主で、自然が後代へ傳へる價値なしと認めたものに限るのだ。利口なもの、注意ぶかいもの、強いもの、發達したものは、生き殘るものだ。といつた譯で君の言ふその獸は、自らは知らずして自然界改良の大目的に仕へてゐるのだよ。」

「ふむ、成る程、成る程。……時に君」とサモイレンコは磊落な調子で、「ちよつと百ルーブルほど借して呉れ。」

「ああいいよ。食蟲動物の中には隨分面白い奴がゐるんだ。例へば土龍だね。こいつは害蟲を

驅除するから有益だと言はれてゐる。こんな話があるよ。昔あるドイツ人が、土龍の皮で外套を作つてヴィルヘルム一世に獻上したさうだ。ところが皇帝は、有用動物をこんなに澤山殺して怪しからんといふ譯で、その男に譴責を命ぜられた。だがね、この土龍といふ奴は、殘忍さにかけては君の言ふその獸に決して劣らないんだ。それにひどく牧草地を荒らすから、極めて有害な動物なんだよ。」

フォン・コーレンは手文庫を開けて、百ルーブル紙幣を出した。

「土龍は蝙蝠と同じく逞ましい胸郭を有つてゐる」と彼は手文庫を閉めながらつづけた、「骨骼と筋肉が驚くほど發達してゐるし、口には異常な武器を備へてゐる。あれでもし象ほどの大きさがあつたら、一切を破壞し得る天下無敵の動物だつたらうにね。面白いのは二匹の土龍が地の下で出喰はした時だ。二匹ともまるで言ひ合はしたやうに土を掘り擴げはじめる。つまり戰爭に便利なやうに廣場を作るのさ。さて廣場が出來ると、猛烈な戰鬪が開始される。そして弱い方が仆れるまでは決してやめない。さあ、百ルーブル」とフォン・コーレンは調子を落して、「但し條件つきだ、ライェフスキイの爲めぢやないといふ。」

「ライェフスキイの爲めだつていいぢやないか」とサモイレンコは赫となつて、「君の知つたことぢやあるまい。」

「ライェフスキイの爲めなのなら、僕は貸すのはお斷りだ。僕は君が金を貸したがる性分なのは知つてゐる。君は賴まれれば追剝のケリムにだつて金を用立てる人だ。だがね、失敬だが僕は君のさうした傾向に力を藉す譯には行かない。」

「いかにも僕はライェフスキイのために借りるんだ」と、立ち上がつて右手を振り廻しながらサモイレンコが言つた、「然り、いかにもライェフスキイのためだ！　しかもどこのどんな惡魔だらうと鬼だらうと、僕が自分の金を處分するのに口を出す權利は斷じてないのだ。君は貸せないのか？　さうなのか？」

補祭は聲を立てて笑ひ出した。

「まあさうカンカンにならずに、少しは考へて見給へ」と動物學者は言つた、「僕に言はせるとライェフスキイ氏に恩を施すのは、雜草に水をやり、蝗に餌をやるの愚にひとしいよ。」

「ところが僕に言はせると、隣人を助けるのはわれわれの義務だ」とサモイレンコは叫んだ。

「そんなら、あの塀の下に寢てゐる飢ゑた土耳古人を助けてやり給へ。あれは勞働者で、君のライェフスキイよりも有用且つ有益な人間だ。あの男にこの百ルーブルをやり給へ。それとも僕の探險旅行に百ルーブル寄附するんだな。」

「貸すのか貸さんのか、それを訊いてゐるのだ。」

「ぢやぶちまけて言つて仕舞ひ給へ。あの男は何でその金が要るのかね。」

「そりや祕密でも何でもない。土曜日にペテルブルグへ發つんだ。」

「なあるほど！」とフォン・コーレンは一言づつ長く曳きながら言つて、「ははあ……それで分かつた。ところであの女も一緒か、どうだ？」

「女の方は一先づ後に殘る。あの男がペテルブルグに落ち着き次第金を送つて寄越す。そしたら女も引き上げるのだ。」

「うまい！……」と動物學者は言つて、テノールで短く笑つた、「よく出來た！　そいつは名案だ。」

彼は急いでサモイレンコの傍へ寄つて顏をつき合はせると、相手の眼にぢつと見入りながら訊いた。

「さあ匿さずに言ひ給へ。彼奴は女に飽きが來たんだらう？　さうだらう？　さ、言ひ給へ、飽きが來たんだね。」

「さうだ」とサモイレンコは口に出して、汗ばんだ。

「何て厭な話だ！」と言つたフォン・コーレンの顏には、嫌惡の色がありありと見えた、「こいつは二つの中のどつちかだね、アレクサンドル・ダヴィードィチ。君が彼奴とぐるになつてゐる

のか、それとも君が、失禮ながらよつぽどお目出度いのか。君は彼奴に、まるで子供でもあしらふやうにいい加減な嘘八百で操られて、それに氣が附かないのかい？　彼奴は女から逃げたいのだ、女をここに棄てて行くつもりなんだ。そんなことは白日の如く明かぢやないか。女は君の頸つ玉へぶら下つて居殘る。で君がとどの詰まりは、自腹を切つてあの女をペテルブルグへ發たせることになるのも、同じく昭々として白日の如しだ。君のあの立派な友人はその數々の美德を以て、こんな簡單明瞭なことが分からなくなるまで、君の眼を眩ましたのかね？」

「それは單なる臆測に過ぎんよ」とサモイレンコは腰を下ろしながら言つた。

「臆測だつて？　ぢや何故あの男は女を連れずに一人で發つんだ。何故女の方が先に發つて男が後からぢやいけないんだ、奴にひとつ訊いて見給へ。實に狡い奴だ。」

友人への思ひも掛けぬ不審と疑惑の念に氣が挫けて、サモイレンコは急にぐつたりとなつて調子を低めた。

「いや、そんなことはあり得ない」と、ライェフスキイが泊つて行つた夜のことを思ひ出して彼は言つた、「あの男は實に苦しんでゐる。」

「それがどうだと言ふんだ？　泥棒や放火犯人だつてやつぱり苦しむさ。」

「假に一歩を譲つて、君の言ふ通りだとしよう……」とサモイレンコは思ひ惑ふやうに、「假にまあさうして見よう。……だがね、彼は青年だ、見ず知らずの他國に來てゐる。……大學を出た男だ。われわれも大學を出たのだ。われわれの他にはここで誰一人あの男の力になつてやる者はない。」

「君と奴とが時を異にして大學に籍を置いて、御兩人とも何一つ覺えなかつたといふだけの理由で、奴の怪しからん行爲を援助するといふんだね。馬鹿もいい加減にし給へ。」

「ちよつと待て、ひとつ冷靜に考へて見よう。どうだらうな、かういふ具合にして見たら……」とサモイレンコは指を揉み揉み考へて、「いいかね、やつぱり金は貸してやることにする。その代り、一週間の内には必らずナヂェージダ・フョードロヴナの旅費を送ると、紳士の面目にかけて立派に約束させる。」

「そりや約束なら幾らでもするだらうよ。それどころか涙を流して、自分で自分を信じるだらうよ。だがその約束に何の價値があるかね。奴は決して守りはしないよ。で一年か二年もして、ネフスキイを新らしい情婦と手を組んで歩いてゐるところを、君に見附かるとするね。すると奴は、僕は文明に害はれたとか、僕は所詮ルーヂンに過ぎないとか言譯をするに極まつてゐる。あんな男は打棄つてしまひ給へ、賴むよ。泥んこから身を引き給へ。兩手で泥んこを掻き廻すやうな眞似はやめにし給へ。」

サモイレンコはちよつと考へてゐたが、やがてきつぱりと、

「いや、僕はやつぱり借してやる。君は厭なら厭でいい。單に臆測を楯にして人の申出でを斷る、そんなことは僕には出來ん。」

「それは結構。まあ彼奴を抱いて接吻でもするさ。」

「ぢや、その百ルーブルを吳れ給へ」とサモイレンコはおづおづと賴んだ。

「厭だ。」

沈默が來た。サモイレンコはぐつたりしてしまつた。惡いことをしたやうな、恥ぢ入つたやうな、相手の鼻息を窺ふやうな顏附になつた。肩章（エポレット）と勳章をつけてゐるこの巨大漢が、こんな情ない、子供のやうにはにかんだ顏をしてゐる所は、何だか妙なものだつた。

「ここの主教貌下は、馬車を使はずに馬に乘つて管區を巡廻なさるんだが」と補祭がペンを置きながら言つた、「馬上のお姿は實に神々しい極みですよ。あの方（かた）の質朴と謙虛さは、聖書の偉大さに充ち滿ちてゐますね。」

「いい人かね」と、話題の變るのを喜んでフォン・コーレンが訊いた。

「でなくてどうします。いい方（かた）でなかつたら、僧正になれる筈がないぢやないですか。」

「僧正といはれる人の中には、隨分と立派な優秀な人物がゐるものだ」とフォン・コーレンが

言つた、「ただ惜しむらくは、彼等の多くは自ら爲政家を以て任ずるといふ弱點があるね。或る者は國粹化につとめ、或る者は科學の批判をしたりする。だがこれは彼等の仕事ぢやないね。それより管區監督局へもつと顏を出して貰ひたいものだよ。」

「俗人に僧正を論ずる資格はないですよ。」

「何故だい、補祭君。僧正だつて僕と同じ人間ぢやないか。」

「同じでもあるし、同じでもないですからね」と補祭はムッとしてペンを取り上げながら、「もしも同じだつたらあなたは天惠を授かつて、僧正になつてる筈ぢやありませんか。ところであなたが僧正でないとすれば、つまり同じだとは言へない譯ですね。」

「つまらんことを言ひ給ふな、補祭君」とサモイレンコは憂鬱さうに、「なあ君、かういふ案はどうかね」とフォン・コーレンに向つて、「その百ルーブルは貸して吳れないでもいい。君はこの冬までまだ三ヶ月僕の所で飯を食ふだらう。その三ヶ月分をひとつ先拂ひして吳れ。」

「厭だ。」

サモイレンコは眼をぱちぱちさせて、眞赤になつた。彼は機械的に毒蟲の載つた本を引き寄せて、ぢつとそれを見た。やがて立ち上がつて帽子を取つた。フォン・コーレンは氣の毒になつて來た。

「まあせいぜいああいふ紳士と仲よくやつて行くさ」と動物學者は言つて、落ちてゐた紙片を忌々しげに隅の方へ蹴飛ばした、「君、そんなのは親切でも愛でも何でもない。弱氣だ、怠慢だ、害毒なんだ。折角理性が築いたものを、君のそのぐにやぐにやなやくざな心情がぶつ毀してしまふんだ。僕が中學生時代に腸チフスをやつた時、叔母さんが可哀相だと言つて蕈の酢漬を喰はして呉れた。お蔭で死ぬところだつたよ。叔母さんも君も、人に對する愛は心臓だの胃の腑だの腹だのにあつてはならぬ、そら此處にあるべきだといふことを辨へるんだね。」

フォン・コーレンは額をぽんと叩いた。

「持つて行き給へ」と彼は言つて、百ルーブル紙幣を抛り出した。

「何も君さう怒ることはないよ、コーリャ」とサモイレンコは紙幣を疊みながら穩やかに、「君の氣持はよく分かる。だが……僕の身にもなつて見て呉れ。」

「君は百姓婆あだ。それだけさ。」

補祭は噴き出した。

「ねえ、アレクサンドル・ダヴィードィチ。最後のお願ひだ」とフォン・コーレンは熱した口調で、「あの惡黨に金を渡すとき條件を附け給へ。令夫人を連れて發つか、それとも先に發たせるか。それを言はずに金を渡し給ふな。あんな奴に何も遠慮することはないんだ。さう言ふんだぜ。

もし言はなかつたら、僕は誓つて奴の役所へ押しかけて行つて、奴を階段から突き落してやる。君とも絶交だ。さう思つてゐて呉れ。」

「何だ、そんなことか。女と一緒に發つにしろ、女を先に發たせるにしろ、結句その方があの男にも好都合だらうぢやないか」とサモイレンコは言つた、「却つて喜ぶだらうよ。ぢや、さよなら。」

彼は愛想よく別れを告げて出て行つたが、後ろ手に部屋の扉を閉めようとしてフォン・コーレンを振り返り、怖ろしい顔をして言つた。

「君を臺無しにしたのは獨逸人だ。さうとも、獨逸人だ！」

一二

翌る日の木曜に、マリヤ・コンスタンチーノヴナは息子のコースチャの誕生祝ひをした。人々はお午のピローグ★に招ばれ、また晩にチョコレートに招かれた。その晩、ライェフスキイとナヂェージダがやつて來た時には、動物學者はもう客間に陣取つてチョコレートを飲んでゐた。

「君はもうあの男に話したのか」と彼はサモイレンコに訊いた。

「いや、まだだ。」

「必らず遠慮し給ふなよ。あの連中の厚かましいのには全く呆れるよ。ここの一家の人達が奴等の同棲生活をどんな眼で見てゐるかはよく承知でゐながら、平氣の平左でやつて來るんだから。」

「世間の奴等の偏見を一々氣にしてゐたら」とサモイレンコが言つた、「出ては歩けんことになる。」

「ぢや君は、世間が私通や不品行を擯斥するのを偏見だといふのか？」

「さうとも。偏見と憎悪さ。兵隊は尻の輕い娘を見ると笑聲を立てたり口笛を吹いたりする。だが訊いて見るがいい、彼等自身は一體どうだと。」

「いや、彼等の口笛は無意味ではない。娘達が私生兒を窒死させて徒刑地へ行く事實、アンナ・カレーニナがわれとわが身を汽車の下敷にした事實、田舍で門口へタールを塗る★といふ事實、君にも僕にもあのカーチャの純眞さが何故となく好ましく思へるといふ事實、何人にせよ清純な愛などはあるものでないとは知りながら尙且つ漠然とその要求を心に感ずるといふ事實——これらは果たして偏見だらうかね。いや君、これこそ自然陶汰を無事にくぐり拔けて來た唯一のものなのだ。もしも、兩性關係を調整するこの得態の知れぬ力がなかつたら、それこそライェフスキイの徒が時を得顏にのさばつて、人類は二年を出でずして退化してしまふだらう。」

ライェフスキイが客間にはいつて來た。一同と挨拶を交はし、媚びるやうな微笑を見せてフォ

ソ・コーレンと握手をした。やがていい折をつかまへて、サモイレンコに、

「濟まないが、アレクサンドル・ダヴィードィチ。君にちよつと話があるんだが。」

サモイレンコは立ち上がると彼の胴に腕を廻して、二人はニコヂーム・アレクサンドルィチの書齋にはいつた。

「明日は金曜だ……」と爪を嚙みながらライェフスキイが言つた、「約束のもの出來たかしら。」

「まだ二百十ルーブルしか出來ん。あとは今日明日の中に拵へる。安心してゐ給へ。」

「有難い！」とライェフスキイはほつと息をついて、嬉しさに兩手を顫はせた、「君のお蔭で助かるよ、アレクサンドル・ダヴィードィチ。神にかけて、僕の幸福にかけて、いや何でも君の好きなものにかけて、僕は着き次第返すことを誓ふよ。古い借金も返すよ。」

「ところで、ヴァーニャ……」と相手の釦をつかまへて赤くなりながらサモイレンコが言つた、「君の家庭のことに喙を容れるやうで濟まないが……なぜ君はナヂェージタ・フョードロヴナと一緒に發つてはならんのかね。」

「君も妙な男だな。そんなことが出來るものか。一人はどうしても殘らなくちやならんのだ。さもないと債鬼どもが喚き出すからな。何しろ方々の店を併せると少くも七百ルーブルは借りがある。まあ待ち給へ、金を送つて奴等の口を封じた上で、あの女にここを引き上げさせる。」

「成る程。……だが何故あの人を先に發たせないのかね。」

「飛んでもない、そんな事が出來るもんか」とライェフスキイは身顫ひをして、「あれは女ぢやないか。一人で行つて何が出來る、何が分かる？　ただ時間潰しと餘計な費用がかかるだけだ。」

『それも一理ある』――とサモイレンコは思つたが、フォン・コーレンとした會話を思ひ出すと、眼を落して不機嫌な調子で、

「僕にはさうは思へないな。あの人と一緒に發つか、あの人を先に發たせるか。さもなけりや……さもなけりや僕は金を貸すのは斷る。これが僕の最後の言葉だ。……」

彼は後退りをして扉にどしんと脊中でぶつかり、ひどく混亂して眞赤になつて客間に戻つた。

『金曜日……金曜日……』と、客間に歸りながらライェフスキイは考へた、『金曜日……。』

彼にもチョコレートが出た。熱いチョコレートで唇や舌を火傷したが、それでもやつぱり考へてゐた。

『金曜日……金曜日……。』

金曜日といふ言葉が、どうしたものか頭にこびりついて離れなかつた。金曜日のことしか考へられないのだが、しかも頭の中ではなく何處か心臟の邊で、土曜日には發てまいといふことだけがはつきり分かつてゐた。その彼の前に、几帳面な、兩鬢をきれいに撫で上げたニコヂーム・アレクサンドルィチが立つて、勸めるのだつた。

「ひとつ如何です、さあ、どうぞ……」

マリヤ・コンスタンチーノヴナは、お客にカーチャの通信簿を披露して、例の通り一言一言ひき伸ばしながら、

「當節はねえ、そりやもう學校が難しくなりましてねえ。課目も殖えます一方ですし……」

「あら、ママ！」とカーチャは、羞しさと褒め言葉の中で隱れ場所がなくなつて、怨むやうな聲を出した。

ライェフスキイも通信簿を眺めて、褒めた。修身、國語、操行、五點、四點★などの字が眼の中で踊りだし、それがみんな、附き纏つて離れぬ『金曜日』や、ニコヂーム・アンクサンドルィチの兩鬢の髮や、カーチャの眞紅な頰と一緒くたになつて、底無しのとても遣り切れぬ鬱陶しさとして押し寄せるのであつた。彼は危く悲鳴を上げさうになり、自分の心に訊いた。――『本當に、本當に俺は發てないのか？』

骨牌卓を二つつなぎ合はせて、一同は郵便ごつこをやることになつた。ライェフスキイも仲間にはいつた。

『金曜日……金曜日……』と彼は微笑を浮かべ、ポケットから鉛筆を取り出しながら考へた、

『金曜日……。』

彼は自分の陷つてゐる狀態をよく考へて見たかつたが、また考へるのが恐くもあつた。自分でも長いあひだ用心して眼をつぶつてゐた誤魔化しを、軍醫に見破られたと意識するのが怖ろしかつた。己れの將來のことを考へる時には、彼は必らず自分の思考に或る制限を加へて來た。汽車に乘る、汽車が出る——それで自分の生活の問題は解決だと考へ、それ以上は一切考へないことにして來た。時たまは彼の腦裡に、まるで遙か野の涯に見る微かな一點の火のやうに、遠い將來の何日かにはペテルブルグの何處かの横町で、ナヂェージダと手を切り借金を返すため、何か一つ小さな嘘を吐かなければなるまいといふ考へが、閃くことがあるにはあつた。だが嘘はただ一度きりで、それからは全く更生の生活に入るのだ。小つぽけなたつた一つの嘘で大きな眞實が購へるのだから、これはいい事ではないか。

それがいま軍醫の拒絶に逢つて、自分の誤魔化しが無殘にも圖星を指されて見ると、嘘の入用なのは何も遠い將來だけではなく、今日も明日も一箇月後も、いや恐らく生涯の終りまで入用なのだといふことが、分かつて來るのであつた。實際出發するには、ナヂェージダにも債權者にも上役にも嘘を吐かなければならぬ。それからペテルブルグで金を手に入れるには、もうナヂェージダとは手を切りましたと母親に嘘を吐かなければならぬ。しかも母親は五百ルーブル以上は出して呉れまいから、さう近々に軍醫に金を返せぬことになり、つまり既に軍醫を瞞したことになる。やがてナヂェージダがペテルブルグに出て來れば、手を切るために大小さまざまの詭計を用ひなければなるまい。そして又もや涙だ、倦怠だ、厭はしい生活だ、後悔だ、つまり更生の更の字もありはしないのだ。誤魔化し、あるのはそれだけなのだ。ライェフスキイの想像の中に、嘘の大山が盛り上がつた。小出しに嘘をつかずに一ぺんでそれを飛び越すには、斷乎たる手段をとらなければならぬ。例へば物も言はずに起ち上がつて帽子をかぶり、即刻一文無しで默つて出發しなければならない。しかしライェフスキイは、そんなことは出來ないと感じた。

『金曜日、金曜日……』と彼は思つた、『金曜日……。』

一同は手紙を書いて、それを二つに折つて、ニコヂーム・アレクサンドルィチの古シルクハットへ入れた。手紙が大分たまると、コースチャが郵便屋になつて、卓のまはりを配達して廻つた。補祭とカーチャとコースチャは、自分でも出來るだけ可笑しいことを書かうと頭をしぼつてゐたので、滑稽な手紙を受取ると有頂天になつて喜んだ。

『ぜひお話したいことがあります』とナヂェージダは手紙を讀んだ。そしてマリヤ・コンスタンチーノヴナと眼を見合はせると、相手は巴旦杏笑ひをして頷いて見せた。

『何の話すことがあるのかしら』とナヂェージダは思つた、『どうせ何もかもぶちまけられない

のなら、話して見たつて仕方がないわ。』

今晩お客に來る前、彼女はライェフスキイのネクタイを結んでやつたが、こんな何でもない事が彼女の心を優しさと悲哀とで一杯にしたのであつた。男の顏に浮かんだ狼狽の色、放心の眸、蒼白さ、この頃の彼に見られる不可解な變化、それのみならずネクタイを結んでやるときの彼女自身の手の顫へ――これら總べてが何故とはなしに、もう二人が一緒に暮らすのも長いことではあるまいと彼女に告げるのだつた。彼女は聖像を見るやうに、畏怖と後悔の眸で男を見て、『許して、許して……』と心に呟いた。卓子の丁度向ふ側にアチミアーノフが坐つてゐて、戀慕の黑眼をぢつと彼女から離さない。彼女は慾望に心が亂れ、さういふ自分を恥ぢ、また自分の憂愁にしろ悲哀にしろ、彼女が今日明日にも不純な情慾の俘になるのをとどめる力はあるまいと思ひ、自分はもう醉ひどれ女のやうに踏み堪へる力はないのだと思ひ、不安な氣持になるのだつた。

自分にとつても恥かしくライェフスキイにも不面目なこの生活を、これ以上つづけぬため、彼女はこの町を去らうと決心した。どうぞ自分を去かせて下さいと泣いて彼に賴んで見よう。もし彼が不承知なら、こつそり出て行つてしまはう。出來てしまつたことは一切彼には話すまい。せめて自分の思ひ出を男の胸に清らかなままで殘して置かう。

『戀しい、戀しい、戀しい』と彼女は讀んだ。これはアチミアーノフからである。

どこか片田舍に住んで稼がう。そしてライェフスキイには匿名で、お金や、刺繍をした肌着や、煙草を送らう。そして老境にはいつてから、或ひは男が重い病にでもかかつて看病する女が要るやうになつたとき、はじめて彼のところに歸ることにしよう。老人になつてやつと、どういふ譯で彼女が妻になることを拒み彼を棄てたかが分かつた時、男は彼女の犧牲を有難く思ひ、許して呉れるだらう。

『あなたの鼻は長いですね』――これはきつと補祭かコースチャからだらう。

ナヂェージダは、ライェフスキイと別れるとき男を強く抱きしめその手に接吻をして、あなたのことは一生死ぬまで思ひつづけると誓ふ自分の姿を想像した。それから片田舍の見も知らぬ人達の間に佗住居をして、自分には何處かに清らかな上品な高尚な一人の親友がゐる、自分について清らかな思ひ出を抱いてゐる愛する男があると、明け暮れ思ひつづける自分を心に描いた。

『今夜何處そこで逢はうと仰言らぬなら、私は神明に誓つて相當の手段をとります。それは決して紳士を遇する途でないことを、よくよく考へられたし』――これはキリーリンからだ。

一三

ライェフスキイは手紙を二つ貰つた。一つを開けて見ると、『發つのはおやめ、ねえ君』とある。

『誰がこんなことを書いたのだらう』と彼は考へた、『無論サモイレンコではない。……補祭でもない、あの男は俺の發たうとしてゐることを知らない筈だ。フォン・コーレンかな？』

動物學者は卓上にかがみ込んで、ピラミッドを描いてゐる。その眼が微笑を含んでゐるやうにライェフスキイには見えた。

『さてはサモイレンコが喋つたな……』とライェフスキイは考へた。

もう一つの手紙にも、やはりわざと筆蹟を崩した尾の長いくねくねした字で、『誰かさんは土曜日には發ちません』とあつた。

『詰まらんいたづらをする』とライェフスキイは考へた、『金曜日、金曜日……。』

何かが咽喉元にこみ上げて來た。彼はカラーに指を觸れて咳をした。が咳の代りに笑ひが咽喉をついて出た。

「ハ、ハ、ハ」と彼は笑ひ出した、「ハ、ハ、ハ。」——『何を笑つてるんだ』と彼は思ふ、「ハ、ハ、ハ！」

自分を抑へようと手で口を塞いで見たが、笑ひは胸や頸の根にこみ上げて來て、手で口を塞ぐどころではなかつた。

『だが何てまあ馬鹿げたことだ』と、笑ひこけながら彼は思つた、『俺は氣が違つたのかな？』

笑ひ聲はますます高くなつて、何だか狆の吠え聲に似て來た。ライェフスキイは立たうとしたが脚が言ふことをきかず、右の手は心にもなく卓上を妙な具合に跳ね廻つて、痙攣的に紙ぎれを捉へるとそれを握りしめた。人々の呆れたやうな眸や、サモイレンコの愕然とした眞顏や、冷やかな嘲笑と嫌惡に滿ちた動物學者の眸を認めると、彼はやつと自分がヒステリーにかかつたのだと覺つた。

『何といふ醜態、何といふ恥辱だ』と、涙が溫かく頰を傳はるのを感じながら、彼は思つた、『ああ、ああ、何といふ恥つ掻きだ。ついぞこんなことが起こつた例しはないのに……。』

すると、兩脇に手をかはれ、後頭を支へられて、何處やらへ連れて行かれた。そしてコップが眼の前にきらきらし、齒に當つて、水が胸にこぼれた。小さな部屋、眞中に寢臺が二つ並んで、淸らかな雪のやうに白い敷布（シーツ）で蔽はれてゐる。彼はその一つに倒れて號泣しはじめた。

「何でもない、何でもないよ……」とサモイレンコが言つてゐる、「よくある事さ……よくある事さ……。」

恐怖のあまり冷え切つてしまつて、總身をふるはせながら、何か怖ろしい豫感がしてならないナヂェージダは、寢臺の傍に立つて訊いてゐる。

「どうなすつたの？　何ですの？　後生だから仰言つてよ……。」

『キリーリンが何か書いたのぢやないかしら』と彼女は考へた。

「何でもないんだ……」と泣き笑ひをしながらライェフスキイが言つた、「向ふへ行つておいで……いい子だから。」

その顔には憎悪も嫌悪も現はれてゐない。して見ると彼は何にも知らないのだ。ナヂェージダは稍々安心して客間へ歸つた。

「ま、御心配遊ばしますなよ、あなた」とマリヤ・コンスタンチーノヴナが、隣へ坐つて彼女の手を取りながら言つた、「すぐに快くおなりですわ。男の方もやはり、私ども罪深い女と同じにお弱くいらつしやるのね。本當にお二人とも今が一番お辛い時ですわ……お察ししますわ。で、あなた、あのお返事はいかが？　お話を致しませうよ。」

「いいえ、お話は御免遊ばして……」とナヂェージダは、ライェフスキイの獻欷に耳を澄ましながら答へた、「あたくし、氣が鬱いでなりませんの。お暇させて頂きますわ……」

「まああなた、何を仰言るの」とマリヤ・コンスタンチーノヴナは驚いて、「私がお夜食も差上げずにお歸しするとお思ひになつて？　御一緒に頂きませう。それからならお引留めは致しませんわ。」

「あたくし氣が鬱いで……」とナヂェージダは呟いて、倒れまいと兩手で椅子の腕につかまつ

た。

「あれは驚風だよ！」とフォン・コーレンは客間にはいつて來ながら愉快さうに言つたが、ナヂェージダの姿を見ると間誤ついて出て行つた。

ヒステリーの發作が過ぎると、ライェフスキイは他人の寢臺に起き上がつて、考へた。

『恥つ掻きだ、女の子みたいに泣くなんて！　滑稽な唾棄すべき男に見えたに違ひない。裏口から出て行かう。……だが待てよ、それでは俺がヒステリーを重視したことになる。冗談にしちまふに限る……。』

彼は鏡を見、暫く坐つてゐて、それから客間へ出て行つた。

「この通り罷り出ました！」と彼は微笑して言つた。堪らぬほど恥かしかつたが、彼の出現が他人にも恥かしい思ひをさせてゐるのが感じられた。「よくあんな事があるので」と腰を下ろしながら、「坐つてゐると急にその、怖ろしい刺すやうな痛みを脇腹に感じるのです。……とても遣り切れん奴で、神經がもう參つちまつて……。で、まああんな馬鹿げた所をお目に掛けてしまひました。何せ一世を擧げての神經病時代で、致し方もない譯です。」

夜食になると彼は葡萄酒をやり、雜談を交はした。そして時々、まだ痛みの去らないのを見て下さいと言はんばかりに、痙攣的な溜息をして脇腹をさすつた。だがナヂェージダのほかには誰

一人本當にする者はなかつたし、彼もそれを知つてゐた。

九時を廻つてから一同は遊歩路へ散歩に出た。ナヂェージダは、キリーリンに話しかけられては大變だと思つて、いつもマリヤ・コンスタンチーノヴナと子供達の傍を離れないやうに氣を配つた。彼女は恐怖と氣鬱とで力も何も拔け果てて、熱の豫感に惱みながら、やつと足を運んでゐるのだつた。しかも家へ歸らうとしないのは、必らずキリーリンかアチミアーノフか、又は二人とも一緒に、ついて來るに極まつてゐるからだ。キリーリンは、ニコヂーム・アレクサンドルィチと並んで後から歩いて來た。そして小聲で歌つてゐた。

「われは戯れをゆーるさじ、われはゆーるさじ。」

遊歩路から茶亭の方へ折れ、海岸づたひに歩いた。そして海が燐光を發するのを長いあひだ眺めてゐた。フォン・コーレンは燐光の説明をはじめた。

一四

「さうさう、ヴィントの時間だつた。……みんなが待つてゐます」とライェフスキイが言つた、「失禮します、皆さん。」

「私も一緒に行くわ、待つてよ」とナヂェージダは言つて、彼の腕をとつた。

彼等は一同に別れを告げて立ち去つた。キリーリンも別れを告げ、同じ道だからと言つて二人と肩を並べた。

『どうせなるやうにしかならない……』とナヂェージダは思つた、『どうともなれ……。』

彼女は、厭な思ひ出がみんな頭の中から出て來て、暗闇のなかを自分と並んで歩きながら、苦しげな息づかひをしてゐるやうな氣がした。彼女自身はと言へば、インキの中に落ちた蠅のやうに、やつとのことで甃石道を這ひながら、ライェフスキイの脇腹や手を黑くよごしてゐるやうな氣がした。『もしキリーリンが』と彼女は考へた、『何か厭らしい眞似をしかけたとしても、惡いのは彼ではなくてこの私なのだ。だつて以前は、キリーリンのやうな口の利き方を自分に敢へてする男は一人もない時代もあつたのに、この私が自分でそれを糸みたいにぷつんと斷つて、取り返しのつかぬことにしてしまつたのだ。それが一體誰の罪だらうか？　自分の欲望に痴れ果てて、恐らく彼がみてくれのいい脊の高い男だつたばかりに、見も知らぬ男に微笑みかけ、二度の逢曳でうんざりして棄てた。さうまでされても』と彼女はいま考へるのだつた、『この男には、私に勝手な振舞ひをする權利がないといふのか？』

「ぢやあお前、僕はここで別れる」とライェフスキイは立ちどまつて言つた、「お前はイリヤ・ミハイルィチに送つてお頂き。」

彼はキリーリンに挨拶して急ぎ足で遊歩路を横切り、往來の向ふに窓をあかあかと見せてゐるシェシコーフスキイの家の方へ行つた。やがて木戸をぱたんと云はせる音がした。

「では事をはつきりさせて頂きませうか」とキリーリンは始めた、「私は子供ではありません、そんじよそこらのアチカーソフでも、ラチカーソフでも、ザチカーソフでもありません。……これは切に御注意を促して置きます。」

ナヂェージダは激しい動悸がしだした。彼女は何にも答へなかつた。

「あなたの私に對される態度の急激な變化を、私は最初媚態(コケトリイ)かと思つてゐました」とキリーリンは續けた、「今にして私は、あなたが單に紳士に對する態度を御存知ないのだと知りました。あなたはあのアルメニヤの少年と同じく、單に私をおもちやにしようと思はれたのだ。だが私は紳士です、そして紳士としての待遇を要求いたすのです。では、何なりと伺ひませう……」

「あたくし、氣が鬱いで……」とナヂェージダは言つて、しくしく泣き出した。そして涙を見せまいと顔をそむけた。

「私もやはり鬱いでをりますよ。だが、それだからどうなのです。」

キリーリンはちよつと默つてゐたが、やがてはつきりと一語づつ切りながら、

「繰り返して申しますが、奥さん、今夜もし逢つて頂けなければ、今夜のうちにも一騒動持ち

上げてお目に掛けますよ。」

「今夜はどうぞ失禮させて下さいまし」とナヂェージダは言つたが、あんまり悲しげな微かな聲だつたので、自分の聲とは思へなかつた。

「私はあなたを懲らさねばならん。……荒い言葉を使つて失禮ですが、どうしてもあなたを懲らさねばならん。左樣、遺憾ながらあなたを懲らさねばならん。今日と明日と、二回の會見を求めます。明後日はもうあなたは全く自由です。誰でも好きな人と何處へなりとお出でなすつて宜しい。今日と明日と。」

ナヂェージダはわが家の木戸まで來て、立ちどまつた。

「失禮させて下さいまし！」わなわなと顫へながら彼女は囁いた。眼の前の闇のなかに、白い制服のほか何一つ見えない。――「あなたの仰言る通りです、私はひどい女ですわ。……私が惡いのです。けど、どうぞ失禮させて下さいまし。……お願ひですわ……」彼女は男の冷めたい手に觸れて見て、びくつとして、「後生ですから……」

「嗚呼！」とキリーリンは歎息した、「嗚呼、しかしこのままお歸しする譯には參りませんな。私はただあなたを懲らしたいのだ、思ひ知らせたいのだ。それに、奥さん、私は女といふものを一向に信じませんのでな。」

「私、氣が鬱いで……」

ナヂェージダは單調な海の響きに耳を澄ました、星を撒き散らした空を見上げた。すると、何もかも早く切りをつけて、海だの星だの男だの熱の發作だのといふ、この呪はしい生の感覺から脱れてしまひたくなつた。……

「ただ私の家でないところでね……」と彼女は冷めたく言つた、「どこへなりと連れて行つて下さい。」

「ミュリドフの所へ行きませう。あすこが一番いい。」

「それは何處？」

「城址のすぐ傍。」

彼女は往來をずんずん歩いて行き、やがて山手へ向ふ横町へ折れた。暗かつた。甃石道にはところどころ、窓から射す蒼ざめた光の帶が落ちてゐて、それが彼女には自分が蠅のやうにインキの中へ落ちたり、また這ひ上がつて明るみに出たりするやうに思はれた。キリーリンは後からついて來たが、何かに躓いて危く倒れさうになり、そして笑ひだした。

『醉つてるんだわ……』とナヂェージダは思つた、『どつちにしたつて同じだわ、同じことだわ。……どうともなれ。』

アチミアーノフも間もなく一同に別れて、ナヂェージダの後を追つて行つた。舟遊びに誘はうと思つたのである。彼女の家まで來ると柵の間から覗いて見た。窓はすつかり開け放してあつたが灯影はない。

「ナヂェージダ・フョードロヴナ！」と彼は呼んだ。

一分ほど過ぎた。彼はまた呼んだ。

「誰方？」とオリガの聲がした。

「ナヂェージダ・フョードロヴナはおいでですか？」

「いいえ、まだお歸りになりませんよ。」

『をかしいぞ。……實にをかしいぞ』とアチミアーノフは激しい不安に驅られはじめながら思つた、『家へ歸つた筈だが。……』

彼は遊歩路から往來へかけてぶらぶら歩いて、やがてシェシコーフスキイの家の窓を覗いて見た。ライェフスキイは上衣を脱いで卓子に向ひ、一心に骨牌を睨んでゐる。

「をかしい、どうもをかしい……」とアチミアーノフは呟いたが、先刻のライェフスキイのヒステリーのことを思ひ出すと、極まりが悪くなつた。——「家にゐないとすると何處へ行つたんだらう、あの女は？」

彼はまたナヂェージダの住居(すまる)へ引き返して、眞暗な窓を眺めた。

『瞞したんだ、瞞したんだ……』と彼は、今日の晝ビチューゴフの所で一緒になつたとき、彼女の方から今晩の舟遊びを約束したことを思ひ出して、さう思ふのだつた。

キリーリンの家の窓も眞暗で、玄關際のベンチに巡査が居眠りをしてゐた。その暗い窓や巡査の姿を見たとき、アチミアーノフには一切が明瞭になつた。もう家へ歸らうと決めて歩き出したが、何時の間にかまたナヂェージダの住居の傍に來てゐた。そこのベンチに腰を下ろし、帽子を脱いだ。嫉妬と忿懣とで頭が燃えるやうなのを感じながら。

町の教會の大時計は、正午と夜半と一晝夜に二囘だけ時を打つ。大時計が夜半を報じて間もなく、せはしげな足音が聞こえた。

「ぢや明日の晩もまたミュリドフの所でね」とアチミアーノフが耳にしたのは、キリーリンの聲だつた、「八時ですぞ。ではまた。」

柵の傍にナヂェージダの姿があらはれた。ベンチに掛けてゐるアチミアーノフには氣づかずに、影のやうに前を通り過ぎると、木戸を開けて、後も締めずに家の中へ消えた。自分の部屋にはいつた彼女は蠟燭をともし、手早く着物を脱いだ。が寢床には入らずに椅子の前に膝をついて、椅子を兩手で抱くやうにして俯伏せになつた。

ライェフスキイの歸つて來たのは二時すぎだつた。

一五

一ぺんに嘘を吐(つ)かずに小出しに吐くことに決めて、ライェフスキイは翌る日の一時すぎに、サモイレンコの家へ出掛けた。どうしても土曜日に發(た)つてしまふため、金を貰ひに行つたのである。昨日のヒステリーのお蔭で、ただでさへ苦しくてならぬ氣持に鋭い羞恥の情までが加はつた今となつては、この町にとどまることはとても考へられぬ仕儀だつた。彼は考へた。――もしサモイレンコがあくまで例の條件を突張るやうだつたら、承知したと言つて金を貰はう。そして明日の出發の間際になつて、ナヂェージダが行くのは厭だと言つたことにすればいい。女の方は今夜一晩がかりで、萬事これはお前のためを思つてのことだと說きつける。萬一また、明かにフォン・コーレンに鼻柱を引き廻されてゐるあのサモイレンコが、金は一切出さんと言ふか、或ひは何か別の條件を持ち出すやうだつたら、俺は今日のうちにも貨物船かさもなければ帆船でもいい乘り込んで、ノーヴイ・アフォンかノヴォロシースク★へ行く。そこから母親へ電報で泣きついて、旅費を送つて呉れるまではそこを動かぬことにする。

サモイレンコの所に來て見ると、客間でフォン・コーレンと顏を合はせた。動物學者は今しが

た食事にやつて來たところで、例によつてアルバムを開けて、シルクハットの紳士や頭巾帽子の貴婦人を點檢してゐた。

『惡いところへ來た』と、彼を見てライェフスキイは思つた、『こいつがまた邪魔をしやがるぞ。』――「今日は。」

「今日は。」振り向きもせずフォン・コーレンは答へた。

「アレクサンドル・ダヴィードィチはゐますか？」

「ああ、臺所にね。」

ライェフスキイは臺所へ行つたが、サモイレンコがサラダに夢中なのを扉口から見ると、客間へ引き返して腰を下ろした。動物學者の前へ出ると彼はいつも氣詰まりを感じるのだが、今日はまた、例のヒステリーの話が出はしまいかとびくびく物だつた。一分の上も沈默の中に過ぎた。フォン・コーレンは急に眼を上げてライェフスキイを見、そして訊ねた。

「昨日のこと以來、具合はどうです。」

「實に宜しい」とライェフスキイは顏を赤くして答へた、「實際のところ、別に大したことはないんですからね。」

「昨日まで僕は、ヒステリーといふ奴は婦人に限るのかと思つてゐましたよ。だから初めは、

君が舞踏病に罹つたのかと思つた。」

ライェフスキイは迎合的な微笑を見せたが、心に思つた。

『何て無遠慮な物の言ひ方をする奴だ。俺の辛い氣持は百も承知なくせに。』……「ああ、飛んだお笑ひ草でね」と彼は相變らず微笑しながら、「今日は朝ぢう獨りで笑つてゐましたよ。ヒステリーの發作で奇妙なのは、馬鹿げたことは承知でゐて、腹の中では自分を笑ひながら、しかも泣けて仕樣がないことです。まあこの神經病時代にあつては、われわれは神經の奴隷なんですね。奴は僕等の主人で、僕等をしたい放題にするんですね。文明はこの點、却つて僕等に熊の親切をして呉れた譯ですね。……」

喋りながらライェフスキイは、フォン・コーレンが眞面目な顏をして一心に彼の言葉に聽き入り、まるで研究でもするやうに彼の顏を、注意深く瞬きもせずに見詰めてゐるのが、不愉快でならなかつた。のみならず、フォン・コーレンに好感を抱いてもゐないくせに、迎合的な微笑をどうしても面上から消すことの出來ぬ自分にも、腹が立つてならなかつた。

「だがしかし、實を言ふと」と彼は續けた、「あの發作にはそれ相應に根ぶかい近因もあつた譯です。最近ひどく健康がすぐれないのに、その鬱陶しさにかてて加へて、明けても暮れても金の苦勞です。……話相手もなし、共通の話題もなしね。全く縣知事の境遇よりみじめですよ。」

「さう、君の狀態は絶望ですね」とフォン・コーレンは言つた。

嘲笑ともつかず、賴みもせぬ豫言ともつかぬものを、裡に含んでゐるこの冷然と落ち着き拂つた言葉は、著しくライェフスキイの耳に障つた。彼は、嘲笑と唾棄の色に滿ちた昨夜の動物學者の眸を思ひ出し、暫く默つてゐたが、やがて微笑を收めて訊き返した。

「君は、どうして僕の狀態を御存知なんです？」

「たつた今君が自身で言はれたぢやないですか。それに君の友人達が君のことを大いに氣を揉んでゐてね、日がな一日君の噂で持ち切りといふ始末なんでね。」

「どういふ友人です？　サモイレンコですか？」

「さう、あの男もさうですね。」

「ぢや僕は、アレクサンドル・ダヴィードィチはじめ僕の友人なるものに、人の心配はいい加減にして呉れと賴みたいものですな。」

「ほら、サモイレンコが來た。ひとつその心配はいい加減にしろといふ奴を賴んで見給へ。」

「僕には分からない、どうして君がさう妙な物の言ひ方をするのだか……」とライェフスキイは呟いた。彼は、動物學者に憎まれ輕蔑され愚弄されてゐること、また動物學者が自己にとつて最も兇惡な不倶戴天の敵であることが、今はじめて分かつたやうな氣持がしたのである。——

「そんな物の言ひ方は、誰か他の人のために貯つて置かれたらいいでせう」と彼は小聲で言つた。憎惡がまるで昨夜の笑ひの衝動のやうに、もう胸や頸筋を壓迫して來てゐたので、大きな聲が出せないのである。

上衣をとつたサモイレンコが、臺所の溫氣に顏をかつかと火照らせて、汗だくではいつて來た。

「ああ、君來てゐたのか」と彼は言つた、「どうした、君。飯は濟んだかい？　遠慮せずに言つて呉れ、濟んだのか？」

「アレクサンドル・ダヴィードィチ」とライェフスキイは立ち上がりながら、「よしんば僕が、何か一身上の賴みを君に持ちかけたとしても、それは君が愼しみを忘れていいといふ事にはならんし、また他人の祕密を尊重せんでいいといふ事にもならんのだからね。」

「そりや何の話だ」とサモイレンコは眼を丸くした。

「金が無いなら無いで」と聲を高めて、興奮のあまり脚をのべつに變へながら、ライェフスキイは續けた、「貸して呉れないでもいいのだ、斷わつて呉れればいいのだ。それを何だつて、僕の狀態が絶望だの何だのと、橫町から橫町へ觸れ廻すことがあるんだ。一文のことを一兩のことでもしたやうに言ふ、そんな慈善や友情なら僕は眞平御免だ。そりや勝手に自分の慈善を自慢して歩くがいい、だが他人の祕密を明るみに出す權利は君にはない筈だ。」

「何の祕密だ」とサモイレンコは思ひ惑つて、そろそろ怒りだしながら訊いた、「喧嘩をしに來たんなら、歸つて呉れ。あとで來て貰はう。」

友達に腹が立つたら心の中で百かぞへろといふ格言を思ひ出し、彼は急いで數へはじめた。

「僕のことは一切心配しないで貰はうぢやないか」とライェフスキイは續けた、「僕のことは放つといて貰はう。僕がどうだらうとどんな生活をしようと、それが誰に何の關はりがあるんだ。成る程僕は發たうとしてゐる。成る程僕は借金だらけだ、酒も飲む、他人の女房と同棲してゐる、ヒステリー持ちだ、平凡な人間だ、誰かのやうに深遠な思想もない、だがそれが誰に何の關はりがあるんだ。人の人格を尊重し給へ。」

「ちよつと君、失敬だが」と三十五まで數へてサモイレンコが言つた、「しかし……」

「人格を尊重し給へ」とライェフスキイは構はずに、「しよつちう人のことを噫だとか嗟だとか噂ばかりしてゐるんだ。しよつちう人の跡を蹤け廻して、立ち聞きしてゐるんだ。それで友情が……ふん、聞いて呆れるよ。金は貸す、その代り條件がある、まるで子供扱ひだ。いやはやもう散々な目に逢つたよ。僕はもう何にも要らない！」興奮の餘りよろよろしながら、またヒステリーが起きたのぢやないかと不安になりながら、ライェフスキイは叫んだ。『すると土曜日は發てないぞ』といふ考へがさつと閃いたが、「僕はもう何にも要らない！　ただどうぞ、後見を解除して呉れ。僕は子供でも氣狂ひでもないんだ、その監視を解いて呉れ。」

補祭がはいつて來た。が、眞蒼な顏をして兩手を振りながら、ヴォロンツォフ公の肖像に向つて妙な演說をしてゐるライェフスキイを見ると、扉口に棒立ちになつた。

「僕の氣持をしよつちう穿鑿するといふことは」とライェフスキイは續けた、「取りも直さず僕の人格に對する侮辱だ。故に僕は素人探偵諸君に向つて、そのスパイ行爲の停止を切願する。もう澤山だ。」

「何だと……いや、君はいま何と言はれたか？」百まで數へ切つたサモイレンコは、滿面に朱をそそいで詰め寄つた。

「澤山だ」とライェフスキイは息をはずませ、帽子を取りながら繰り返した。

「僕はロシヤの軍醫だ、士族だ、五等官だ！」サモイレンコは一語づつ切りながら、「スパイをやつたことは未だ曾てないぞ。この俺を侮辱することは何人にも許さん！」と聲を顫はせ、最後の一語に力を入れて呶鳴つた、「默れ！」

補祭はまだ一度も、こんなに堂々と威張り返つて、滿面に朱を注いだ怖ろしい軍醫を見たことがなかつたので、口に手を當てて玄關へ逃げ出し、腹をかかへて笑ひころげた。霧を通してでも見るやうにライェフスキイの眼には、フォン・コーレンが立ち上がり、ズボンのポケットに兩手

を突つ込んで、まるでその先を待ち設けるやうな姿勢をとつて、立ちどまるのが映つた。落ち着き拂つたこの姿勢が、ライェフスキイにはこの上もなく横柄な侮蔑的なものに見えた。

「あの言葉は取消して貰はう！」とサモイレンコは喚いた。

ライェフスキイはもう、何を自分が口走つたのか覺えがない。で、答へた。

「僕に構はないで呉れ給へ。僕は何にも要らないんだ。僕の欲しいのは、君や猶太系獨逸移民に、構つて貰ひたくないことだけだ。さもないと僕にも覺悟がある。戰ひも敢へて辭すまい。」

「これで話が分かつた」と、卓子の向ふ側から出て來ながらフォン・コーレンが言つた、「ライェフスキイ氏は當地を發つ前に、ひとつ氣晴らしに決闘をして行かうと言はれるのだ。僕は氏の望みを叶へて上げよう。ライェフスキイ氏、僕は君の挑戰に應じる。」

「挑戰？」とライェフスキイは、動物學者に近寄つて、憎悪の眸をその淺黒い額や縮れ髪に注ぎながら、小聲でいつた、「挑戰？　よろしい。僕は君を憎む！　憎む！」

「大いに愉快だ。明日の朝早目に、ケルバライの店の附近。條件は一切君に任せる。が今は歸つて呉れ給へ。」

「僕は君を憎む」と苦しさうに息をつきながら、ライェフスキイは低く言つた、「ずつと前からのことだ。決闘！　いいとも。」

「この男を撮み出して呉れ、アレクサンドル・ダヴィードィチ、さもなきや僕が出て行く」とフォン・コーレンが言つた、「今にも咬みつきさうだ。」

落ち着いたフォン・コーレンの調子が、軍醫の熱を冷ました。何かの拍子でふと自分に返ると、はつとして、兩手でライェフスキイの腰を掴まへ、動物學者の傍から引き離しながら、興奮に顫へる優しい聲で呟くのだつた。

「なあ、君達……君達はいい人なんだ、本當にいい人なんだ。……少し激し過ぎただけだよ、もういい……もういいよ。なあ君達。……」

物柔らかな友情の籠もつた聲を耳にするとライェフスキイは、自分の生活に今の今、何かしらこれまでに無かつた異樣な出來事、まるで汽車に轢かれかかつたやうな事件が、起こつた所だと感じた。彼は泣き出しさうになつて片手を振ると、一散に部屋から駈け出した。

『わが身を他人の憎悪の實驗臺にする、俺を憎んでゐる人間の前に、みじめな卑しい賴りない姿をさらす――ああ何て情ないことだ！』暫くたつて、茶亭（パヴィリオン）の椅子に坐つた彼はさう思ふのだつた。今しがた身を以て味つた他人の憎悪のため、まるで身體が錆だらけになつたやうな氣がした。

『ああ、何て野蠻なことだ！』

コニヤックを入れた冷たい水が彼を元氣づけた。傲然と落ち着き拂つたフォン、コーレンの顔

や、昨夜の眼附や、絨毯みたいなシャツや、聲や、白い手やがはつきりと心に浮かび、重苦しい燃えるやうな憎念の餓鬼が胸の中をのた打ち廻つて、復讐を強請むのであつた。空想のなかで彼はフォン・コーレンを地面に叩きつけて、兩足で踏んづけはじめた。起こつた事柄が隅の隅まですつかり思ひ出され、何故あんな下らん人間に追從的な笑顔が見せられたのか、いやそれよりも、一體この地圖にも恐らく出てゐず、ペテルブルグで相當な人間と言はれる人なら誰一人知つてはゐまいと思はれるこんな吹けば飛ぶやうな町の、名もない小つぽけな連中の言ふことを何故尊重できたのか、われながら不思議な氣がした。この小汚ない町が突然陷沒したところで、丸燒けになつたところで、その新聞電報をロシヤの人々は、古家具の入札廣告と同じ退屈さで讀むだけだらう。明日フォン・コーレンを殺さうが生かして置かうが、どちらにしたつて同じく何の益も興味もないことだ。足か手を狙つて怪我をさせ、せせら笑つてやらう。それから彼が、脚を挽がれた昆蟲が草の中をまごまごするやうに、お手前同樣下らん連中の中を疼くやうな惱みを背負つて迷ひ歩く所を見てやらう。

ライェフスキイはシェシコーフスキイの所へ行つて、事情をすつかり話し、介添人になつて吳れと賴んだ。それから二人で郵便局長の所へ行き、彼にも介添人になつて貰つて、そのまま夕食に居坐つた。食事中は大いに冗談が飛び大いに笑ひ合つた。ライェフスキイは、てんで射擊の心

得のない自分を嘲つて、王樣の射手だのヴィルヘルム・テルだのと呼んだ。

「あの紳士ひとつ思ひ知らしてやらにやならん……」と彼は何度も言ふのだつた。

夕食が濟むと骨牌の卓を圍んだ。ライェフスキイは骨牌をやり、葡萄酒をやり、一方色んなことを考へてゐた。一體決鬪といふ奴は、問題を解決するどころか却つて紛糾させるに過ぎんから、愚劣且つ無意味な代物だ。だが時には無いと困る場合もある。例へば今の場合、フォン・コーレンを治安判事に訴へる譯にも行かんではないか。それに今度の決鬪の有難いのは、その後ではどうあつてもこの町に居る譯に行かなくなることだ。彼はほろ醉ひ機嫌になり、骨牌に夢中になり、いい氣持だつた。

けれど日が沈み暗くなつて來ると、不安な氣持に襲はれだした。食事中も骨牌をやつてゐる間も、どういふ譯かこの決鬪は無事に終るといふ確信が頭を去らなかつた所を見ると、これは死に對する恐怖ではない。それは、明日の朝早く彼の生活に初めて起こるべき未知の何物かに對する恐怖、また近づきつつある夜に對する恐怖であつた。……その夜が長い不眠の夜であらうこと、それに考へごとも、フォン・コーレンや彼の憎惡のことばかりではなしに、差し迫つて是非越さねばならぬ嘘の山、越さずに濟ます力も方策も自分にはないその山のことも、考へねばなるまいことは目に見えてゐた。彼はまるで急病にでも罹つたやうだつた。卒然として骨牌や話相手に興

味を失ひ、そはそはしだし、もう歸らせて呉れと言ひ出した。一刻も早く床に横になつて、ぢつと動かずに、來たるべき夜に備へる心構へがしたかつたのである。シェシコーフスキイと局長は送つて出て來て、決闘の打ち合はせにフォン・コーレンの家へ向つた。

わが家の傍まで來たライェフスキイは、アチミアーノフに出逢つた。青年は息を切らして興奮してゐる。

「僕はあなたを捜してたんです、イヴァン・アンドレーイチ！」と彼は言つた、「どうか直ぐ來て下さい。……」

「何處へ？」

「あなたの御存知の紳士が、お目に掛かりたいと言つてゐます。非常に重大な用件があるさうです。一分間でいいから是非お出でを願ひたいと言つてゐます。何かお話しなければならんことがあるらしいんです。……その人にとつて生死の問題らしいんです。……」

興奮のあまりアチミアーノフは酷いアルメニア訛りで喋つたので、『生死』が『シェイ死』と聞こえた。

「一體それは誰です？」ライェフスキイは訊いた。

「名は言はんで呉れと頼まれたんです。」

「僕は今忙しいと言つて呉れないか。もしよかつたら明日……」

「どうしてそんな事が！」アチミアーノフは眼を丸くして、「その人は、あなたにとつてとても重大な話があると言つてるんですよ。……とても重大な！　もしいらつしやらないと、取返しのつかぬ不幸が起こりますよ。」

「妙だな……」とライェフスキイは呟いた。何故アチミアーノフがさう興奮してゐるのか、またこの退屈な誰にも入用のない町に生じ得る祕密とは一體何か、さつぱり腑に落ちない。「妙だな」と迷ひながらもう一度言つて、「とにかく行つて見よう。どつちみち同じことだ。」

アチミアーノフは大急ぎで先に立つた。彼は追つて行く。通りに出て、やがて横町へ曲がる。

「くそ面白くもない」とライェフスキイが言つた。

「もう直ぐ、直ぐです。……ぢきそこなんです。」

城址の近くで、柵で圍つた空地と空地の間の細い路を拔け、とある大きな構への中にはいつて、一軒の小さな家に足を向けた。……

「あれはミュリドフの家ぢやないか」とライェフスキイが訊いた。

「さうです。」

「ぢや何故裏から廻るんです、僕には分からんな。通りからだつて行ける。その方が近いんだ

ぜ……。」

「いいんです、いいんです……」

ライェフスキイは益々變だと思つた。アチミアーノフは裏口へ案内して、もつと靜かに默つて

と言ふ風に、手を振つて見せるのである。

「ここです、ここです……」とアチミアーノフはそつと扉をあけて、爪先を立てて裏廊下には

いりながら言つた、「靜かに、靜かに、お願ひです……聞こえると困るんです。」

彼は聽き耳を立て、苦しげに息を繼ぐと、ひそひそ聲で言つた。

「この扉を開けておはいりなさい。……平氣です。」

ライェフスキイは躊躇(ためら)ひながら扉をあけてはいつた。天井の低い部屋で、窓には窓掛(カーテン)が下ろしてある。卓子に蠟燭が一本立つてゐる。

「何用だ?」と次の部屋で聲がした、「君、ミュリトカか?」

ライェフスキイがその部屋を振り向くと、キリーリンの姿が見えた。その横にはナヂェージダが。

何を言はれたのか耳にはいらなかつた。後退りをすると、どうして通りへ出たかも覺えがなかつた。フォン・コーレンへの憎惡も不安も、胸から消え失せてしまつた。歸りながら彼は右手を

不器用に振り、足下にぢつと眼をつけて平らな所を選つて行つた。歸つて書齋にはいると、兩手をこすり、脊廣やシャツが窮屈かのやうに肩や頸をひくつかせながら、隅から隅へ一往復したが、やがて蠟燭をとぼして卓(つくゑ)に向つた。

一六

「君の言ふ人道學なるものは、その進展の過程に於いて精密科學と一致し、それと相並んで進む場合にはじめて、人類思想を滿足することになる譯だ。この兩者の一致が顯微鏡の下で行はれるか、新しきハムレットの獨白に於いてであるか、それとも新宗教としてであるかは僕は知らん。だがさうなるより先に、地球が氷の層で蔽はれてしまふだらうと僕は思ふね。あらゆる人道的な學問のなかで最も堅固で生命のあるのは、いふまでもなくキリストの教へだ。だが見給へ、それですらいかに解釋が區々(まちく)であることか。或る連中は凡ての隣人を愛せよと教へる。しかも兵隊と犯罪者と狂人は例外とする。すなはち第一の者は戰爭で殺してもいいとし、第二の者は隔離し或ひは死刑にしていいとし、第三の者には結婚を禁ずる。また或る解說者は、凡ての隣人を例外なしに、正(プラス)・負(マイナス)の差別なしに愛せよと教へる。彼等の教へによると、もし結核患者なり殺人犯なり癲癇持ちなりが來て君の娘を吳れといつたら、遣(や)れといふことになる。クレチン病の白痴が心

身ともに健全な人間に戰を挑んできたら、首を差しだせといふことになる。この愛のための愛の說教は、藝術のための藝術と同じく、萬一勢力を得ようものならとどのつまりは人類を全滅に導き、かくて開闢以來空前の壯大きはまる罪惡が成就されるに相違ない。解釋は實に澤山あるが、さて澤山あるとなると眞劍な思想者はその孰れにも滿足しえないで、種々雜多な解釋の上にさらに自己の說を加へることを急ぐだらう。さういふ譯だから、君の話のやうに問題を決して哲學的基礎、或ひは所謂キリスト教的基礎の上に置いてはならんのだよ。さうすれば君は、徒らに問題の解決から遠ざかるばかりだ。」

補祭は動物學者の言葉にぢつと聽き入つてゐたが、暫く考へてから訊いた。

「道德律といふものはどんな人間にも生まれつき具はつてゐるものだが、あれは哲學者が考へ出したものでせうか、それとも神が肉體と一緒に創造られたものでせうか。」

「知らないね。しかしその律が、あらゆる民族及び時代を通じて頗る共通性があるところを見ると、どうやら僕には、それが人間と有機的に結合してゐるものと認むべきもののやうに思はれるな。あれは考へ出されたものぢやない、現にあり、將來もあるものだ。僕は何も、今にそれを顯微鏡にかけて覗ける時が來るなんて言ふんぢやないよ。ただその有機的結合については、既に見證的に證明が出來ると言ふのだ。つまりだ、重い腦の疾患と所謂精神病の一切は、僕の知つて

ゐる限りでは何よりも先づ最初に、道德律の倒錯となつて現はれるね。」

「分かりました。するとかうですね、胃の腑が食物を要求すると同樣に、道德感は隣人を愛することを要求するとね。さうですね？　ところが僕等の天性には利己心といふものがあつて、良心や理性の聲に反抗して、そのため色んな頭の痛くなるやうな問題が起こるぢやありませんか。哲學的基礎の上に問題を置いちやならんと仰言ると、この解決は一體誰に賴んだらいいんでせうね？」

「われわれの所有してゐる少量の精密科學の知識に賴るんだね。見證と事實の論理とを信じるんだね。そりや寥々たるものには違ひないさ。がその代り、哲學みたいに土臺のぐらぐらな模糊たるものぢやない。假りにまあ、道德律が人間を愛せよと要求するものとしよう。構はんぢやないか。愛はすなはち、あれこれの遣り口で人類に害を及ぼし且つ現在及び將來に人類の禍根となるべきものを、一掃することにある筈だ。われわれの知識及び見證は、人類の脅威は精神的肉體的に常軌を逸したる者から來ると告げる。果たしてさうなら、その異常者と鬪へばいいぢやないか。彼等を正常にまで高めてやる力が君に無いとしても、彼等の毒を拔く、つまり絕滅する位の力と腕ならあるだらう。」

「すると、强者が弱者を征服する所に愛があるんですね。」

「確かにね。」

「しかし、强者はわれらが主イエス・キリストを十字架につけたぢやありませんか！」と熱した口調で補祭は言つた。

「つまりそこなんだが、彼を十字架につけたのは强者ぢやなくて實は弱者なんだよ。人類文化は生存競爭や自然陶汰の勢を殺いだし、また現にそれを零に近づけようとしてゐる。そこで弱者の急激な增加となり、彼等が强者を壓倒することにもなるんだ。まあ考へても見給へ、もし現在の未熟且つ發育不完全な形態に於ける人道的思想を、蜜蜂にうまく吹き込んだとしたら、どんなことになるだらうね。殺されねばならぬ雄蜂は生き殘つて、蜜を食ひ盡くす、働蜂を墮落させ絞め殺す——結局は弱者が强者を壓倒して、後者の退化となる。全く同じ現象が今や人類にも起こりつつあるのだ。すなはち弱者が强者を壓迫してゐるのだ。まだ文化に接觸したことのない野蠻人にあつては、最も强く賢く最も道德的な者が、先頭に立つて行くのだ。彼が酋長であり君主である譯だ。ところがわれわれ文化人はどうだ。キリストを十字架につけ、なほ現に續々とつけつつあるのだ。つまりわれわれには何かしら缺陷がある證據だ。……この『何か』を取り戻さなければならん。さもない限り、この謬見のやむ時はあるまい。」

「だが、どんな標準で强者と弱者を別けるのです？」

「知識と見證とさ。結核患者や癩癧患者はその病狀を見れば分かる。悖德漢や狂人はその行狀を見れば分かる。」

「でも、間違ふこともあるぢやありませんか。」

「さう。しかし洪水が來ようといふ時、足の濡れるのを心配するには及ぶまい。」

「そりや哲學だな」と補祭は笑ひ出した。

「そんなことはない。君は餘りに神學校的哲學に毒されてゐるものだから、何事にもただ霧だけを見ようとするのさ。現に君の頭に一杯に詰まつてゐる抽象學にしたつて、君の智を見證から抽き出して來るものだからこそ抽象と稱せられるのだ。惡魔の眼を眞向から直視したまへ、でもしそれが惡魔だつたら、これは惡魔であるとさう言ひ給へ。說明を搜しにカントやヘーゲルの所へ駈けつけることはないんだ。」

動物學者はちよつと言葉を切つて、また續けた。

「二に二を掛ければ四だ。石はすなはち石だ。明日は決闘がある。それは愚かで不合理なことだとか、決闘はもう時代遲れだとか、決闘は一見貴族趣味ではあるが、本質的には醉漢が居酒屋でやる喧嘩と何等異る所はないとか、まあそんなことを君と僕がここでいくら氣焰をあげたところで、やつぱり僕等は思ひ止まらんだらう、出掛けて行つて闘るだらう。すなはち、われわれの

推論よりも力強い或る力が存在するんだ。われわれは常々聲を大にして、戰爭は追剝だ、蠻行だ、戰慄だ、兄弟殺しだと叫ぶ。われわれは失神せずして血を見ることは出來ない。しかしだ、フランスやドイツが一度でもわれわれを凌辱したら最後、われわれの士氣は忽ちにして揚がり、實に心底からのウラーの叫びを上げて敵陣に突進するのだ。君等はわれわれの武器の上に神の祝福を祈り、われわれの勇敢は國を擧げての心からなる熱狂を喚び起こすだらう。再びすなはち、吾々及び吾々の哲學よりも高所に在るのではないとしても、少くもそんなものよりも力強い或る力が存在するんだ。われわれがそれを阻止することの出來ないのは、そらあの海の向ふから湧いて來る黑雲をとどめる力がないのと同じなのだ。僞善はよし給へ、その力に向つて腹の中で舌を出すのはやめ給へ、『何て愚劣だ、何て時代遲れだ、何て聖書に悖つたことだ！』などとぶすくさ言ふのは止めにし給へ。それよりかその力をまともに直視して、その合理的な正當さを認めたまへ。そして例へばその力が、虛弱で癩癧やみで淫蕩な種族の絕滅を欲するなら、曲解された福音書からでつち上げた君の丸藥や引用句でその邪魔をし給ふな。レスコフ★の書いたものに、律氣者のダニーラが町の外で癩病やみを見附け、愛とキリストの名に於いて彼に食物を與へ、また溫めてやるといふのがある。もしこのダニーラにして眞に人間を愛するのだつたら、恐らくはその癩病やみを町からもつと遠い所へ引きずつて行き、濠の中へ拋り込んだだらうよ。そして自分は健全な人々に奉仕することにしただらうよ。キリストの說いた愛とは、願はくは合理的な、意味のある、有益なものだつたと思ひたいね。」

「あなたは何て人だ」と補祭は笑ひ出した、「キリストを信じてもゐない癖に、なぜさう度々引き合ひに出すんです。」

「いや、僕は信じてゐる。ただそれが、無論君流にではなく僕流なだけだ。ああ、補祭君、補祭君！」と動物學者は笑ひ出し、補祭の腰を抱いて愉快さうに、「で、どうだい。明日は決闘へ行かうね。」

「職務上困りますね。でなけりや行くけど。」

「何だい、その職務つて言ふのは？」

「僕は僧職にある者です。僕には天惠があるんです。」

「ああ、補祭君、補祭君」とフォン・コーレンは笑ひながら繰り返した、「だから君と話をするのが大好きなのさ。」

「あなたは今、信仰があると言ひましたね」と補祭が言つた、「一體どんな信仰です。僕の叔父に僧侶になつてゐるのがあるんですが、その信仰といつたら、旱魃のとき野原へ雨乞ひに行きますね、すると歸りに雨に濡れない用心に必らず雨傘と皮外套を持つて行くんですよ。これが本當

の信仰です。この人がキリストの話をするときは、からだから後光が射して、百姓爺さんも婆さんもおいおい泣き出すんですよ。あの人ならあの雨雲をとめる事も出來ませうし、あなたの言ふその力だつて追つ拂つてしまふでせうよ。さうですとも。……信仰は山をも移す。」

補祭は笑ひ出して、動物學者の肩を叩いた。

「全くですよ……」と彼は續けた、「現にあなたは始終研究ばかりしてゐる、海の奥祕を探り、強者と弱者を分類し、書物を著はし、決闘を挑んでらつしやる。だがそのため別に世の中が變りもしない。が御覽なさい、何處のよぼよぼ爺さんが聖靈に感じて、一言もぐもぐとやるか、或ひはまたアラビヤから新しいマホメットが半月刀を振りかざし駒を飛ばして現はれたら、何もかも一どきに引くり返つて、ヨーロッパにはそれこそ滄桑の變が來ませうよ。」

「さうさう、補祭君、天に熊手でさう書いたつたつけな。」

「仕事を伴はぬ信仰は死物だ。が、信仰を伴はぬ仕事はもつと惡い。ただ時間つぶしにしかならないんです。」

海岸通りに軍醫が現はれた。補祭と動物學者の姿を見ると、こつちへやつて來た。

「どうやらこれで用意はいいよ」と彼は息を切らしながら言つた、「介添人にはゴヴォローフスキイとボイコがなる。朝五時に來て呉れる筈だ。こりやあ、すつかり曇つちまつたな」と空を仰いで、「何にも見えやしない。ひと雨來るな。」

「君も來て呉れるんだらうね」とフォン・コーレンが訊いた。

「いや、僕はひとつ堪忍して呉れ。この通りくたくたなんだ。代りにウスチモーヴィチが行つて呉れる。もう話をして置いた。」

遠い海上で稲光りがした。雷鳴が陰にこもつて轟いた。

「夕立前の蒸暑さつたらないな！」とフォン・コーレンは言つた、「何なら賭をしてもいい、君はもうライェフスキイの所へ出掛けて、奴の胸にすがつて泣いて來たらう。」

「あの男の所へなんか行く譯がないぢやないか」と軍醫はどぎまぎして答へた、「まだそんなことを言ふ！」

實は日の沈む前、ライェフスキイに逢へはしまいかと思つて、遊歩路や通りを二三度ぶらつい て見たのである。カッと逆上せた自分も恥かしかつたし、またそのすぐ後で、思ひ出したやうに急に親切になつた自分も恥かしかつた。彼は冗談のやうにしてライェフスキイに詫まつて、意見もし宥めてもやりたかつたのだ。そしてまた、決闘は中世の蠻風の遺物ではあるが、攝理そのものが二人の和解の手段として決闘を指し示したのであること、といふ譯は、ともに立派な人物であり非常な秀才である二人は明日銃丸の遣り取りをした後で、きつとお互ひの眞價をさとつて、

仲のいい友達になるだらうから――とも言つてやりたかつたのだ。しかしライェフスキイには到頭逢へなかつた。

「あの男のところへなんか行く譯がないぢやないか」とサモイレンコは繰り返した、「僕があの男を侮辱したんぢやない、あの男が僕を侮辱したんだ。君ひとつ教へて呉れ、何だつてあの男は僕に突つ掛かつて來たんだ。何の悪いことを僕がしたと言ふんだ。客間へはいつて行く、途端に頭からスパイ呼ばはりだ。全くいやはやさね。おい教へて呉れ、そもそも事の起こりは何だ。君は何を言つたんだ。」

「君の狀態は絶望だねと言つたのさ。さうに違ひないもの。一體どんな窮境からでも脱し得る人間は、正直者か騙兒(かたり)かに極まつてゐる。正直者で同時に騙兒でありたいと望むやうな人間には、出口は無いものだ。ところで諸君、もう十一時だよ。明日は早起きだからね。」

突然、風が吹き起こつた。海岸通りの砂塵を上げ、それに旋風(つむじ)を卷かせ、ごおつと唸つて潮騷の音を消した。

「疾風(はやて)だ！」と補祭が言つた、「早く行かないと、眼があいてられなくなる。」

歩きだしたとき、サモイレンコは制帽を抑へながら、溜息をついて言つた。

「とても今夜は寝られさうもないなあ。」

「心配し給ふなよ」と動物學者は笑ひだして、「安心してるんだね、決闘はまづ無事に終了さ。ライェフスキイは鷹揚に空を射つだらうよ、奴にはその他(ほか)に遣り方もないしね。僕はまあ全然射たんつもりだ。ライェフスキイなんぞのために裁判に掛けられて時間を潰すのは、全く間尺に合はんからね。時に決闘はどんな罪になるのかね。」

「拘留さ。が相手が死んだ場合には、三年以下の要塞禁錮だ。」

「要塞つてペトロパーヴロフスク★のかね。」

「いや、たしか陸軍のだと思つた。」

「だがあの先生、ひとつ懲りさせてやる方がいいんだが。」

背後(うしろ)の海の上で稻光りがして、一瞬間家の屋根や山並みを照らし出した。遊歩路の近くで三人は別れた。軍醫の姿が闇に消えてもう足音も聞こえなくなつた時、フォン・コーレンが叫んだ。

「明日は天氣に邪魔されたくないなあ！」

「さあ、どうかなあ。天氣にしたいもんだが。」

「おやすみ！」

「すみがどうしたつて？　何と言つたのかよお。」

風と潮騷とそれに雷鳴とで、よく聞きとれなかつた。

「何でもないよ！」動物學者はさう叫んで、家へ急いだ。

一七

……愁ひにしづむ私の胸に
くるしい思ひがむらがつてゐる、
思ひ出は言もなく私のまへに
長い卷物をくりひろげる。
かくて味氣なく來しかたの生を讀み
私はをののき私はのろふ、
いたく歎き　にがい涙を灑いでも
哀しい文字は洗ふすべもない。

——プーシキン

明日の朝よし殺されるにせよ、または命を助けられて笑ひ物にされるにせよ、どつちみち自分は破滅だ。生き恥を曝したあの女も、絶望と羞恥とから自殺をしようと、慘めな生をつづけよう

と、いづれにせよ破滅したのだ。……

その夜遲くライェフスキイは卓の前に坐つて、相變らず手をこすりながら、さう思つた。窓が不意にばたんと開いて、どつと風が室内へ吹き入り卓上の紙を飛ばした。ライェフスキイは窓をしめて、床の上の紙を拾はうと身を屈めた。自分の身體に何か新しい感じ、今までになかつた一種のぎごちなさが感じられて、何だか自分の動作ではなく、他人の動作のやうな氣がした。肘を張り肩をひくつかせながら、おづおづと歩いてゐたが、やがて卓に坐るとまた手をこすりはじめた。身體が柔軟性を失つてしまつたのだ。

死の前夜には近親に宛てた手紙を書かなければならぬ。ライェフスキイはそれを忘れずにゐた。彼はペンをとると顫へる字で、

『お母さん』と書いた。

あなたの信じていらつしやる慈悲深い神の御名によつて、私に辱かしめられた孤獨で貧しく弱い不幸な女に隱れ家を與へ、優しくいたはつてやつて下さい、女が過ぎし日の一切を忘れ且つ赦して、その犧牲でもつてあなたの息子の犯した怖ろしい罪を、せめて幾分なりと贖ふやうにさせて下さい——と書くつもりであつた。しかし、母親がでぶでぶと肥つた老婆で、レースの頭巾をかぶり、朝になると狆を連れた居候女を從へて庭へ下りて、がみがみと園丁や召使に物を言ふと

ころや、その傲慢で横柄な顔附を思ひ浮かべると、いま書いた字を消してしまつた。

三つある窓の全部に、さつと稲妻がひらめいた。耳を聾するばかりの長い雷鳴がそれにつづいた。はじめは陰に籠もつた鈍い響きであつたが、やがて爆ぜるやうな轟きに變つて、窓の硝子がびりびり鳴るほどの烈しさになつた。ライェフスキイは立ち上がると窓に寄つて、額を硝子に押しあてた。戸外は荒れ狂ふめざましい雷雨だつた。水平線では稲妻が白い條をなして絶え間なく黑雲から海へ放射され、沖一面に黑い濤のうねりを照らし出した。右にも左にも恐らくは屋根の上にも、閃々と稲妻が光つた。

「雷雨だ」とライェフスキイは囁くやうに言つた。誰かに、何かに祈りたい氣持だつた。稲妻にでもいい、黑雲にでもいい。——「ああお前、雷雨！」

昔のことが思ひ出された。彼は雷雨になると、何もかぶらずに庭へ駈け出す子供だつた。すると明るい髪の青い眼をした娘が二人、あとから追つて來て雨に濡れる。彼等は喜んできやつきやつと笑ふ。が、恐ろしい雷様の音がすると、娘達は子供の彼を頼りにして抱きついて來る。そこで彼は十字を切つて大急ぎで『聖なる、聖なる、聖なる……』と唱へる。ああ、お前達は何處へ行つたのだ、どこの海に溺れてしまつたのだ、あの美はしい清らかな生活の芽生えは？　今はもう雷雨も恐くはない、自然も愛しはせぬ、神もない。曾て知り、彼の胸に纏つて來て呉れた娘達

も、みんな彼や彼の同年者達のために身を滅ぼした。生涯のあひだ、自分の生活の庭に一本の若樹も植ゑず、一本の小草も育てず、生あるものの間に生きながら、一匹の蠅すら救つた覺えはない。ただ破壞し滅ぼし、そして嘘ばかりついて來たのだ。……

『俺の過去に、惡德でないものがあつたらうか』と彼は自問した。斷崖の下に落ちた者が木の蔓にとり縋るやうに、何か明るい思ひ出に縋りつかうとしながら。

中學は？　大學は？　それも誤魔化しだつた。ろくろく勉强もせず、教はつたことはみんな忘れてしまつた。社會に出てからは？　やつぱり誤魔化しだつた。役所に出ても何一つせず、ただ月給を貰つて、彼の勤めはつまり法律に觸れない醜惡な官金費消だつたではないか。

眞理は彼に不要だつた、求めもしなかつた。彼の良心は惡德と嘘とに呪縛されて、眠り込んでゐた。でなければ默つてゐた。彼は他國者のやうに、また別の遊星から傭はれて來た人のやうに、人類の共同生活に參加しなかつた。彼等の惱みにも思想にも、宗教にも學問にも、探求にも鬪爭にも、一向に無關心だつた。ただの一言だつて人々に善い事を言つたためしはなく、ただの一行でも有用な非凡なことを書いた覺えもなく、一文の値打のあることもした覺えはない。ただ彼等のパンを食ひ、彼等の葡萄酒を飲み、彼等の妻をぬすみ、彼等の思想で生活して、自分の破廉恥な寄生生活を人前にまた自分に對して繕ふため、つとめて彼等より一段高い優れた人間だといふ

やうな顔をして來ただけである。嘘だ、嘘だ、みんな嘘だ。……

昨夜ミュリドフの家で眼にしたことを彼ははつきりと思ひ出し、嫌惡と悲痛さとで堪らなく胸苦しくなつた。成る程キリーリンとアチミアーノフは唾棄すべき輩だ。しかし彼等のしたことは彼が始めたことの延長ではないか。彼等は彼の同類であり弟子なのではないか。自分を實の兄以上に信頼して呉れた若い弱い女性から、彼は夫を奪ひ、友達を奪ひ、故郷を奪つた。そして彼女を、この炎暑と熱病と倦怠の巷へ連れて來た。來る日も來る日も、彼女は鏡のやうに彼の安逸と惡德と虚僞を、自分の心に映さなければならなかつた。それだけで、ただそれだけで、彼女の弱い凋んだ慘めな生活は一杯になつてゐたのだ。やがて彼は彼女に飽き、見るのも厭になつたのだが、それでも思ひ切つて棄てるだけの勇氣は出ず、まるで蜘蛛のやうに、女をますます固く嘘で縛り上げようと一所懸命だつたのだ。……あの二人はただその仕上げをして呉れただけだ。

ライェフスキイは卓に坐つたり、また窓に寄つて見たりした。蠟燭を消して見たり、點けて見たりした。彼は聲を出して自分を呪ひ、泣き、哀訴し、赦しを願つた。絶望のあまり幾度も卓子に駈け寄つて、

『お母さん！』と書いた。

母親のほかには一人の身内も隣人もなかつた。しかし母親が何の助けになつて呉れよう？　それに母親は何處にゐるのだ？　彼はナヂェージダの所へ馳せ寄つて、その足もとに身を投げ、その手や足に接吻をして、心から彼女の赦しを願はうと思つた。が彼女は自分の犧牲で、まるで死人のやうに怖ろしい。

「生活は滅びた」と手をこすりながら彼は呟いた、「一體何のために俺はまだ生きてゐるのだ、ああ情ない！……」

光の微かな自分の星を、彼は天から突き落したのだ。星は沈み、その跡方は夜の闇に紛れ込んでしまつた。星はもう天に歸ることはあるまい。人生は一度しか與へられず、二度と繰りかへすべもないのだから。もし過ぎし歳月を今に返すことが出來るのだつたら、嘗ての日々の嘘を眞實に、安逸を勤勉に、倦怠を歡喜にかへ、自分の奪つた純潔をその人に返してやりもしよう、神と正義を見出しもしよう。しかしそれは、沈んでしまつた星をまた元の天に戻すことが出來ぬと同じく、できない相談である。それが出來ないからこそ、彼は絶望に陷つたのだ。

雷雨が過ぎてしまふと、彼は開けた窓際に坐つて、靜かにわが身に起きようとしてゐることを考へた。フォン・コトレンは恐らく自分を殺すだらう。あの男の明晰冷嚴な世界觀は、虚弱者と不適者の絶滅をよしと見る。いざといふ時にその考へが變つたとしても、このライェフスキイが彼の胸に喚び起こす憎念と嫌惡感とが、彼の決心を助けるにちがひない。またもし彼が狙ひそこ

ねるか、或ひは憎むべき敵を嘲笑するため、ただ負傷させるにとどめるか空を射つかしたら、その時はどうするか。何處へ行つたらいいのか。

「ペテルブルグへ行くか？」とライェフスキイは自分に訊ねた、「だがそれは所詮、現に俺が呪つてやまぬ怖るべき生活を、また新規にはじめるに過ぎまい。候鳥のやうに場所を變へることに救ひを求める者は、決して何一つ探し當てはしないのだ。何故ならその人間にとつて地上は何處も同じだからだ。他人の裡に救ひを求めるか。誰にどうして求めるのだ。サモイレンコの親切と寛大にしたところで、救ふ力の薄いことは、補祭の笑ひ上戸やフォン・コーレンの憎惡と何等撰ぶところはない。救ひは結局自分の裡に求めるほかはないのだが、もし見附からなければ、何で時間を徒費することが要らう。自殺、それだけだ。……」

馬車の音が聞こえて來た。もう夜が明けかかつてゐる。半幌の馬車は家の横を過ぎて向きを變へ、濕つた砂に車輪をきしめかせながら、すぐ傍に停まつた。馬車には二人乘つてゐる。

「ちよつと待つて、今すぐ行く」とライェフスキイは窓から聲をかけた、「僕は起きてるんだ。だがもう時間かね？」

「うん、四時だ。まだ大丈夫ぢやあるが……」

ライェフスキイは外套を着、制帽をかぶり、ポケットに卷煙草を入れ、さて立ちどまつて考へ

込んだ。何かまだ他にしなければならぬことがあるやうな氣がしたのである。往來では介添人が小聲で話をし、馬が鼻を鳴らしてゐる。人はまだ寢靜まつて、空がわづかに白みそめた濕つぽい夜明けに、聞こえて來るかうした物音は、ライェフスキイの胸を不吉な豫感に似た物憂さで滿たした。暫く思案顏で佇んでゐたが、やがて寢室へはいつて行つた。

ナヂェージダは格子縞の毛布に頭からくるまつて、自分の寢床に長々と寢てゐた。身動きもせず、とりわけその頭の恰好が埃及の木乃伊に似てゐた。無言で彼女を眺めながら、ライェフスキイは心の中で詫びを言ひ、もし天が空つぽなのではなく本當に神が坐すのなら、神はきつと彼女を守つて下さるだらうと考へた。もし神が坐さぬのなら彼女は滅びるがよい、このうへ生きてゐて何にならう。

彼女は急に跳ね起きて、寢床に坐つた。眞蒼な顏をあげ、怯えたやうにライェフスキイを見守りながら、彼女は訊いた。

「あなたでしたの。もう雷雨はやんで？」

「やんだよ。」

彼女ははつと思ひ出し、兩手で頭をかかへて、總身をふるはせた。

「ああ、私辛い」と彼女は口走つた、「この辛さが分かつて下すつたらねえ。私待つてたのよ」

と半ば眼をとぢて續けた、「今にもあなたが殺しにいらつしやるか、でなきや、あの雨と雷樣の中へ追ひ出しにいらつしやるかと思つて。けどあなたは、お疇踏ひになつたのね……お疇踏ひになつたのね……。」

彼は矢庭に彼女を抱きしめて、その膝や手に接吻の雨を降らせた。それから彼女が何か彼に呟いて、思ひ出にわなわなと戰くと、彼は女の髮を撫でてぢつとその顏に見入りながら、この不幸な罪の女こそ自分の唯一の隣人、親身の、かけがへのない人間であることを覺つた。

外へ出て馬車に乘つたとき、彼は生きて歸りたいとしみじみ思つた。

一八

補祭は起き上がつて服を着ると、節だらけの太い杖を手にとつて、そつと家を出た。眞暗で、通りに出てからも初めのうちは、自分の白い杖さへ見えなかつた。空には一つの星影もなく、また降りだしさうな氣配だつた。濕つた砂と海の匂ひがした。

『この分ならチェチニャ人★も襲つては來まい』と補祭は、甃石道に突いて行く杖の音が、夜の靜けさの中で高く淋しく響き渡るのに耳を澄ましながら、さう思つた。

町外れに出ると、やつと道も杖も見えだした。眞黑な空のところどころに朧ろな斑があらはれ、

間もなく星が一つ覗いて、瞳病さうに片眼で瞬きはじめた。補祭は高い岩壁のうへを辿つて行くので、海は見えなかつた。海は下の方に睡んでゐて、姿の見えぬ波が懶げに重苦しく岸をうち、まるで『うう！』と溜息をしてゐるやうだつた。また、その緩やかな調べはどうだらう。一つの波が打ち寄せてから補祭が八歩かぞへると、次の波が岸をうつた。それから六歩あるくと第三の波が打つた。やはりまるで何ひとつ眼には見えず、そして闇のなかで海の物悋い睡たげな音がして、神が混沌の上を翱つてゐた頃の、涯しなく遙かな想像すべからざる時が聞こえてゐた。

補祭は不氣味になつて來た。不信仰者の仲間入りをし、しかも彼等の決鬪をまで見に行く自分を、神が罰し給はねばよいがと考へた。この決鬪は血も見ぬ、つまらぬ滑稽なものではあらうが、それはどうあらうと所詮は異端の觀物であり、その場に居合はすことは僧侶の身として以ての外である。彼は立ちどまつて、引き返さうかと思つた。が、はげしい落ち着きのない好奇心が遲疑の念に打ち克つて、彼はまた歩きだした。

『あの連中は不信仰者ではある。が、いい人達だから救はれるに違ひない』と彼は自分の心を宥めるのだつた。「きつと救はれるだらう！」と煙草に火をつけながら、聲に出して言つた。

人を正しく判斷するには、どんな尺度で價値を測ればよいのだらう。補祭は自分の仇敵である神學校の生徒監を思ひだした。その男は神も信じ決鬪をしたこともなく、行ひ澄ましてゐたが、

いつか補祭に砂のはいつたパンを食はしたことがあるし、或る時などは危く耳を千裂りかけたことさへある。もし人間の生活が、あの無慈悲で不正直で、お官の倉をかすめてゐる生徒監をみんなして敬ひ、その健在と救ひとを學校で祈るほど甘く出來てゐるものなら、フォン・コーレンやライェフスキイを、不信仰者だといふだけで毛嫌ひするのは、果たして當を得たことだらうか。補祭はこの問題を解かうとしかけたが、急に今日見たサモイレンコの噴き出したくなるやうな顔附きを思ひ出し、お蔭で考への流れが斷ち切れてしまつた。明日はまたどんなに可笑しいことがあるだらう。補祭は空想して見た。——自分が藪かげに身をひそめて覗いてゐるところ、明日の晝飯のときフォン・コーレンが自慢話をしだす傍から、自分が笑ひながら決闘の有樣を細かに喋りだすところ。

『何だつてさう何もかも知つてるんだ』と動物學者が訊くだらう。『つまりそこが術ですよ。家に坐つてて、ちやんと知つてるんですからね。』

決闘のことを滑稽めかして手紙に書いたらさぞ面白からう。舅は讀んで腹をかかへるだらう。何しろ舅と來たら、可笑しい話を聞いたり讀んだりするのが三度の飯より好きなのだ。

黄河の谿が眼のまへに展けた。雨のため河は川幅と水勢を增して、もう此の間のやうな呟き聲ではなしに、咆え聲を立ててゐた。夜が明けて來た。灰色のどんよりした朝、そして當雨の雲に

追ひつかうと西へひた走る雲、霧を帶にした山々、濡れそぼつた樹々——何もかもが補祭には、無樣な不興顔をしてゐるやうに見えた。彼は小川で顔を洗ひ、朝の禱りを唱へると、舅の家で毎朝食事に出る酸クリームをかけた火傷しさうな揚饅頭で、お茶が飲みたくなつた。自分の妻と、彼女がピアノで彈く『かへらぬ昔』が思ひ出された。彼女はどんな女なのだらう。補祭は一週間のうちに、紹介され緣談が運び結婚したのである。そして一と月も一緒に暮らさぬうちに此處へ出張になつたので、今の今まで彼女がどんな人間なのか見當もつかずにゐるのだ。でもやはり、彼女がゐないと何となく淋しかつた。

『手紙をやらなくちや……』と彼は思つた。

居酒屋の上の旗が、雨に濡れしよぼつて垂れてゐる。居酒屋はといふと、家根が濡れてゐるせゐか、先よりも暗く低いやうに見える。扉口に荷馬車が一臺とまつてゐる。ケルバライと、何處かのアブハジヤ人が二人と、ケルバライの女房か娘と見える土耳古風のズボンを穿いた若い韃靼女とが、居酒屋から何かの袋をしきりに擔ぎ出して、玉蜀黍の藁を敷いた荷馬車に積んでゐる。荷馬車の傍に、頭を垂れて驢馬が二匹立つてゐる。袋の積み込みが濟むと、アブハジヤ人と韃靼女はその上に藁をかぶせはじめ、ケルバライはせかせかと驢馬を附けはじめた。

『拔け賣りだな、きつと』と補祭は考へた。ほらここに、かさかさに枯れた刺のある例の倒れ

木がある。焚火の黑い跡もある。ピクニックのことが何から何まで思ひ出された。火、アブハジヤ人の歌、僧正と十字架行列の甘い夢想……。黑河も雨のため黑さと川幅を增してゐる。補祭は用心しながら、濁流の鬣がもう屆きさうになつてゐる危なつかしい橋を渡り、小さな梯子を攀ぢ上つて乾小屋の中へはいつた。

『すばらしい男だ』と彼は藁の上に長々と寢て、フォン・コーレンのことを思ひ出してかう考へた、『立派な男だ。ねがはくは健在なれだ。ただどうも殘酷な所がある。』

なぜあの男はライェフスキイを憎み、ライェフスキイは彼を憎むのだらう。なぜ二人は決鬪なんかするのだらう。もしあの二人が、補祭のやうに子供の時から不自由な目に逢つて來たのだつたら、無教育で薄情で利慾に飢ゑ、一片のパンのことでも口汚なく罵り、粗野で下等で床へ唾を吐きちらし、食事中でも祈禱の時でも平氣で嚶を出すやうな、さういふ人達の間で育つたのだつたら、子供の時から惠まれた環境と選ばれた人々の間に甘やかされずに來たのだつたら、二人はどんなにお互ひに賴りあひ、めいめいの缺點を喜んでゆるし合ひ、それぞれの持前を尊重し合ふことだらう。よし外面だけの紳士にせよ、この世には實に少ないのではないか。成る程ライェフスキイは氣紛れで放埒で變な男ではあるが、まさか盜みはしまい、床へべつと唾もしまい、妻君のことを『大飯ばかりくらひをつて働かうともしねえ』と叱りもしまい、手綱で子供をぶちもし

まいし、召使に臭くなつた鹽漬肉を食はしもしまい。それだけでも寛大にしてやるには不足だといふのか。なほその上に、彼は負傷者が傷に苦しむやうに、誰よりも先づ自分でその缺點に苦しんでゐるではないか。退屈まぎれかつまらぬ誤解が因で、お互ひの裡に退化だの死滅だの遺傳だの、その他碌々分かりもせぬものを探ぐり合ふよりは、もう少し低い所へ下りて見て、その憎惡や忿懣を、街ぢうが野卑な無學さや貪慾や叱責や不潔さや、罵詈や女の金切聲やでわんわん云つてゐる方へ、向けた方がよいではないか。

馬車の軋りが聞こえて來て、補祭の思ひを破つた。彼は扉から覗いて半幌の馬車を認めた。中には三人乘つてゐる。ライェフスキイとシェシコーフスキイと、それから郵便局長である。

「ストップ」とシェシコーフスキイが言つた。

三人とも馬車から降りて、互ひに眼を見合はせた。

「向ふはまだ來てをらんな」と、シェシコーフスキイが泥を落しながら言つた、「さればさ。幕が開かぬうちに、一ついい場所を見附けに行くとしますかな。此處ぢや身動きも出來はせん。」

彼等は川上の方へ歩いて行つて、間もなく見えなくなつた。韃靼人の馭者は馬車に上がつて、首を肩へ傾げて睡り込んでしまつた。十分ほど待つてから補祭は乾小屋を出て、見附からぬやうに黑い帽子を脫ぎ、身を屈めてあたりを見廻しながら、藪や玉蜀黍の列の間を搔き分けて、川岸

を辿りはじめた。樹々や藪から大粒の滴が彼に降りかかつた。草も玉蜀黍もびしよ濡れである。

「恥だ！」と彼は、濡れて泥んこな裾を端折りながら呟いた、「かうと知つたら來るんぢやなかつた。」

間もなく人聲が聞こえ、人の姿が見えた。ライェフスキイは兩手を袖口につつ込み、前屈みになつて、森の中の小さな草地を急ぎ足で前後に歩き廻つてゐる。介添人達は岸のすぐ際に佇んで、煙草を卷いてゐる。

『をかしいぞ』と、別人のやうなライェフスキイの歩み振りを見て補祭は考へた、『まるで老人だ。』

「奴ら、無作法にも程があるぞ」と郵便局長は時計を見ながら言つた、「學者の流儀ぢや遲刻してもいいのか知らんが、僕に言はせるとこれは豚の所行といふものだ。」

シェシコーフスキイは黒い頰髯のある肥つた男だが、耳を澄ますと言つた。

「來たですぞ。」

一九

「生れてはじめてお眼にかかつたよ。何て素晴らしいんだ！」とフォン・コーレンは草地に姿

を現はすと、東の方へ兩手を差しのべて言つた、「見給へ、あの綠いろの光の條を。」

東の山巔から、二條の綠いろの光が射し出てゐて、それは實際美しかつた。日が上るのだ。

「お早う」と動物學者はライェフスキイの介添人の方へ頷いて見せ、言葉をつづけた、「遲れやしなかつたかね。」

その後から彼の介添人達がついて來た。白い夏服を着た、同じ脊丈の、とても若い二人の士官ボイコとゴヴォローフスキイと、ひどく痩せた人間嫌ひの醫師ウスチモーヴィチとである。醫者は片手に何かの包みを提げ、片手を後ろに廻してゐる。例によつて脊中にはステッキが眞直ぐに立つてゐる。包みを地面に置くと、誰にもお早うとも言はずに、明いた手も脊中に廻して草地を歩きはじめた。

ライェフスキイは、もう直きに死ぬかも知れないといふので皆の注目の的になつてゐる男の、氣苦勞と間の惡さとを感じてゐた。一刻も早く殺すか、家へ連れて行つて吳れるかして貰ひたかつた。日の出を見るのは生まれて今がはじめてである。この朝明けも綠いろの光の條も濕つぽい空氣も濡れた長靴を穿いた人々も、自分の生活にとつて要りもせぬ餘計なものに思はれ、窮屈でならなかつた。こんなものはみんな、色々な想念や良心の苛責に責められ通した苦しいその一夜と、何のつながりもないのだ。だから決鬪になる前に歸れるなら大いに有難いがと思つてゐた。

フォン・コーレンは眼に見えて興奮してゐて、それを匿さうとして綠いろの光の條に一番興味をひかれてゐる振りをしてゐた。介添人達はまごまごして、自分たちは何故ここにゐるのだ、どうすればいいのだと問ひたげに、互ひに視線を交はしてゐた。

「諸君、私はこれ以上先へ行く必要はないと考へるですな」とシェシコーフスキイが言つた、「ここで結構ですな。」

「ああ、勿論」とフォン・コーレンが同意した。

沈默が來た。歩き廻つてゐたウスチモーヴィチが、突然くるりとライェフスキイの方を向いて、息を彼の顏に吹きかけながら小聲で言つた。

「あなたには多分まだ私の條件をお傳へする暇がなかつたと思ひます。雙方とも各々十五ルーブルを私にお支拂ひ下さることになつてゐます。どつちか片方が亡くなつた場合には、生き殘つた方で全額三十ルーブルをお支拂ひ下さい。」

ライェフスキイは前からこの男と知合ひであつたが、今はじめてはつきりと、そのどんよりした眼や、剛さうな口髭や、骨ばかりの肺病やみみたいな頸を見たのだつた。これは高利貸だ、醫者ではない！　彼の息は不愉快な牛肉のやうな臭ひがした。

『世の中には隨分色んな人もあるものだ』とライェフスキイは思ひ、返事をした。

「結構です。」

醫者は頷くと再び歩きはじめたが、その樣子で見ると金が欲しいのでは決してなく、ただ憎惡から彼等にそんなことを持ち出したものらしかつた。一同は、もう始める時だ、乃至は既に始まつてゐることを終るべき時だと感じてゐたが、別に始めも終りもせずに、歩いたり佇んだり煙草を喫つたりしてゐた。生まれてはじめて決闘に立ち會ふ若い士官達は、彼等の意見によれば文官的であり無用であるこの決闘を、今になつても殆ど信用しないで、丁寧に自分の夏服をしらべたり袖を撫でたりしてゐた。シェシコーフスキイは彼等に近づいて小聲で言つた。

「諸君、われわれはこの決闘が成立せぬやう全力を盡して然るべきだと思ふですな。あの二人を和解させるのですな。」

彼は顏を赤くして言葉をつづけた。

「昨夜僕の所へキリーリンが來て、その晩ナヂェージダ・フョードロヴナと一緒にゐるところをライェフスキイに見附けられた云々といふ譯でしてな、愚痴をこぼして行つたですよ。」

「さう、僕等もその話は聞いてゐます」とボイコが言つた。

「だからまあ御覽。……ライェフスキイの手はぶるぶる顫へてをるし云々といふ譯でしてな。……あれぢやピストルも上げられんです。あの男を相手に決闘をするのは、醉拂ひかチフス患者

を相手にやるのと同じく不人情ですな。もし和解が成立せんまでも、なあ諸君、せめて決闘を延期したらどうでせうな。……かかる殘虐行爲は見るに忍びんです。」

「あなた一つフォン・コーレンと掛け合つて見たら。」

「僕は決闘の規則は知らんですし、そんなものは悪魔に吳れちまへで、別に知りたいとも思はんのですが、ひよつとしたらあの男は、ライェフスキイが怖氣づいて僕を差し向けたと思ひはすまいかな。だがまあ何とでも思はしときませう、一つ掛け合つて見るとしよう。」

シェシコーフスキイは煮え切らぬ樣子で、足が痺れでもしたやうに輕く跛を引き引き、フォン・コーレンの方へ行つた。咽喉を鳴らしながら足を運んで行くあひだ、その全身は懶さを息づいてゐた。

「ここに一つお話があるんですがな、先生」と彼は、動物學者のシャツの花模樣にぢつと瞳を凝らしながら始めた、「これはごく内々の話でしてな……私は決闘の規則は知らんですし、そんなものは悪魔に吳れちまへで、別に知りたいとも思はんのですが、そして介添人として云々といふ譯ではなしに、人間として考へるといふだけの話ですがな。」

「成る程、それで？」

「介添人が和睦をすすめても、普通はまあ用ひられずに、通り一片の形式と看做されるのが例

でしてな、つまりこれは自尊心といふだけの話ですな。しかし私はあんたに折り入つて、ひとつイヴァン・アンドレーイチの樣子に眼をとめて貰ひたいとお願ひするです。あの男は今日は調子が狂つとるです。謂はばまあ動顚して慘めな有樣ですな。あの男には不幸がありましてね。人の噂話をするのは私は忍びんのですが」とシェシコーフスキイは赤い顏をしてあたりを見廻した、「しかし決闘のゆゑにあんたにお傳へする必要があると思ふのです。昨夜のこと、あの男はミュリドフの家で、自分の奥さんがその、或る紳士と一緒なところを見たのでしてな。」

「何て汚らはしい話だ」と動物學者は呟いた。彼は蒼くなつて眉をひそめ、ペッと唾を吐いた、「ちえつ。」

下の唇がぴりぴり顫へてゐた。彼はもう先は聞きたくないと言はんばかりにシェシコーフスキイの傍を離れ、知らずに何か苦がいものを味つた時のやうに、もう一度ペッと唾を吐くと、憎悪をこめた眼附でその朝はじめてライェフスキイを一瞥した。やがて興奮と氣拙さが去ると、彼は頭を一振りして、大聲で言つた。

「諸君、何をわれわれは待つてるのかと訊きたいね。なぜ始めないのです？」

シェシコーフスキイは士官達と眼を見合はせて肩をすくめた。

「諸君！」と彼は、誰の顏も見ないで大聲で言つた、「諸君、われわれは君がたに和解をすすめ

ます。」

「手續きの方は手つ取り早く願ひたいな」とフォン・コーレンは言つた、「和解の話はもう濟んだ。そこでまだどんな手續きが殘つてゐるんです？　お早く願ひたいですな、諸君。時間は待つて呉れん。」

「しかしわれわれは依然として和解を主張するです」とシェシコーフスキイは、他人の事に容喙することを餘儀なくされた人のやうな、濟まなさうな聲で言つた。彼は顏を赤くして、片手を心臓に當てて言葉をつづけた、「諸君、われわれは侮辱と決闘との間に然るべき關係を認めぬ者です。人性の弱點として時にわれわれが互ひに與へ合ふ侮辱とこの決闘との間に、何の共通したものもないです。君がたは大學を出られた教養ある方々です。そして勿論決闘といふものに、ただただ時代遲れの空虛な形式云々といふ譯のものを、御自分で認めて居られるに違ひない。吾々は實にさういふ觀方をしてをる者であり、然らずんばここに參りはしなかつた筈です。何故ならば、われわれの面前で人間が射ち合ひをするのを許す譯には行かんといふだけの話でして。」シェシコーフスキイは顏の汗を拭つて、また續けた、「諸君、君がたの誤解を清算されて、互ひに握手をされて、手打ちの杯をあげに家へ歸らうではありませんか。全くですぞ、諸君！」

フォン・コーレンは默つてゐた。ライニフスキイは皆の視線が自分に集まつてゐるのに氣づいて言つた。

「僕としてはニコライ・ヴァシーリイチに何等含む所はないのです。もしあの人が僕が惡いと言はれるのなら、謝罪してもいいと思ひます。」

フォン・コーレンは色をなした。

「どうやら諸君は」と彼は言つた、「ライニフスキイ氏が寛大な紳士また騎士として歸宅することが御希望と見える。しかし僕は諸君及び同氏にこの滿足を與へる譯に行かんのです。手打ちの杯をあげ、むしやむしやと食ひ、決闘は時代遲れの一片の形式であるといふ說教を聽くだけのことなら、何も朝早く起きて町から十露里もあるここへやつて來る必要はなかつたのです。決闘は決闘だ。それを實質以上に愚劣化し僞瞞化してはならんのだ。僕は闘ふことを望む！」

沈默が來た。士官ボイコが函からピストルを二挺とり出し、一挺はフォン・コーレンの手に、一挺はライニフスキイの手に渡つた。そこでちよつとごたごたが起こつて、暫く動物學者や介添人達を笑ひ興じさせた。つまり居合はせた連中は誰一人として、生まれてこのかた決闘に立ち會つたことが一度もないので、どういふ具合に立つたらいいのか、介添人が何を言ひ何をなすべきかを、誰もよく知らないことが分かつたのである。が、やがてボイコが思ひ出して、にこにこしながら說明をはじめた。

「諸君、レールモントフがどう書いてゐたか、覺えてる人はないか」とフォン・コーレンが笑ひながら訊いた、「トゥルゲーネフにもバザーロフが誰かと射ち合ふところがあつたが……」

「思ひ出しても始まらんよ」とウスチモーヴィチが、立ちどまりながら苛々しげに言つた、「距離を測り給へ。それでいいんだ。」

さう言つて、恰も測り方を教へるやうに、三歩ほど歩いて見せた。ボイコが歩數をかぞへると、その同僚が刀を拔いて兩端の地面に引搔き痕をつけた。柵のつもりである。

二人の敵手は、一同の沈默のうちに位置についた。

『土龍だ』と、藪の中に坐つてゐた補祭は思ひ出した。

シェシコーフスキイが何か言ひ、ボイコが再び何か說明した。がライェフスキイの耳にははいらなかつた。もつと正確に言ふと、耳にははいつたが理解しなかつた。彼は、その時が來ると擊鐵を上げて、重い冷たいピストルの銃口を起こした。外套の釦を外すのを忘れてゐたので、肩先や腋の下がとても窮屈で、まるで袖がブリキ仕立てでもあるかのやうに、腕は如何にもぎごちなく持ち上がつた。彼は淺黑い額や縮れ髪に對する昨日の自分の憎念を思ひ出して、たとへ昨日あの烈しい憎惡と忿怒の最中でも、自分にはとても人間は射てなかつたらうと思つた。彈丸がどうかした拍子でフォン・コーレンに當つてはいけないと思ひ、彼はピストルをますます高くあげた。

そして、この餘りにも露骨な寬大は不作法でもあり、却つて寬大でないことになると感じたけれど、そのほかには手立ても仕樣もなかつた。明かに初めから相手が空を射つことを確信してゐたに違ひないフォン・コーレンの、嘲けるやうな微笑を含んだ蒼ざめた顏を見ながら、ライェフスキイは思ふのだつた——ああ有難い、もう直ぐ何もかも終りだ、ただちよつと引金に力を入れさへすればいいのだ。……

猛烈な反動が肩へ來た。銃聲がひびき、山並みの木靈が答へた、「ぱぱーん!」

するとフォン・コーレンが擊鐵を上げて、ウスチモーヴィチの方を見た。醫者は兩手を脊中に廻したまま、何事も一切知らんといふ顏で、相變らず歩き廻つてゐる。

「ドクトル」と動物學者が言つた、「ひとつその振子のやうに歩き廻るのはやめて頂きたいですな。眼がちらちらしてならん。」

醫者は立ちどまつた。フォン・コーレンはライェフスキイに狙ひをつけはじめた。

『最後だ!』とライェフスキイは思つた。

眞直ぐに顏に向けられた銃口、フォン・コーレンの姿勢にも全身にも見える憎惡と侮蔑の表情、そして今まさに一人の紳士が白晝數人の紳士の面前で行はうとしてゐるこの殺人、この靜寂、ライェフスキイを直立させたまま逃げようとさせぬ得知れぬ力——これら凡ては何と神祕的で不可

解で、怖ろしいことだらう。フォン・コーレンが狙ひを定めてゐる時間は、ライェフスキイには一夜よりも長く思はれた。彼は哀願するやうな眸を介添人達に投げた。彼等は身動きもせず眞蒼な顏をしてゐた。

『早く射てばいい』とライェフスキイは思ひ、自分の眞蒼に顫へてゐるみじめな顏は、きつとフォン・コーレンの憎念を益々大きくするに違ひないと感じてゐた。

『今殺して呉れるぞ』とフォン・コーレンは額に狙ひをつけ、既に指を引金に觸れながら思つてゐた、『さうとも、勿論殺して呉れる。』

「ああ殺す！」突然どこかひどく近い所で、必死の叫びが聞こえた。

途端に銃聲がひびいた。ライェフスキイが倒れず元の位置に立つてゐるのを見ると、一同は叫び聲の起こつた方角に眼を轉じて、補祭の姿を認めた。彼は蒼い顏をして、濡れた髪の毛を額や頰にべつとりと粘りつかせ、全身びしよ濡れ泥だらけで向ふ岸の玉蜀黍の中に立つて、何だか變な笑顏を見せながら濡れた帽子を振つてゐた。シェシコーフスキイは嬉しさに笑ひだしたが、やがて泣き出してその場を離れた。

二〇

それから暫くたつて、フォン・コーレンと補祭は橋の畔で一緒になつた。補祭は興奮してゐて、苦しさうに息をし、相手の眼を見るのを避けてゐた。自分の臆病さも恥かしかつたし、泥だらけの濡れた服も恥かしかつた。

「あんたが殺すつもりでゐるやうに見えたんですよ」と彼は呟いた、「あれは實に人間の本然に悖つたことですね。實に不自然極まることですね。」

「だが何だつて君はやつて來たんだい」と動物學者は訊いた。

「それを訊かないで下さい」と補祭は手を振つて、「惡魔が誘つたんです、行け、行け、つてね。……でやつて來たんだが、怖ろしさの餘り危く玉蜀黍の中で死ぬ所でしたよ。……だがまあ、有難い、有難いことだ。……僕はあなたがすつかり氣に入つちまひましたよ」と補祭は呟いた、「饕餮蜘蛛爺さんもさぞ滿足でせう。……可笑しい、こんな可笑しいことはない。だがこれは斷つてのお願ひですが、僕の來たことは誰にも言はないで下さいね。でないと上役にどやしつけられますからね。補祭は介添人たりし、とか何とか言ひますからね。」

「諸君」とフォン・コーレンが言つた、「補祭君は、諸君がここで彼を見掛けたことを誰にも言はんで貰ひたいさうです。困ることがあるらしい。」

「ああ、實に人間の本然に悖つたことだ」と補祭は溜息をついた、「僕のしたことを許して下さ

いね、だつて先刻のあなたの顏では、こりやきつと殺すと思つたもんでね。」

「僕には、あの卑劣漢の息の根をとめて呉れようといふ强い誘惑があつた」とフォン・コーレンは言つた、「が、君がすぐ手許であんな聲を出すもんだから、狙ひが狂つちまつた。とにかく面倒な手順は慣れんので實に厭なものだね。僕は草疲れちまつたよ、補祭君。もうすつかりへとへとだ。一緒に乘つて歸らう。……」

「いや、僕は歩いて歸らせて下さい。乾かしちまはないと、ぐしよ濡れで凍えさうなんです。」

「ぢや、好きにし給へ」とへとへとになつた動物學者は、馬車に乘ると眼をとぢながら、だるさうな聲で言つた、「好きにね。……」

皆が馬車の傍を歩いたり乘り込んだりしてゐるあひだ、ケルバライは道傍に立つて兩手を腹に當てながら、低いお辭儀をしては齒を見せるのだつた。且那方は風景をたのしんでお茶を上がりに來られたのだと思つてゐたので、なぜ皆が馬車に乘り込むのか合點が行かなかつた。一同の沈默のうちに馬車の列は動き出して、居酒屋の傍には補祭が一人のこつた。

「家(うち)へはいる、茶を飲む」と彼はケルバライに言つた、「私たべたいある。」

ケルバライはロシヤ語を上手に操る。しかし補祭は、韃靼人には破格(ブロークン)なロシヤ語の方が通りがよからうと思つたのだ。

「卵を燒く、チーズを呉れる。……」

「さあさ、おはいり、坊樣」とケルバライがお辭儀をしながら言つた、「みんな差し上げます。……チーズもある、葡萄酒もある。……何なと好きなものを召し上がれ。」

「韃靼語ぢや、神のことを何といふね」と補祭は居酒屋へはいりながら訊いた。

「あんたの神樣も私の神樣も同じでございますよ」と質問の意味が呑み込めないでケルバライは言つた、「神樣は誰のも一つですが、人間だけがさまざまあります。或るひとロシヤ人、或るひと土耳古人、或るひと英吉利人、いろいろの人ありますが、神樣は一つです。」

「よろしい。もしあらゆる國民が唯一の神を拜するものならば、何故君たち回教徒はキリスト教徒を永遠の敵と見てゐるのかね?」

「何をお怒りになります?」とケルバライは兩手を腹に當てて言つた、「あんたは坊樣、私は回教徒、あんたは食べたいと仰言る、私は差し上げる。……お前の神はどうの、俺の神はどうのと喧ましい事を言ふのはお金持だけで、貧乏人には何も同じことでございますよ。どうぞ食(あが)りなさいまし。」

居酒屋で神學問答が行はれてゐる一方では、ライェフスキイが家路を馬車に搖られながら、回想するのだつた。夜明けにこの道を搖られて來たときには、道も岩膚も山並みも濡れて眞暗で實

に胸苦しい思ひがし、知られざる未來のことが底の見えぬ深淵のやうに怖ろしく思はれた、が今では、草や石にとまつてゐる雨の滴が日を受けて金剛石のやうにきらめき、自然は嬉しさうに微笑んで、怖ろしい未來も後方へ去つてしまつた。……彼はシェシコーフスキイの泣きはらした不機嫌な顏を眺め、またフォン・コーレンやその介添人達や醫者を乘せて前を行く二臺の馬車の方を眺めた。そしてまるで、皆の生活の邪魔ばかりする厄介至極な鼻持ちのならぬ人間を今しがた葬つて、墓場からみんなで歸る所のやうな氣がした。

『何もかも終つた』と彼は過去を思つてさう考へた。指さきでそつと頸を撫でながら。

右の頸筋の丁度カラーの邊に、小指ほどの長さと太さのみみず腫れが出來てゐた。そして頸筋へ燒鏝でも當てられたやうにひりひり痛んだ。彈丸がかすつたのである。

やがて家へ歸り着くと、彼にとつては長い、不思議な、甘い、そして假睡のやうに朦朧とした一日が訪れた。彼は牢獄か病院から出て來た人のやうに、久しく見馴れてゐる物にぢつと見入つて、卓子や窓や椅子や光線や海が、絶えて久しい間覺えたことのない子供のやうな生き生きした歡びを、胸に呼び醒ますのに驚くのだつた。蒼ざめてひどく面窶れのしたナヂェージダ・イヴァーノヴナは、男の物柔しい聲や妙な態度に合點が行かず、急いで自分の身に起こつた一切を物語つた。……男はきつとよく聞こえないので話が分からないのに違ひない、と彼女には思はれた。

もしすつかり分かつたのなら、彼女に呪ひの言葉を浴びせかけ、殺さうとするに違ひないのに。けれど男は彼女の言葉に耳を傾けて、顏や髪を撫で、ぢつと眼に見入りながら言ふのだつた。

「僕にはお前のほかに誰もゐないのだ……」

それから二人は長い間、ぴつたりと寄り添つて小庭に坐つてゐた。二人は默つてゐるか、さもなければ自分達の未來にある幸福な生活を夢み語り、短いきれぎれの言葉を口にした。そして彼は、自分が今まで一度も、こんなに長い美しいお喋りをしたことはないやうな氣がした。

二一

三月あまり過ぎた。

フォン・コーレンが出發することに定めてゐた日が來た。朝はやくから大粒の冷めたい雨が降つて、北東の風が吹き、海は大きなうねりを立ててゐた。こんな天氣では、汽船はとても錨地まではいるまいといふ話だつた。時間表によると船は午前十時前に這入つてゐなければならなかつたが、フォン・コーレンが正午と晝飯のあとに海岸通りへ出て見たけれど、雙眼鏡にうつるものは灰色の浪と、水平線を包む雨の外には何もなかつた。

日暮れ近くなつて雨はやみ、風も著しく鎭まりはじめた。フォン・コーレンは今日はもう發て

まいと諦めて、サモイレンコと象棋を指しはじめた。ところが暗くなつてから從卒が來て、沖に燈火があらはれ、狼火が見えたと報告した。

フォン・コーレンは周章てだした。彼は小さな嚢を肩にかけ、サモイレンコや補祭と接吻を交はし、別に用もないのに部屋部屋を覗いて廻り、從卒や料理女に別れを告げ、何かしら軍醫の所か自分の家に忘れ物をしたやうな氣がしながら、往來へ出た。往來では彼はサモイレンコと並んで行き、その後ろに箱を抱へた補祭がつづき、一番あとから從卒がトランクを二つ携げてついて行く。沖の微かな燈火が見分けられるのはサモイレンコと從卒とだけで、他の二人は暗闇に眼を凝らしても何も見えなかつた。船はずつと沖合ひに錨を下ろしたのである。

「早く、早く」とフォン・コーレンがせかせかした、「出られちまつたら事だぞ。」

ライェフスキイが決鬪後に間もなく引越して來た窓の三つある小さな家の前にかかると、フォン・コーレンは窓を覗いてみずには居られなかつた。ライェフスキイは向ふむきに脊を丸くして机にかじりついて、書き物をしてゐた。

「どうも驚くね」と動物學者は小聲で言つた、「すつかり自分を縛り上げちまつたんだね。」

「うん、全く驚嘆に値ひする」とサモイレンコは嘆息した、「ああして朝から晩まで坐り通しに坐つて、こつこつやつてるんだ。借金を拂ひたい一心にね。暮らしと來たら、君、乞食よりひど

いんた。」

半分間ほど沈默のうちに過ぎた。動物學者も軍醫も補祭も窓の下に立つて、ぢつとライェフスキイを見守つてゐた。

「ああして到頭出發しなかつたんだ、可哀さうに」とサモイレンコが言つた、「憶えてるだらう、どんなにあの男がやきもきしてゐたか。」

「ふむ、ひどく自分を縛り上げちまつたもんだ」とフォン・コーレンは繰り返した、「結婚はする、ああして一日ぢう一片のパンのために仕事はする、顏には何か新しい表情が見えるし、態度までが——これは總べてあまり變り過ぎてゐて僕にはどう呼んでいいか分からん」——動物學者はサモイレンコの袖を捉へて、感動した聲でつづけた、「君、僕が發つとき二人のことを驚嘆して、宜しく言つたと、あの男にも妻君にも傳へて呉れ。……そして、もし出來るなら僕のことを悪く思はんやうに賴んで呉れ。あの男は僕の氣持を知つてるんだ。あのとき僕がかうした變化を豫見できたら、きつと彼の一番の親友になつただらうことを、あの男は知つてるんだ。」

「いつそ寄つて、さよならを言つて來いよ。」

「いや、それは困る。」

「なぜ困る。もうこれつきりあの男に逢へんかも知れないぞ。」